仲間後原近世墓群

浦 添 貝 塚

浦添大公園整備事業に伴う発掘調査報告書

2009 年 3 月

浦添市教育委員会

仲間後原近世墓群（左から１号墓、２号墓、３号墓）

シルヒラシから出土した獣骨（３号墓）

浦添貝塚（竪穴状遺構）

浦添貝塚（竪穴状遺構内から出土した嘉徳Ｉ式Ａ土器）

序　文

本調査報告書は、浦添大公園整備に先立ち沖縄県中部土木事務所の委託を受けて浦添市教育委員会が実施した仲間後原近世墓群、浦添貝塚の発掘調査成果をまとめたものです。

浦添大公園は昭和43年に都市計画が決定された県営の総合公園で、総面積37.4ヘクタールの広大な公園です。公園はA~Cの3ゾーンに分かれており、Aゾーンは浦添グスクを題材として浦添のみならず沖縄のたどってきた歴史を理解するための「歴史学習ゾーン」、Bゾーンは子どもからお年寄りまでそれぞれの目的で活動できる「ふれあい広場ゾーン」、Cゾーンは自然観察会や各種イベントを開くことができる「憩いの広場ゾーン」として位置づけられています。これら三つのゾーンのうち、CゾーンとBゾーンについては既に供用が開始されており、現在はAゾーンの設計や整備が進められています。

今回報告する仲間後原近世墓群は浦添市仲間および伊祖に、浦添貝塚は伊祖に所在しています。仲間後原近世墓群の調査では、同地域の古琉球から近世にかけての墓の様相の一端を明らかにすることができました。また、県指定史跡として著名な浦添貝塚の発掘調査では、今回の調査によって遺跡の範囲がより広範であったことが判明するなど、多くの成果が得られています。

本書が今後の学術研究や歴史学習の資料として、さらには文化財愛護思想の普及に活用されることを期待しております。末筆になりましたが、発掘調査ならびに整理作業にご指導・ご助言いただきました諸先生方に厚くお礼申し上げますとともに、事業の円滑な運営にご尽力くださった皆様に心から感謝申し上げます。

平成21年3月

浦添市教育委員会
教育長 西　原　廣　美

例　言

1. 本報告書は、沖縄県浦添市仲間・伊祖にまたがって所在する仲間後原近世墓群、同伊祖に所在する浦添貝塚崖上地区の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、県営浦添大公園整備に伴うもので、沖縄県土木建築部中部土木事務所からの委託事業として浦添市教育委員会文化課が実施した。

3. 本文の執筆分担は目次に示した。編集については渡久地が行った。

4.1969・1970 年実施の浦添貝塚の調査や現場周辺の状況等について、新田重清氏に当時のお話を伺った。石材の同定については大城逸朗氏（本市文化財調査審議会会長）にお願いした。記して感謝申し上げます。

5. 発掘調査および整理作業の実施には、以下の臨時職員が参加した。
大城竜也（現：豊見城市教育委員会）・稲福大吾・浦崎祐子・小栗英輝・岸本麻希・喜納政英（現：㈱EAC）・金城 薫・金城礼子・古波蔵保直・下地サヨ子・新城茂人・高松弥生・澤岻永子・田鍋真由美・當山俊行・中所亜紀・仲村和弘・西垣理恵子・濱本若子・廣木ゆかり・北條真子・比嘉美智子・比嘉祐賢・宮城みさ子・銘苅さつき・外間華奈子

6. 本調査に関わる出土遺物、実測図や写真などの調査記録は浦添市教育委員会文化課において保管している。広く利用されることを希望する。

凡　例

1. 本書で表示している北は座標北を示す。

2. 改正測量法が施行された平成14年4月以前の調査であるため、座標値は日本測地系を用いている。

3. 基準高は全て海抜高を用い、メートル単位で表示した。

4. 遺構番号については、調査時および調査後に調査区ごとに付した番号を使用している。番号は1番から機械的に付与したため、遺構の時期や性格などに対応するものではない。

5. 遺構実測図は、対象により適宜縮尺を変えて掲載し、図ごとにスケールで表示した。

6. 遺物番号は1番から通し番号を付与した。本文・挿図・写真図版の番号は一致する。

7. 遺物実測図の縮尺は原則として蔵骨器は1/6、その他は1/2であるが、必要に応じて異なる縮尺を用い、その旨をスケールで表示した。

8. 引用・参考文献は、各章や節の末尾に記した。

目　次

巻頭図版
序 文
例 言
凡 例
I. 浦添大公園について ……（仁王浩司）1

II. 仲間後原近世墓群 ……（仁王浩司）5
位置と環境 ……7
調査の経緯と経過 ……7
調査体制 ……7
1 号 墓 ……9
2 号 墓 ……9
3 号墓 ……10
5 号墓 ……10
まとめ ……38

III. 浦添貝塚崖上地区 ……39
第 1 章 遺跡の位置と環境……（松川 章）41
第 1 節 位置と自然的環境 ……41
第 2 節 歴史的環境 ……41
第 2 章 浦添貝塚崖上地区（その 1）……（渡久地政嗣）44
第 1 節 調査の経緯 ……44
第 2 節 調査の経過 ……44
第 3 節 層 序 ……45
第 4 節 遺 構 ……47
第 5 節 出土遺物 ……47
第 6 節 まとめ ……49

第 3 章 浦添貝塚崖上地区（その 2）……（松川 章）50
第 1 節 調査の経過 ……50
第 2 節 層 序 ……50
第 3 節 遺 構 ……53
第 4 節 遺 物 ……54

図版 ……59
報告書抄録 ……87

挿図目次

第１図　浦添大公園の位置…… 3
第２図　浦添大公園内の文化財…… 4
仲間後原近世墓群
第３図　仲間後原近世墓群 1~5 号墓位置図… 8
第４図　ピット A・B 平・断面図…… 11
第５図　ピット A・B 出土遺物……11
第６図　１～３号墓 調査区平面図……12
第７図　１号墓 平面図……14
第８図　１号墓 1. 正面図 2. 西壁図……15
第９図　１号墓 1. 墓室横断面見通し図
2. 墓室平面図 3. 縦断面図
4. 墓室上横断面図
5. 墓庭横断面図
6. 通路縦断面図……16
第 10 図　２号墓 平面図 ……18
第 11 図　２号墓 1. 正面図 2. 西壁図……19
第 12 図　２号墓 1. 墓室横断面見通し図
2. 墓室平面図 3. 縦断面図
4. 墓室上横断面図
5. 墓庭横断面図
6. 脇墓平面図……20
第 13 図　３号墓 平面図……22
第 14 図　３号墓 1. 正面図 2. 西壁図……23
第 15 図　３号墓 1. 墓室横断面見通し図
2. 墓室平面図 3. 縦断面図
4. 墓室上横断面図
5. 墓庭横断面図
6. 脇墓横断面図
7. 脇墓平面図……24
第 16 図　５号墓 平面図……26
第 17 図　５号墓 1. 正面図 2. 墓室平面図
3. 墓室横断面見通し図
4. 脇墓平面図 1
5. 脇墓平面図 2……27
第 18 図　５号墓 1. 縦断面見通し図（東壁）
2. 縦断面見通し図（西壁）… 28
第 19 図　出土遺物 1……33
第 20 図　出土遺物 2……34
第 21 図　出土遺物 3……35
第 22 図　出土遺物 4……36
第 23 図　出土遺物 5……37
浦添貝塚崖上地区（その 1）
第 24 図　遺跡分布図……42
第 25 図　浦添貝塚調査範囲図……43
第 26 図 層 序……46
第 27 図　竪穴状遺構 平断面図……47
第 28 図　出土遺物 土器実測図……48
浦添貝塚崖上地区（その 2）
第 29 図　調査区遺構分布図……51
第 30 図　南北畦西壁の層序……52
第 31 図　ピット状遺構……53
第 32 図　石器……54
第 33 図　施釉陶器……55
第 34 図　無釉焼締陶器……57
第 35 図　陶質土器……58
第 36 図　円盤状製品……58

挿表目次

表１ 遺物観察表（沖縄産施釉陶器）…… 30
表２ 遺物観察表（厨子甕蓋）…… 31
表３ 遺物観察表（厨子甕身）…… 32
表４ ピット状遺構計測表…… 53

図版目録

巻頭カラー
上 仲間後原近世墓群
下 シルヒラシから出土した獣骨
上 浦添貝塚（竪穴状遺構）
下 浦添貝塚（竪穴状遺構内から出土した嘉徳Ⅰ式A土器）

仲間後原近世墓群

図版 1 上 調査区全景
下 調査区全景
図版 2 上 1 号墓（上方より）
下 1 号墓（正面より）
図版 3 上 1 号墓 墓庭東側壁
下 1 号墓 墓庭西側壁
図版 4 上 1 号墓 墓室内棚
下 1 号墓 墓室内シルヒラシ
図版 5 上 2 号墓（上方より）
下 2 号墓（正面より）
図版 6 上 2 号墓 墓庭西側壁
下 2 号墓 墓室内
図版 7 上 3 号墓（上方より）
下 3 号墓（正面より）
図版 8 上 3 号墓 墓庭西側壁
下 3 号墓 カビアンジ内　遺物出土状況
図版 9 上 3 号墓 墓室内シルヒラシ
獣骨出土状況
下　同 上
図版 10 上 3 号墓 墓室ピット A 検出状況
下　同 上
図版 11 上 3 号墓 墓室内
下 2 号墓の前ピット B 検出状況
図版 12 上 5 号墓 全景
下 5 号墓 カビアンジ
図版 13 上 5 号墓 墓庭西側壁
下 5 号墓 墓庭東側壁
図版 14 出土遺物
図版 15 出土遺物
図版 16 出土遺物
図版 17 出土遺物
図版 18 出土遺物
図版 19 出土遺物

浦添貝塚崖上地区（その 1）

図版 20 上 遠景（北東より）
中 近景（南東より）
下 層序（トレンチ 1 西壁）
図版 21 上 ピット検出状況
中 ピット検出状況
下 ピット検出状況
図版 22 上 出土遺物
下 出土遺物

浦添貝塚崖上地区（その 2）

図版 23 上 除草前の状況（北から）
中 除草後の状況（南から）
下 調査地全景（南から）
図版 24 上 層序（南北畦の東壁）
中 層序（東西畦の北壁）
下 ピット状遺構発掘状況
図版 25 片刃石斧 (1)、磨石 (2)、施釉陶器 (3~9)
図版 26 無釉陶器 (1~7)、陶質土器 (8~10)、円盤状製品 (11~13)

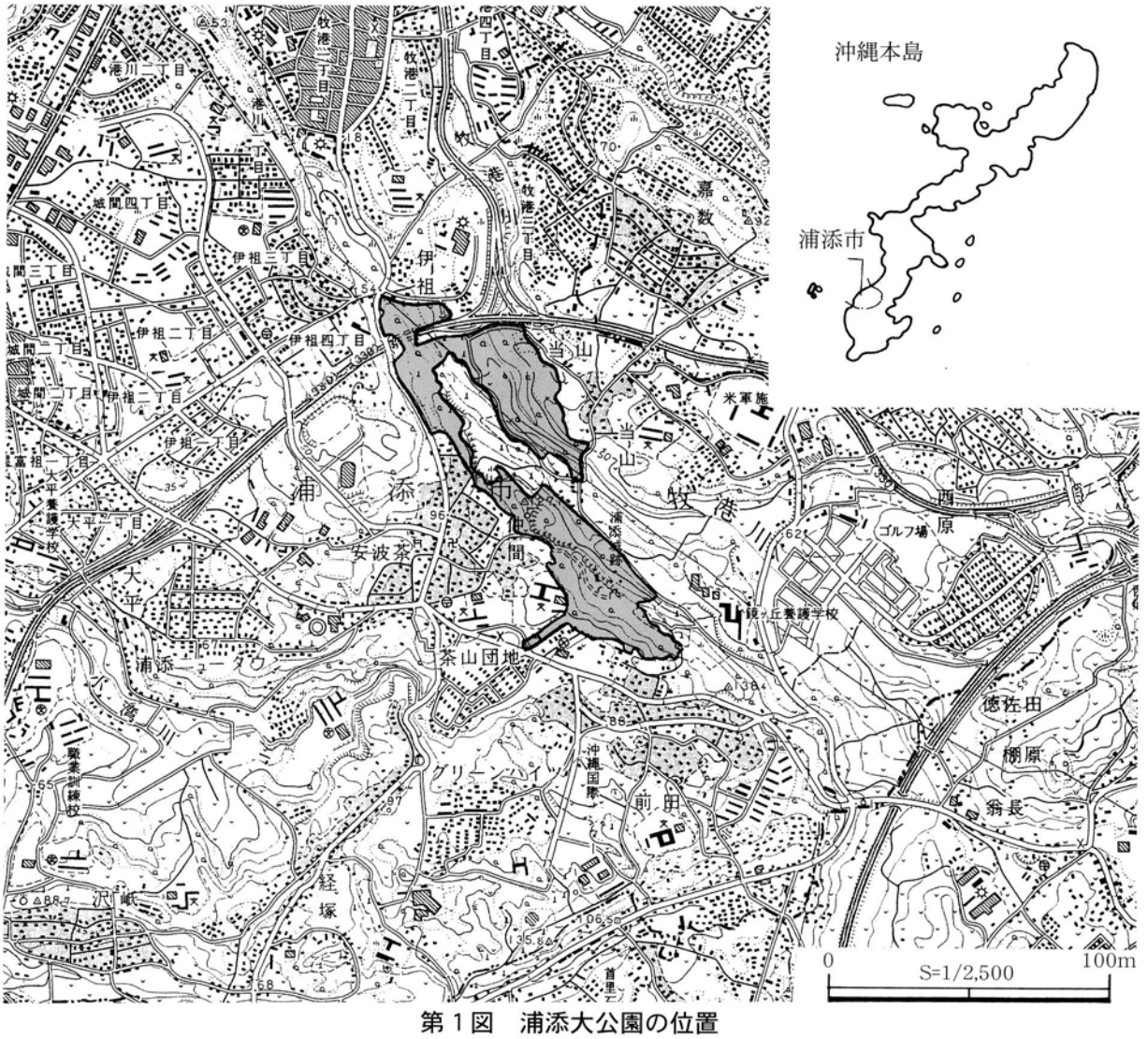
Ⅰ．浦添大公園について

浦添大公園について

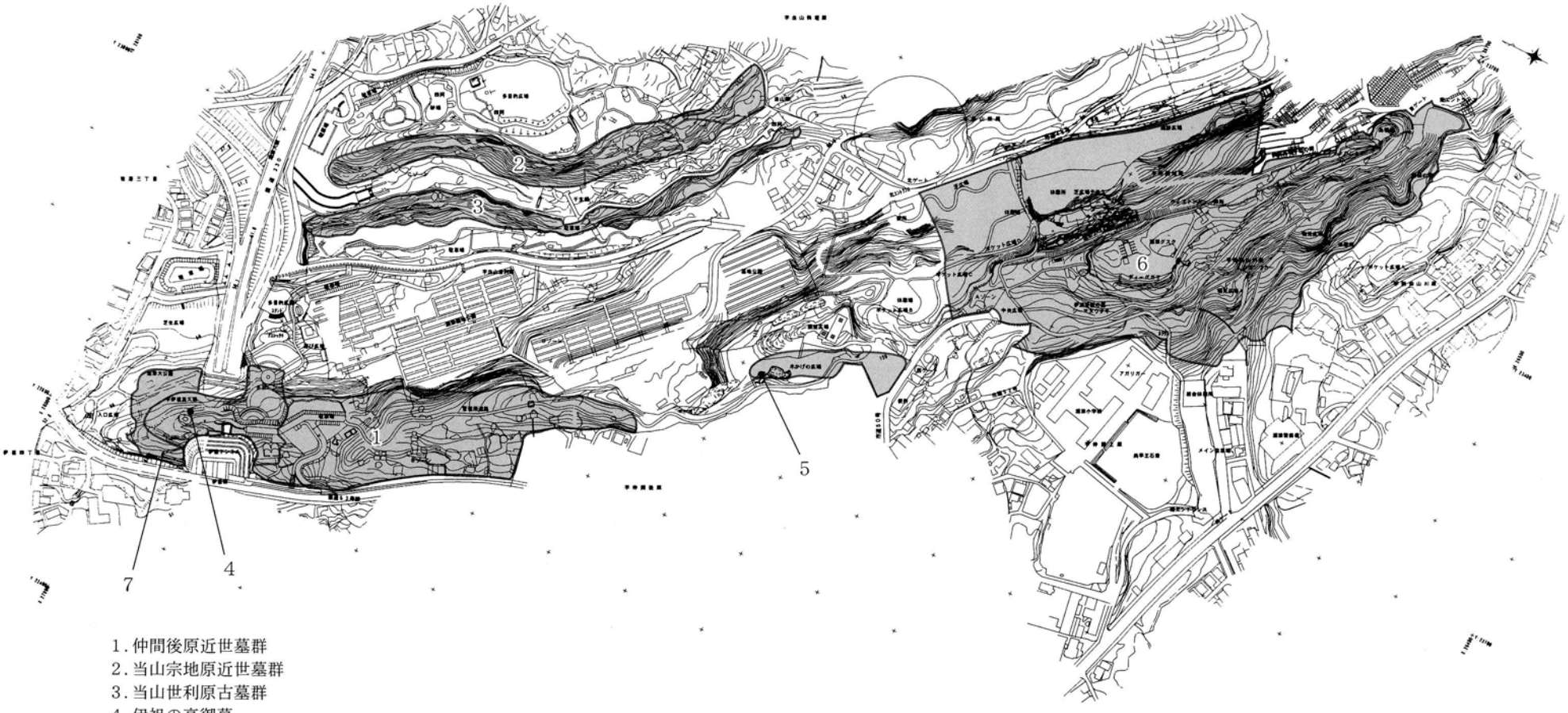
浦添大公園は浦添市の仲間と当山、伊祖の３つの字にまたがる広大な県営公園で、面積は 37.4ha である。地理的には浦添断層崖の北東部分にあたる丘陵と、その北側に平行する牧港川の両岸を含む地域であり、北東端には浦添グスクを取り込む。標高は最も高いところで 148m を測り、浦添市内においても最も高いところに位置することから、公園からの眺望は極めて良好である。すなわち、眼下には宜野湾市の市街地がひろがり、晴れた日には慶良間諸島や残波岬まで望むことができる。

公園内は３つのゾーンに画されており、それぞれ歴史学習ゾーン（A ゾーン）、ふれあい広場ゾーン（B ゾーン）、憩いの広場ゾーン（C ゾーン）に区分けされている。A ゾーンは浦添グスクとその周辺を含む地域 17.18ha であり、浦添グスクの散策を通じて沖縄の歴史を学べる場とすることを目的とした整備が計画されている。また、B ゾーン（8.56ha）はおおむね浦添グスクから北西側の浦添断層崖上を、C ゾーン（11.66ha）は牧港川とその両岸を占める地域であり、前者は子供から老人までが楽しめるスペースとして、後者は自然観察やイベントに供するスペースとして位置づけられている。

公園内には、A ゾーンの核をなす浦添グスク（国指定史跡）をはじめ、浦添貝塚（県指定史跡）、伊祖の高御墓（県指定建造物）、仲間後原遺跡、当山世利原古墓群、当山宗地原近世墓群、仲間後原近世墓群など、今も史跡や歴史的遺産が数多く残されている。



第１図　浦添大公園の位置



1. 仲間後原近世墓群
2. 当山宗地原近世墓群
3. 当山世利原古墓群
4. 伊祖の高御墓
5. 仲間あさと原の印部土手
6. 浦添城跡
7. 浦添貝塚

0　S=1/7,000　300m

第２図　浦添大公園内の文化財

Ⅱ．仲間後原近世墓群

位置と環境

仲間後原近世墓群はＢゾーン内に位置する。平成２年刊行の『浦添市文化財悉皆調査報告書』によると、この近世墓群には「亀甲墓８基、破風墓２基、平葺墓５基、掘込墓３基、家型墓５基等」が存在し、戦前からの「かなり古い墓」であるとされる。

浦添大公園内の県指定建造物である伊祖の高御墓は伊祖真久原に所在するが、仲間後原近世墓群と同一の丘陵に位置するため、この近世墓群の北端に位置するとみなすことができる。伊祖の高御墓は英祖王の父である恵祖世主と三人の按司の骨が納められているといわれ、掘り込んだ崖面の前面に石垣を積むという、古い形式が残る墓として知られる。

伊祖の高御墓周辺には崖面を掘りこんで造られた墓がいくつか存在するが、『浦添市文化財悉皆調査報告書』に掲載された仲間後原近世墓群の略図には反映されていないため、近世墓群の墓の総数は更に増えるものとみられる。

調査の経緯と経過

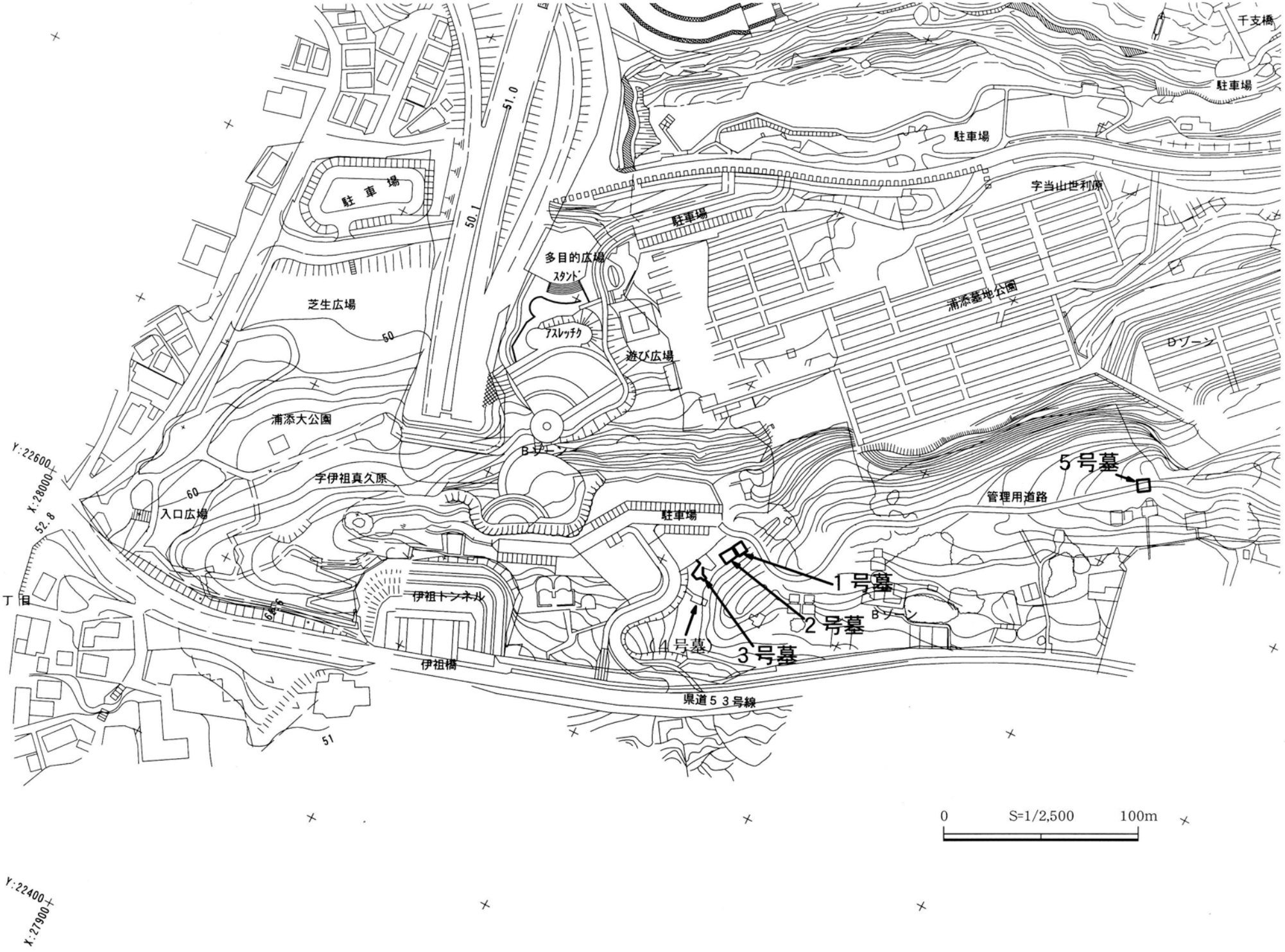
１～３号墓　1999 年（平成 11 年）度に発掘調査を実施した。これらの墓は浦添大公園のＢゾーンからＡゾーンへとつなぐ園路上に位置していたことから調査の対象となったものである。掘削作業や実測は 1999 年 11 月８日から翌年２月 15 日まで行い、３月 15 日にはラジコンヘリコプターによる写真測量を行った。なお、発掘調査中に１～３号墓の西に隣接して墓の痕跡を確認し、４号墓と命名したが、既に完全に破壊されていたうえ園路のルートからも外れていたため、発掘調査は行っていない。

５号墓　2001 年（平成 13 年）度に実施した。この墓も１～３号墓と同じく、ＢゾーンからＡゾーンへとつなぐ計画園路上に位置していたことから調査の対象となったものである。しかしながら、中部土木事務所との調整の結果 EPS 軽量盛土工法により墓庭部分を嵩上げした状態で保存がはかられることとなったため、トレンチ掘削以外の掘削は行っていない。作業は 2002 年（平成 14 年）1 月４日から１月 25 日まで手実測にて行った。

調査体制

調査の体制は下記のとおり。

調査主体	浦添市教育委員会	教　育　長	宮城　清（平成 11 年度）
			大盛永意（平成 13 年度）
事業所管	教育部文化課	課　　長	安里　進
事業調整	教育部文化課	グスク整備係長	松川　章
調査員	教育部文化課	グスク整備係	仁王浩司
発掘作業	浦添市シルバー人材センターから派遣		



第3図　仲間後原近世墓群1～5号墓位置図

1号墓

石灰岩丘陵を掘り込んで造った平葺墓（ヒラフチバカ）である。墓の造りとしては、まず石灰岩岩盤を掘り窪めて墓庭とし、次に岩盤に横穴を掘りこんで墓室を造り、最後に墓正面や側面、上部に石灰岩による石垣を積んでいる。墓口は北西に向かって開口する。

墓庭の出入口は2号墓と共有しており、あわせて5段の小段が確認できる。墓庭は縦5.2m、横5.2m。屋根は2列の切石で方形に囲い、一部では更に外側に切石を並べている。内側切石の内部に石灰岩の小礫を充填しているが、庇の裏側は拳大のやや大きな石灰岩礫を使用している。屋根の平面形状をみると、角が直線的に造られるのが特徴的である。庇には差し渡し2.2mの巨大な石灰岩が使用されている。

墓の正面は大型の切石を使用しており、特に墓口上位のものは縦1.1m×横2.4mの巨大な一枚石を用いているが、右上方は人頭大の石で積まれていることから、沖縄戦で破壊された後に修復されたものと考えられる。調査以前、墓の正面はコンクリートで補修されていたが、それを除去するとオリジナルの石灰岩切石に多数の銃弾痕が認められた。墓口は縦1.0m×横0.6mの縦長の長方形である。墓庭側壁の石垣は差し渡し30～50cmの切石によって積まれる部分と人頭大の自然石によって積まれる部分があり、後者が前者の上に積み上げられている。正面向かって左の側壁は中央部分で大きく崩れており、沖縄戦での破壊を伺わせる。正面向かって左の側壁は、墓造営時に積まれた切石を延長する形で自然石や切石が雑然と積まれており、後代に2号墓との区域分けを強調するために仕切られたことを物語っている。

墓室は幅2.1m、奥行き2.4m、シルヒラシから天井までの高さは1.7mである。平面形は縦長の長方形、横断面形は横長の長方形である。棚は正面に3段、左右に1段設けられており、縁石として石灰岩切石を並べ、内側に石灰岩を粉砕した石粉を充填している。シルヒラシの平面形は縦1.1m×横1.1mの正方形をなしており、内部は差し渡し5cmの石灰岩礫で充填された後、石粉が敷き詰められている。シルヒラシを充填する石灰岩礫に混じって蝋状の物質(28)が出土した。墓室内の壁や棚の継ぎ目には漆喰が塗られている。

サンミデーの正面向かって左隅にはカビアンジが造られている。

2号墓

平葺墓で、造りはおおむね1号墓と同様である。墓室正面向かって左隣は大きく崩れており、沖縄戦時に破壊されたものと考えられる。墓庭は縦4.9m、横7.1mであるが、墓室付近の幅は4.6mと狭くなる。

屋根は2列の切石を方形に囲い、その外側を更に石列で囲んでいる。屋根の平面形状のうち特に奥の石列は二重構造とも言うべき配石となっている。すなわち、隅を曲線的に造る石列の手前に直線的な石列が配されており、後者が前者を切っているのである。このことは、もともと隅に丸みを持つ構造であった屋根を、後代に直線的に作り替えたことを示しているものと考えられる。庇には差し渡し1.2mほどの比較的大きな板状石灰岩が3枚使用されている。

墓の正面は大型の切石を使用しているが、1号墓のものと比べるとやや小さい。切石には多数の銃弾痕が認められる。墓口は縦1.0×横0.5m。墓庭側壁の石垣は切石によって積まれており、正面向かって右側の側壁には脇墓が口を開けている。脇墓入口は縦0.5m×横0.3mで、内部は幅0.8m、奥行き0.6m、高さ0.8mである。墓室は幅2.1m、奥行き2.5m、シルヒラシから天井までの高さは1.5m

を測る。沖縄戦によってやや破壊されているものの、サンミデーの正面向かって左隅にはカビアンジの痕跡が残る。

3号墓

おおむね1号墓と同様の造りをした平葺墓である。墓庭は縦4.6m、横5.8mで、正面向かって左側は石灰岩岩盤が露出しているためか段をなしている。墓庭の出入口は墓庭の北東隅に造られており、石灰岩切石による段が3段認められる。屋根は2列の切石を方形に囲っているが、隅が丸みを帯びた配石となっている。1号墓と2号墓に認められる「更に外側の石列」はこの墓にはみられない。庇は1号墓、2号墓と異なり、差し渡し50cmほどの比較的小さな石灰岩6個が使用される。

墓の正面は大型の切石を使用しており、特に墓口上位の切石は縦1.2×横3.4mと、1号墓のそれを凌駕している。切石には銃弾痕が認められる。墓口は縦0.9m×横0.6m。墓庭側壁の石垣は切石によって積まれており、墓庭北西隅には脇墓がある。脇墓入口は縦0.5m×横0.5mで、内部は幅0.8m、奥行き0.9m、高さ0.9m。墓室は幅2.1m、奥行き2.3m、シルヒラシからの高さは1.9mを測る。サンミデーの正面向かって右側にはカビアンジが造られており、内部からは灯明皿(4)が出土した。

3号墓における特筆すべき遺構として、墓庭の埋納遺構(ピットA)と墓室内シルヒラシの獣骨埋納がある。ピットAは墓庭の北西隅に位置する。直径40～45cm、深さ7cmの円形ピットの中から、カラカラ(11)、刀子状金属製品(31)、陶製キセルの吸い口(23)が出土した。

獣骨(偶蹄目イノシシ科)はシルヒラシの造成土から出土した。シルヒラシは直径5cmほどの石灰岩礫を詰めた後に石粉を敷き詰めて造成してあるが、この獣骨は石灰岩礫に混じって、墓口に先端を向けた状態で出土した。

1～3号墓その他

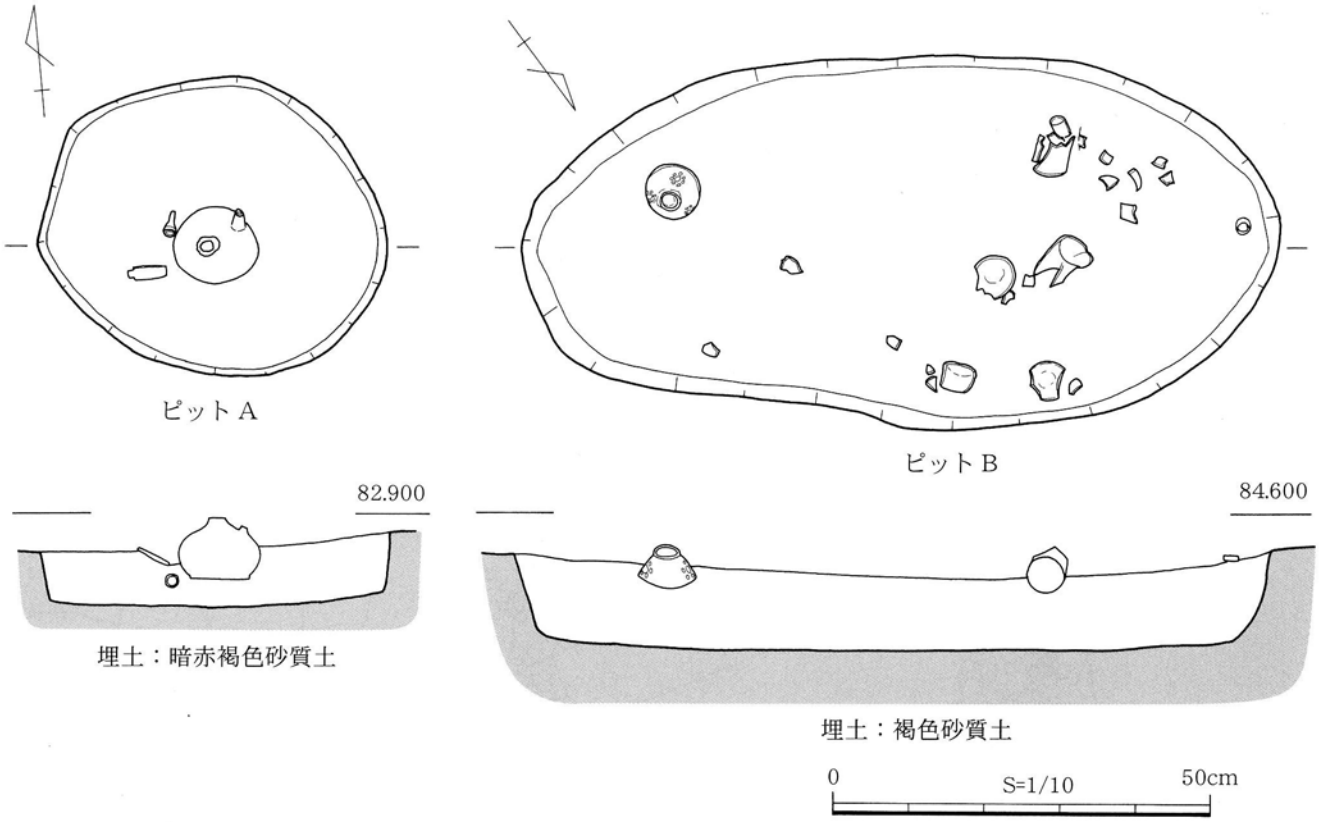
2号墓の北西に隣接して、長径100cm、短径50cm、深さ10cmを測る長円形のピットを確認した(ピットB)。内部からはクロム青磁(19、20)、沖縄産施釉陶器小杯(1)、指輪(29)等が出土した。

5号墓

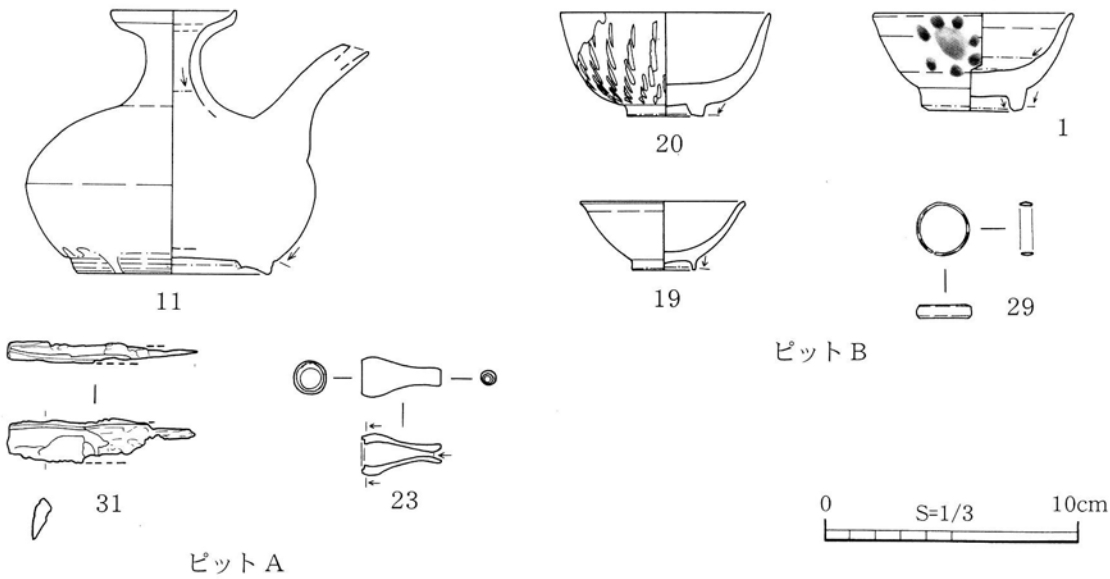
石灰岩丘陵を掘り込んで造った破風墓で、南に向かって開口する。墓庭の出入口は石灰岩切石と岩盤削り出しによって3段の段が造られる。墓庭は縦5.4m、横6.3m。屋根は2列の切石で方形に囲い、更に外側にやや小振りの切石を並べている。庇には差し渡し0.9~1.7mの板状石灰岩が3枚使用されている。墓の正面は大型の切石を使用しているが、切石の上に塗られた漆喰の残りが良いため、個々の大きさははっきりしない。墓口は縦1.1m×横0.6m。

墓庭側壁の石垣は切石によって積まれており、左右の側壁には脇墓が設けられている。向かって右の脇墓は入口で縦0.8m×横0.5m、内部は幅1.6m、奥行き1.7m、高さ1.4mである。左の脇墓は入口で縦0.8m×横0.6m、内部は幅1.6m、奥行き2.0m、高さ1.4m。墓室は幅2.7m、奥行き2.7m、シルヒラシから天井までの高さは2.1mであるが、天井は凹凸が激しい。平面形は正方形、横断面形は横長の長方形である。棚は正面に3段、左右に1段設けられている。

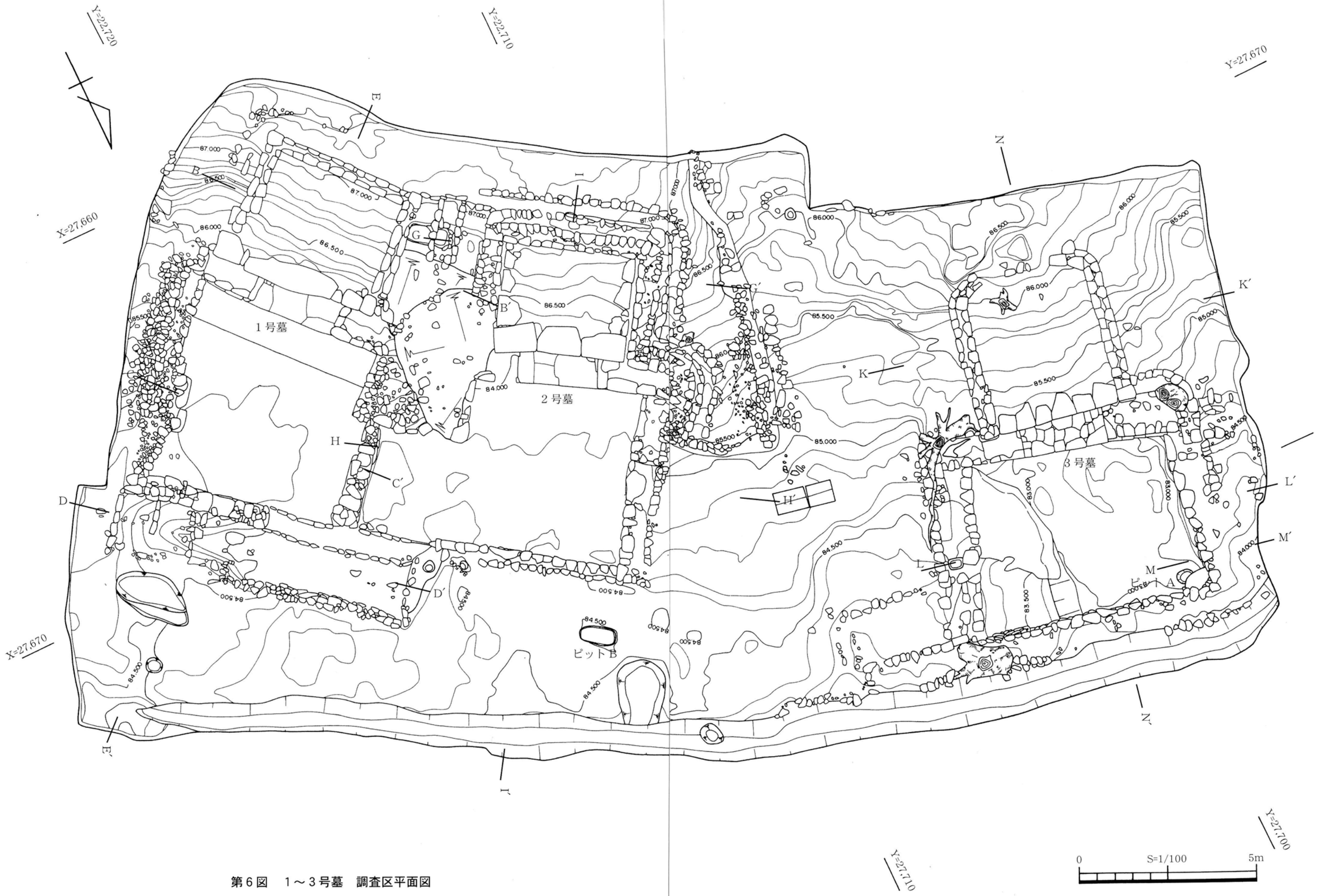
サンミデーの正面向かって左側にはカビアンジが造られている。



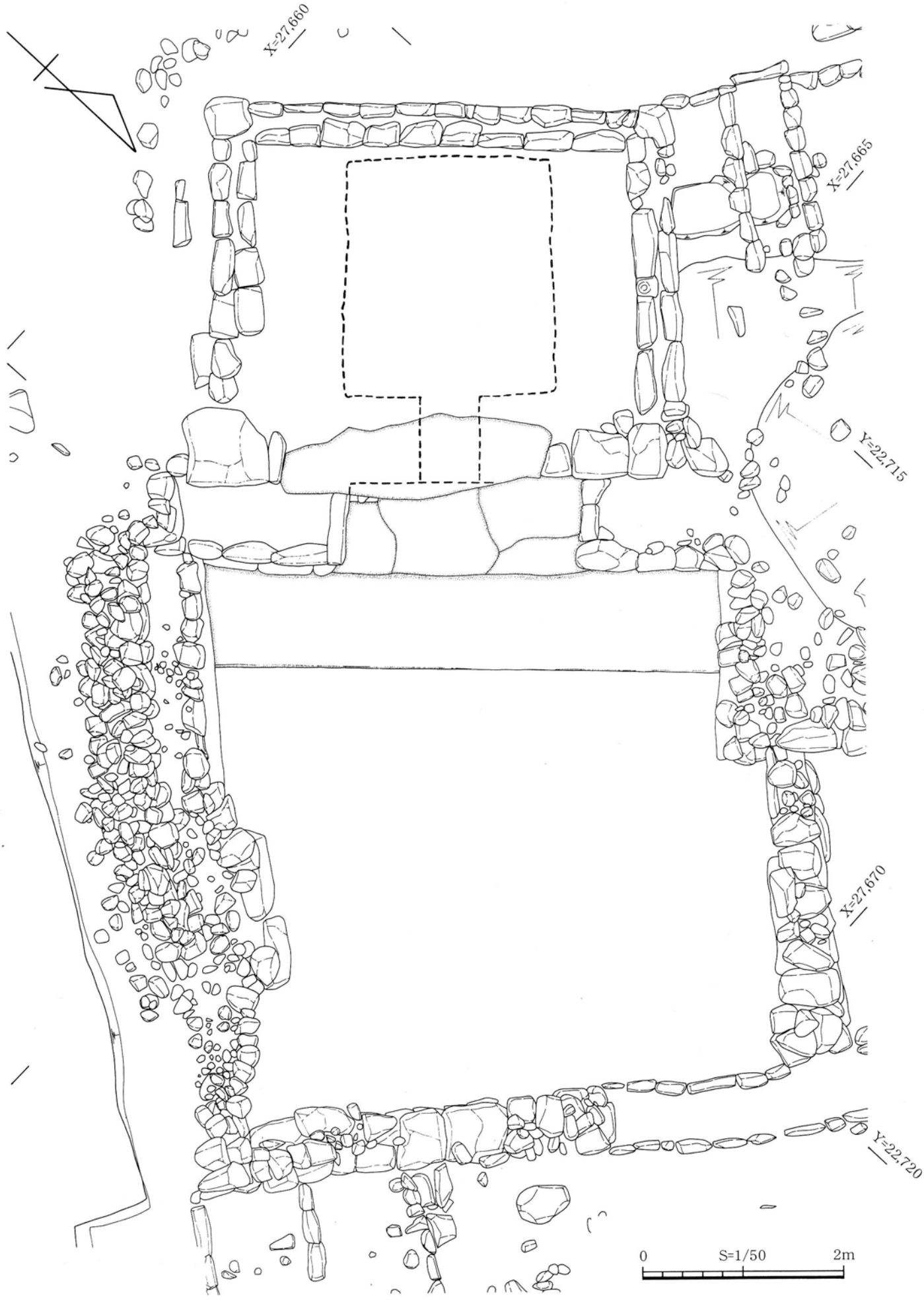
第4図　ピットA・B　平・断面図



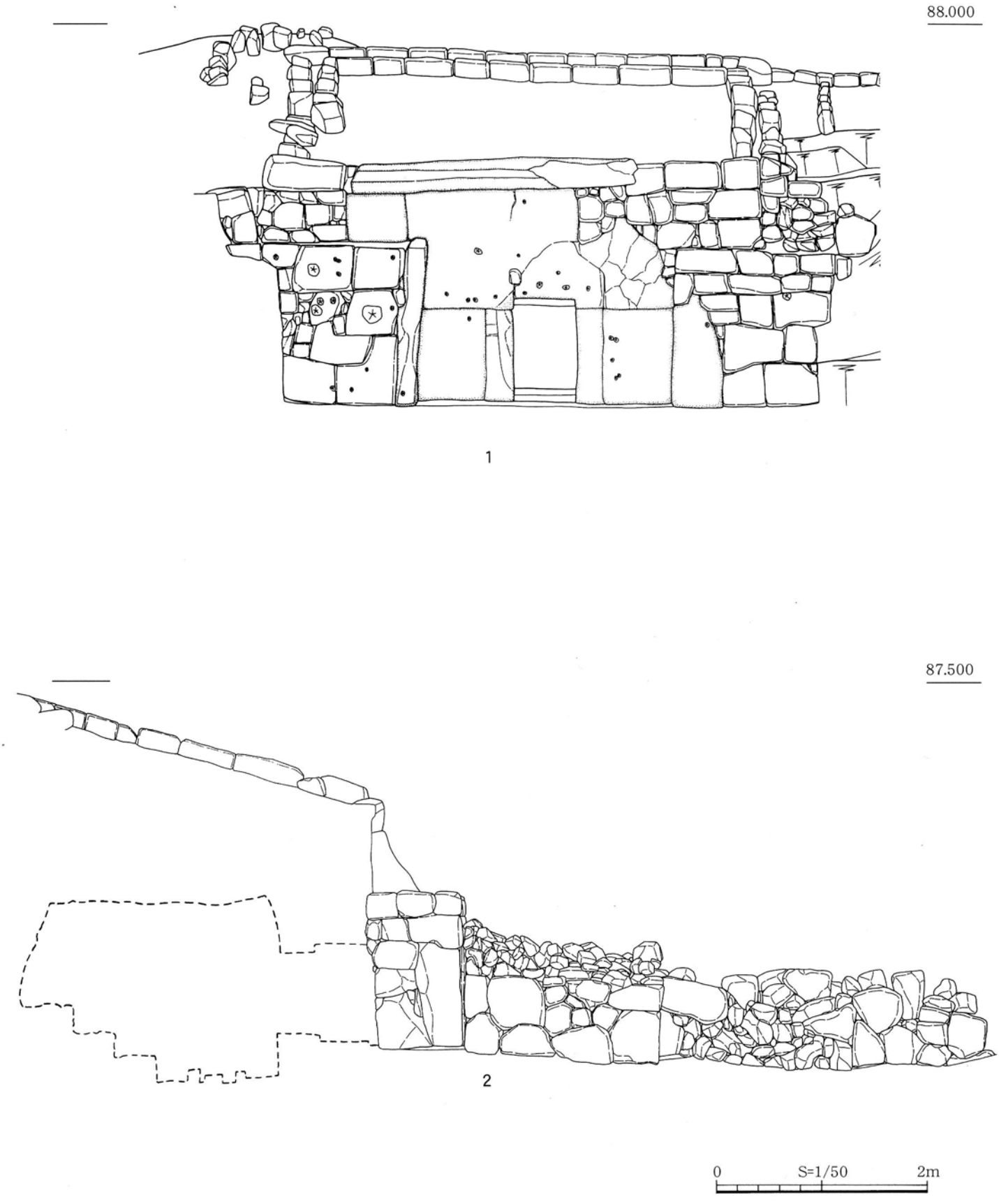
第5図　ピットA・B　出土遺物



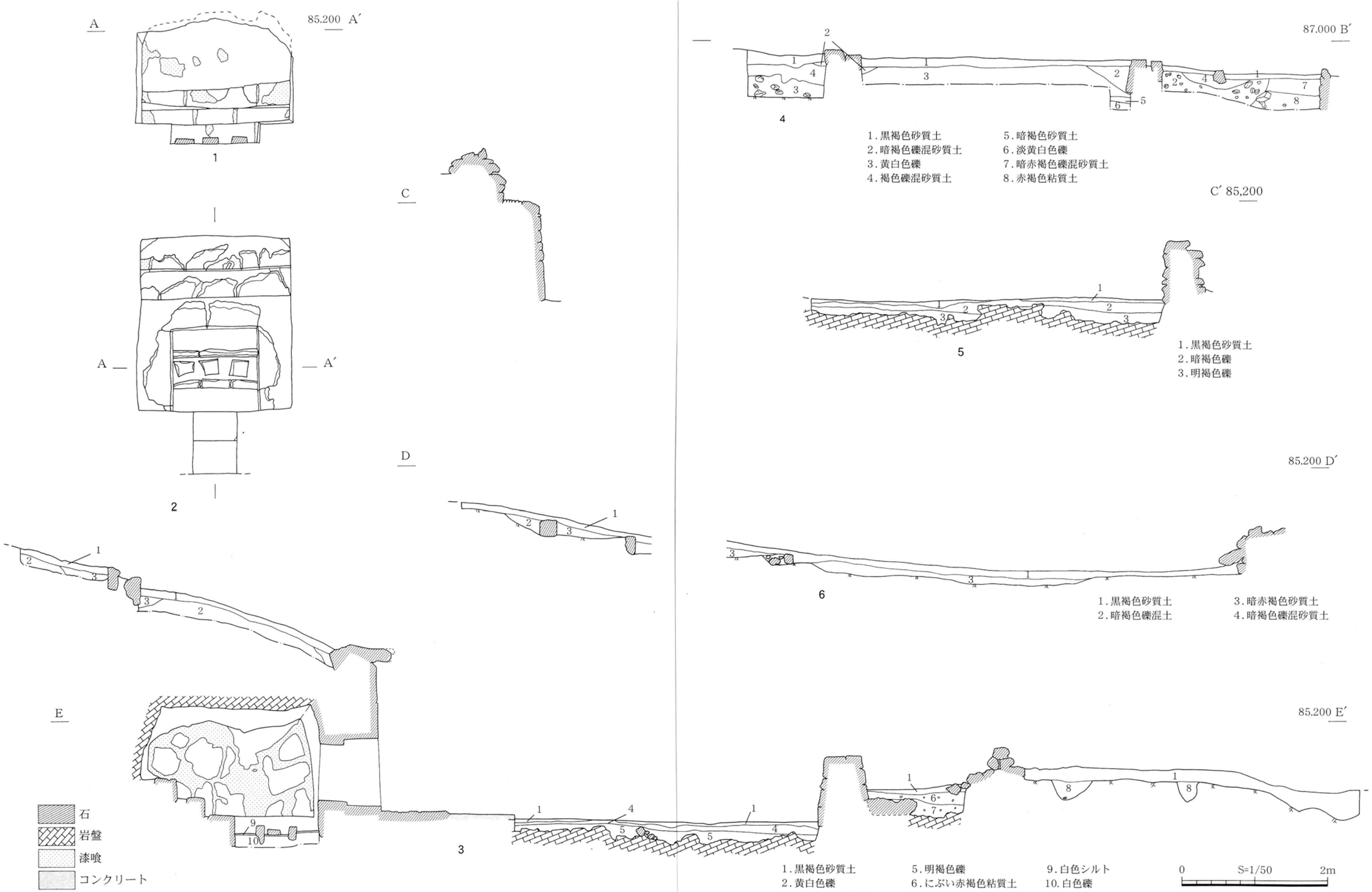
第６図　１～３号墓　調査区平面図



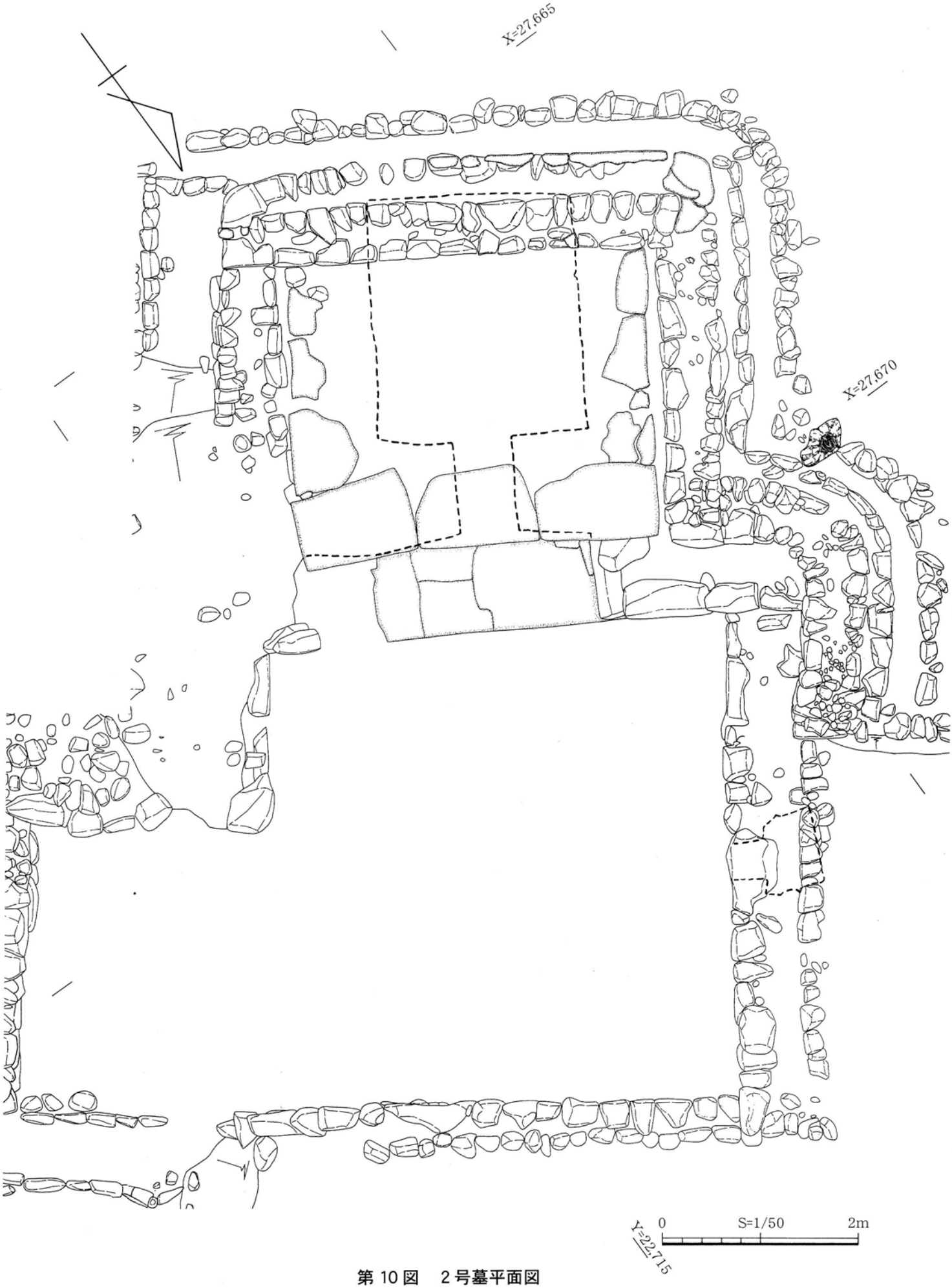
第７図　１号墓平面図



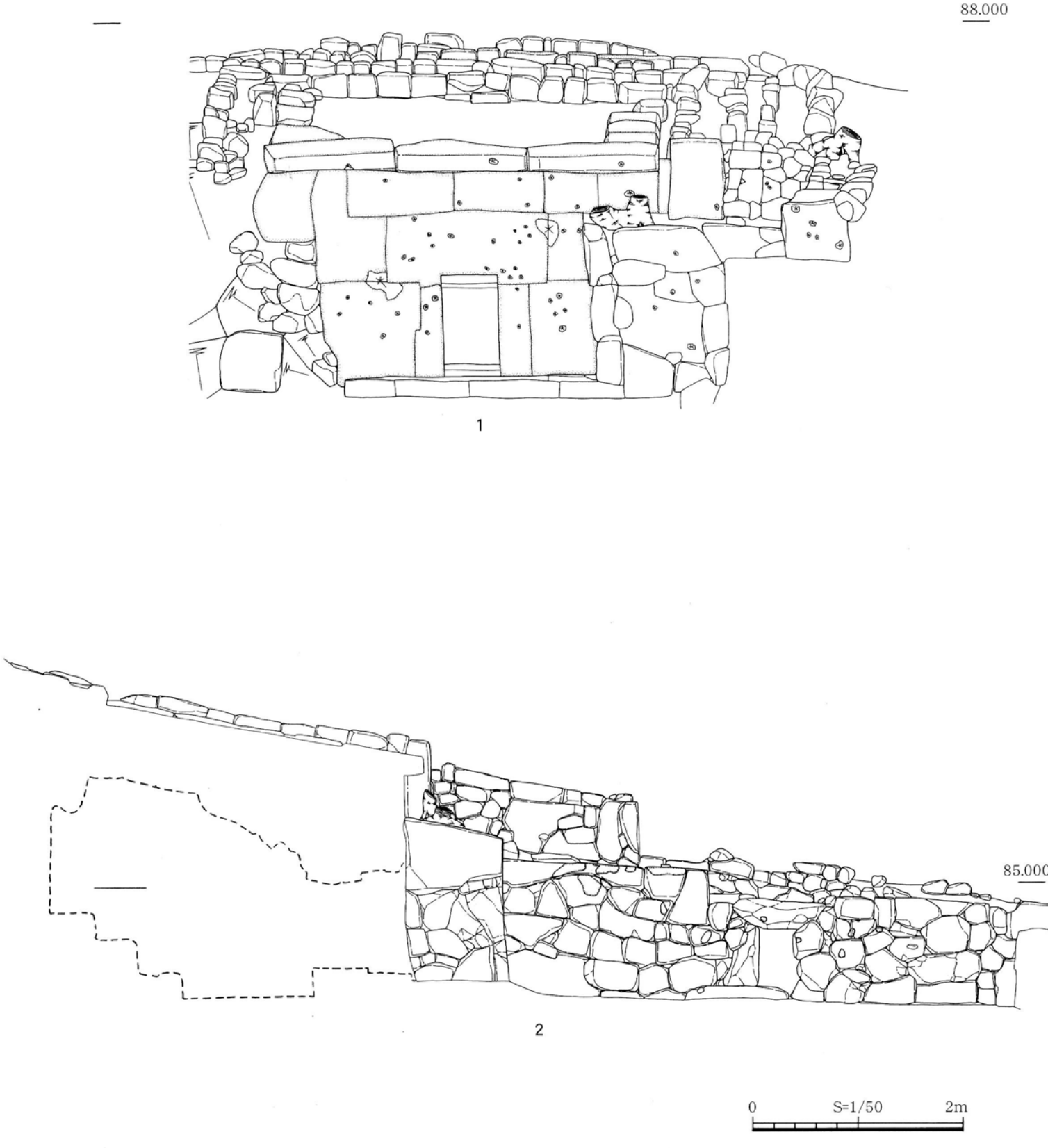
第８図　１号墓　１.平面図　２.西壁図



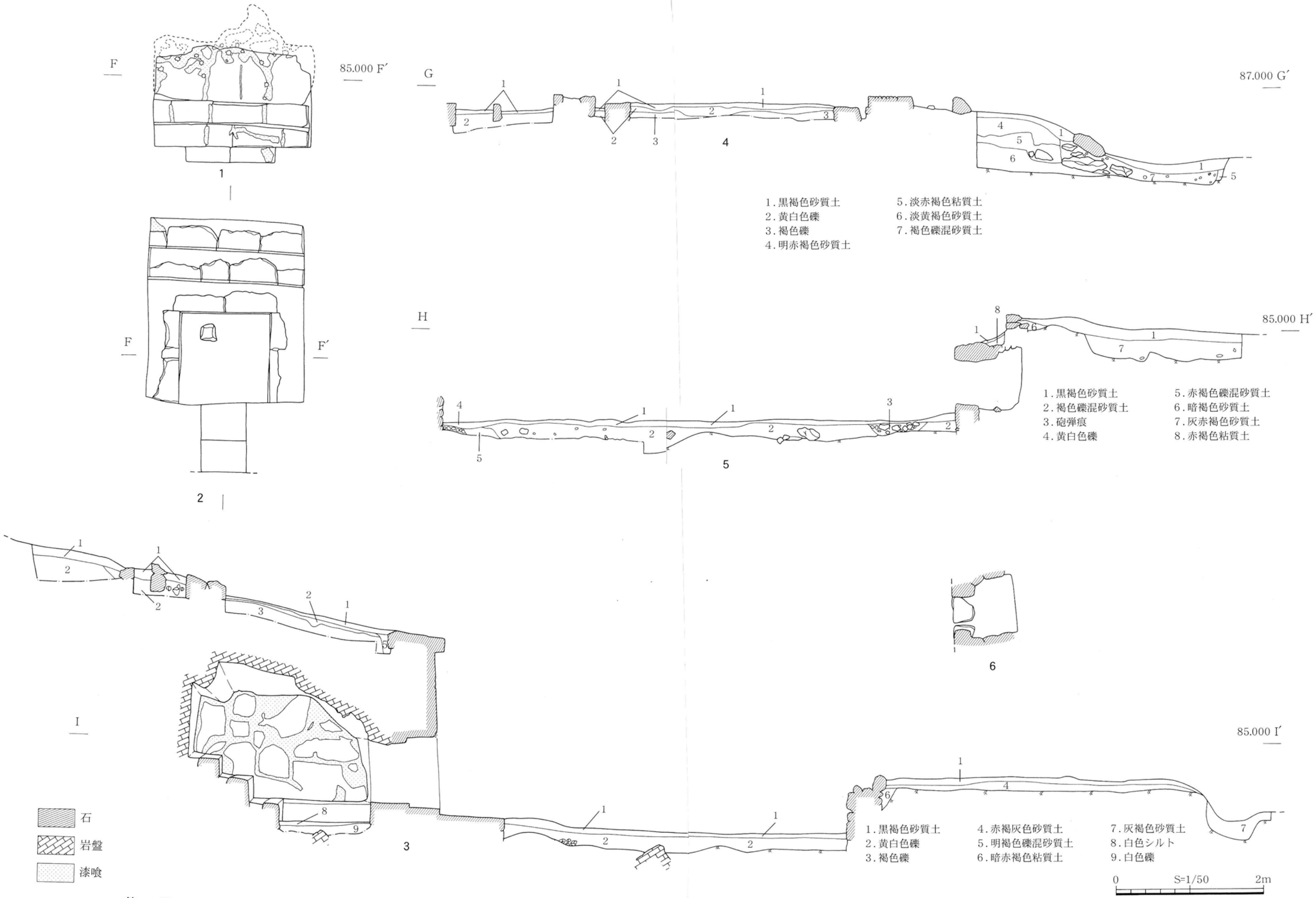
第９図　１号墓　１.墓室横断面見通し図　２.墓室平面図　３.縦断面図
４.墓室上横断面図　５.墓庭横断面図　６.通路縦断面図



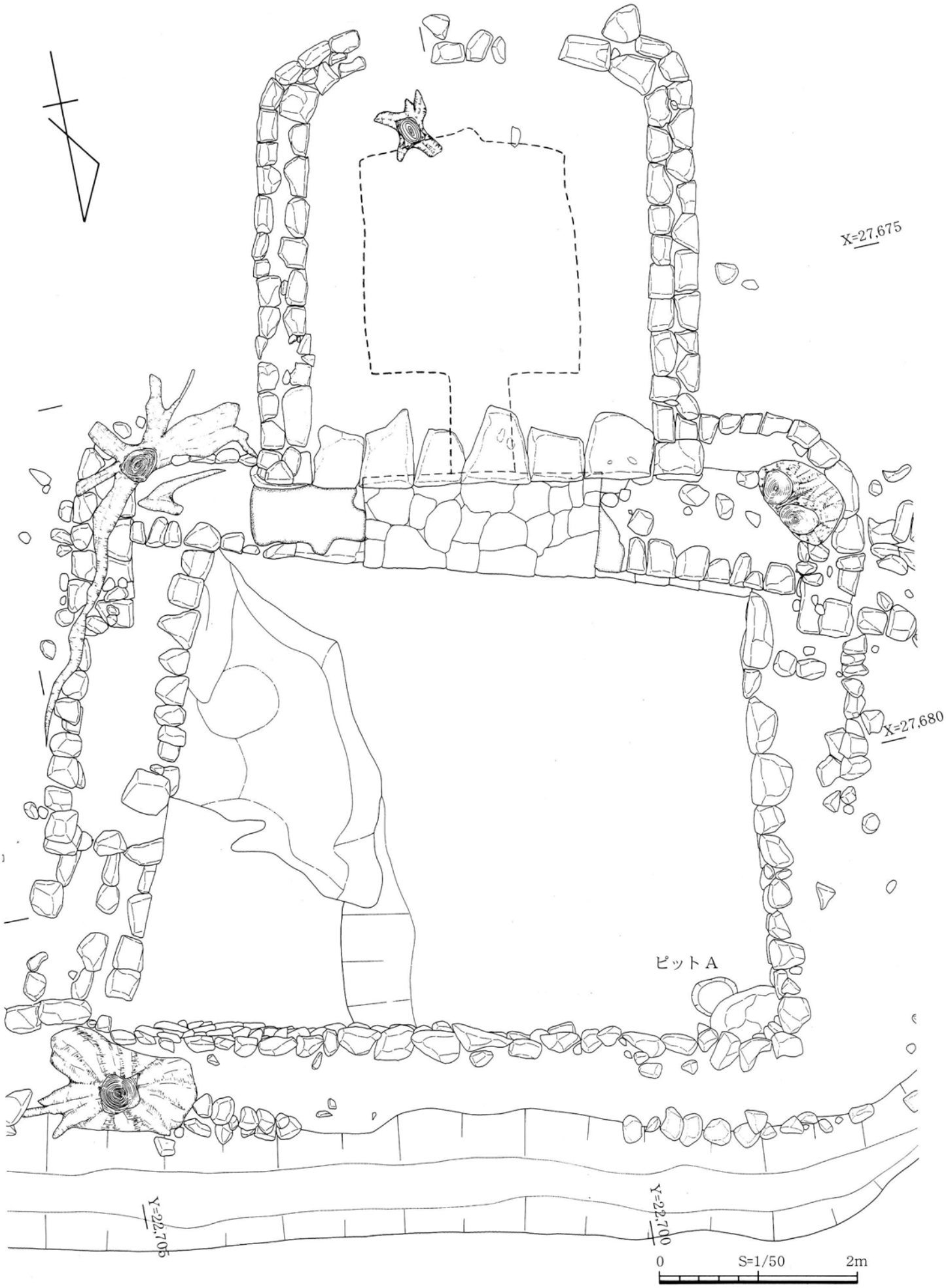
第 10 図　2 号墓平面図



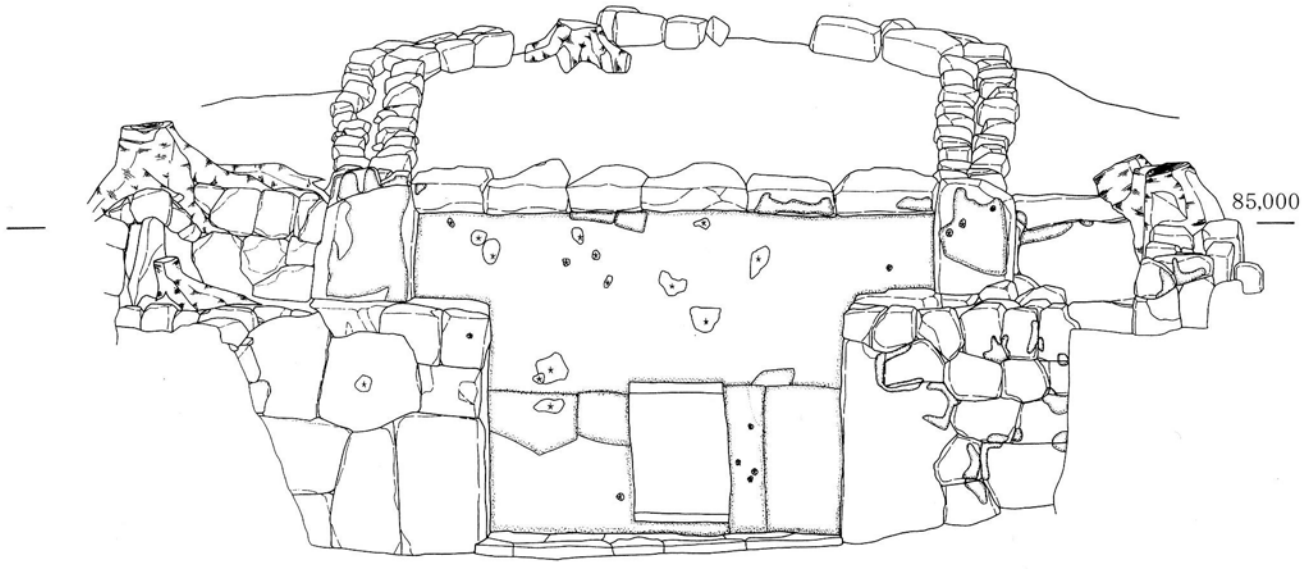
第 11 図　2 号墓　1. 平面図　2. 西壁図



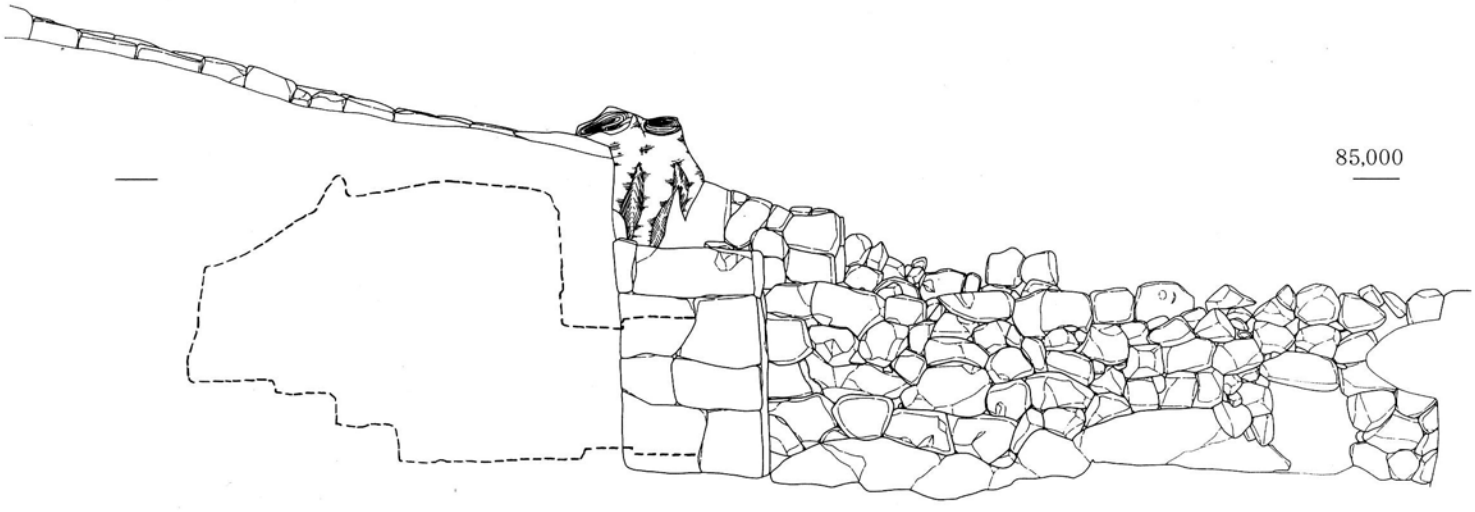
第 12 図　2 号墓　1. 墓室横断面見通し図　2. 墓室平面図　3. 縦断面図
4. 墓室上横断面図　5. 墓庭横断面図　6. 脇墓平面図



第 13 図　3 号墓平面図



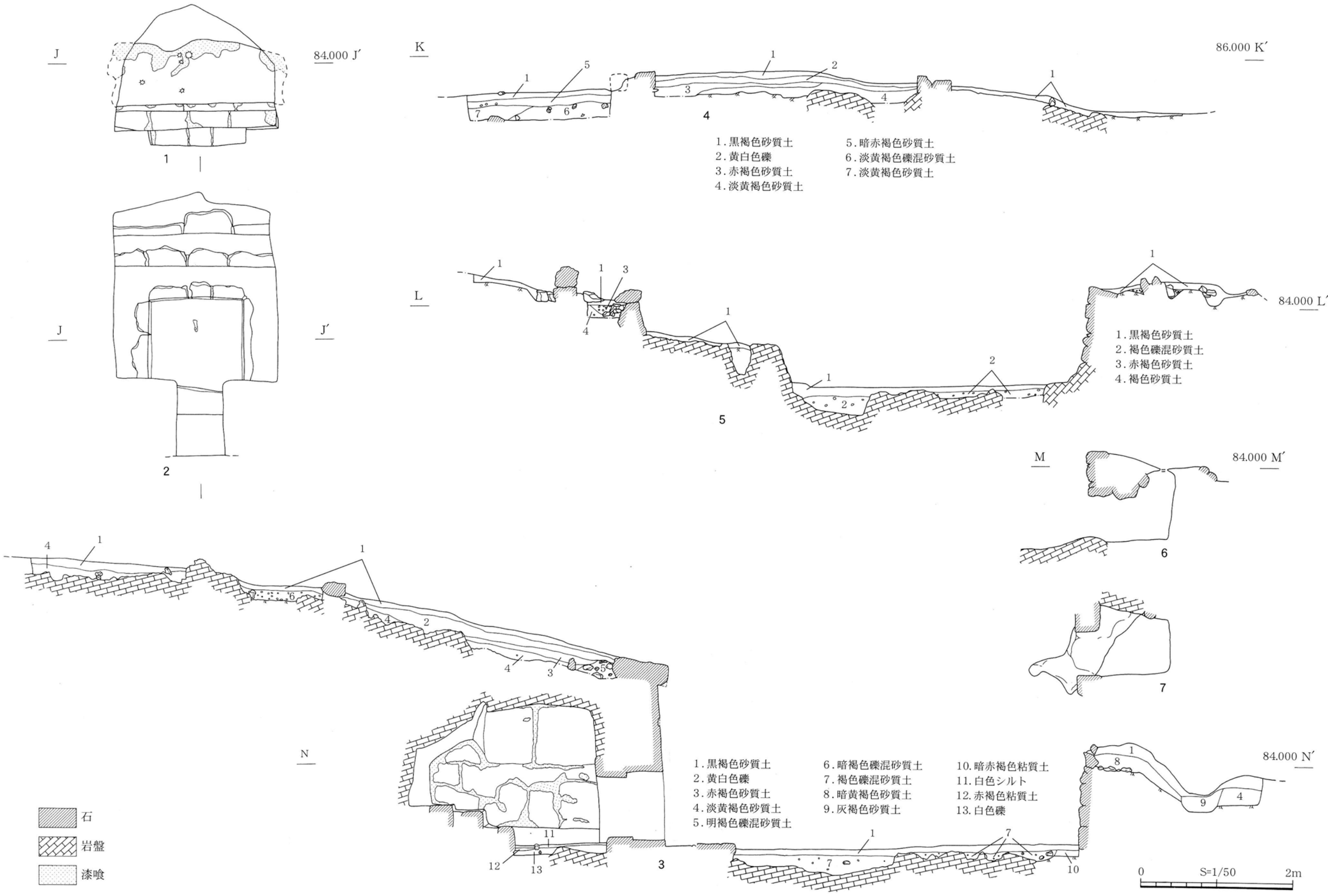
1



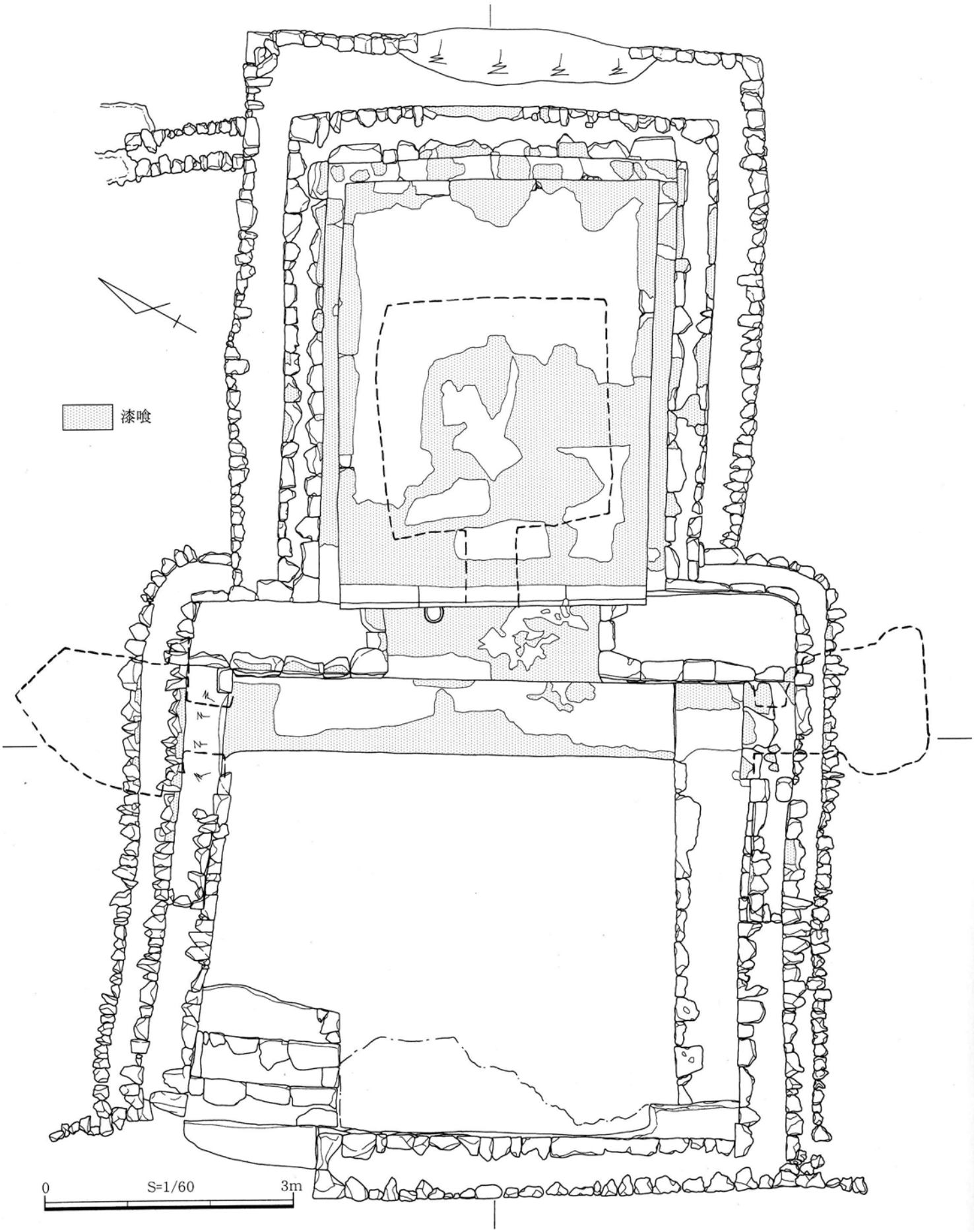
2

0 S=1/50 2m

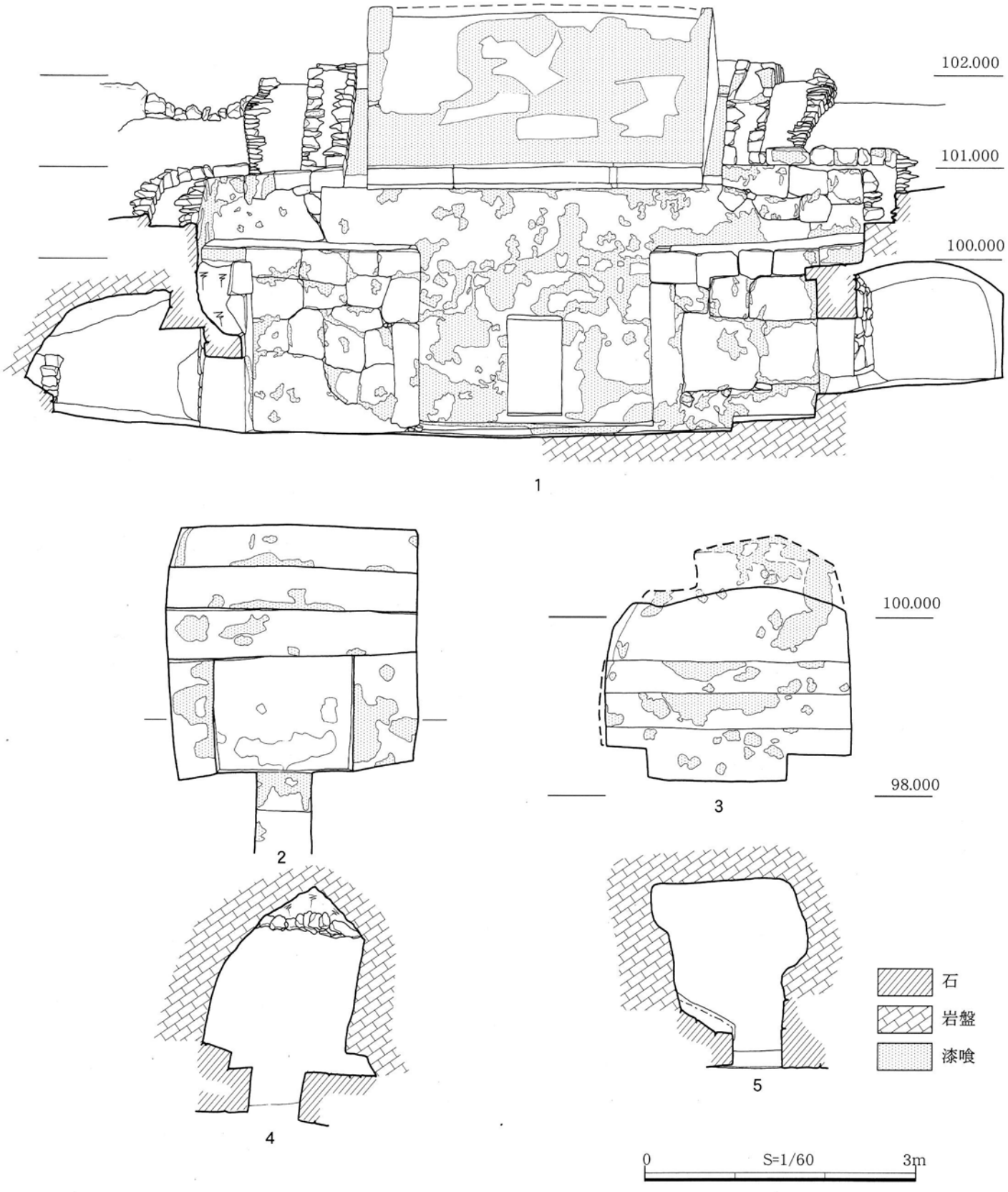
第 14 図　3 号墓　1. 平面図　2. 西壁図



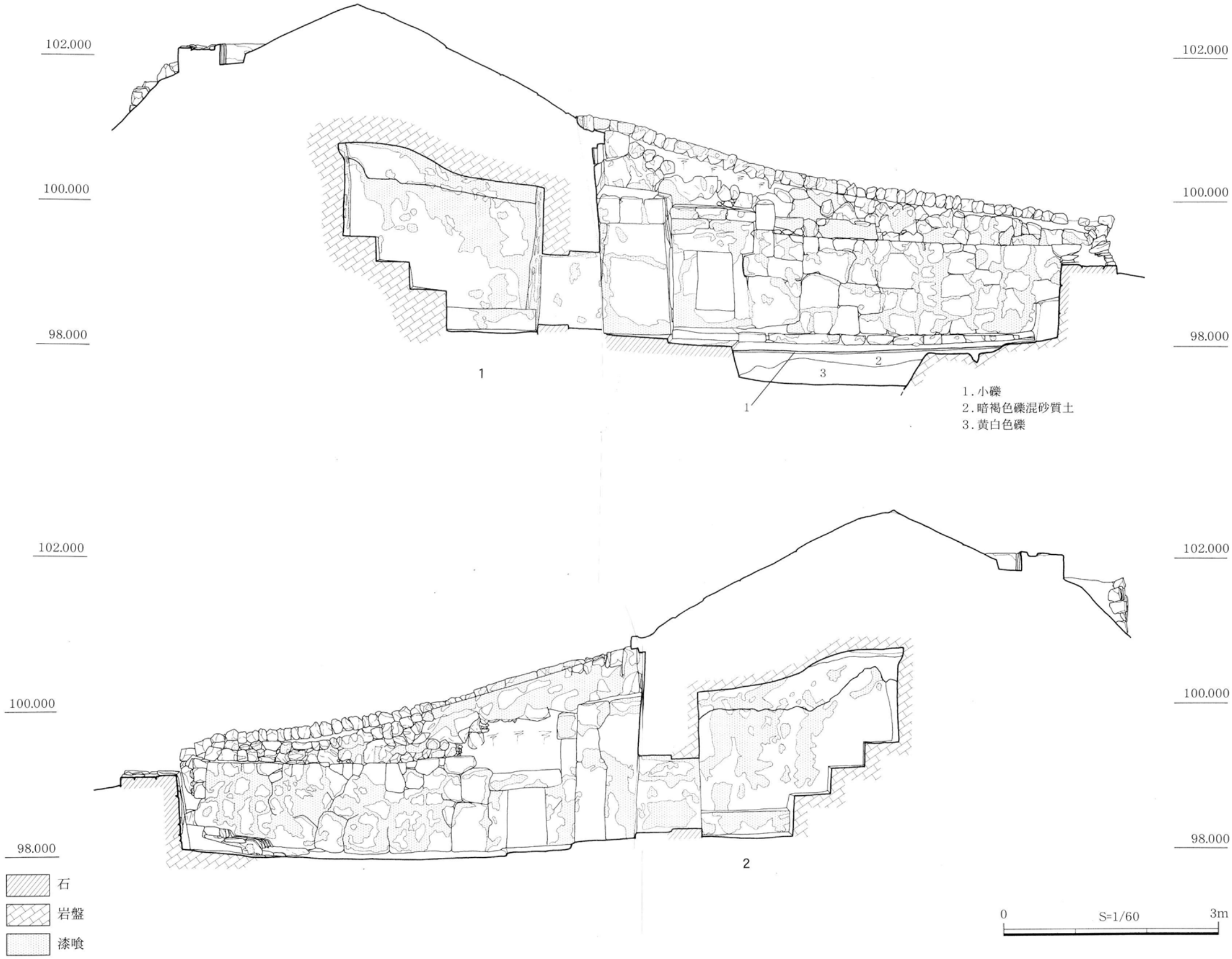
第 15 図　3 号墓　1.墓室横断面見通し図　2.墓室平面図　3.縦断面図
4.墓室上横断面図　5.墓庭横断面図　6.脇墓断面図　7.脇墓平面図



第 16 図　5 号墓平面図



第 17 図　5 号墓　1. 正面図　2. 墓室平面図　3. 墓室横断面見通し図
4. 脇墓平面図 1　5. 脇墓平面図 2



第 18 図　5 号墓　1．縦断面図見通し図（東壁）　2．縦断面図見通し図（西壁）

表１　遺物観察表（沖縄産施釉陶器等）

挿図No. 図版No. 遺物No.	種別	器種	口径 器高 高台径 (cm)	素地色調 精粗	施釉範囲 釉色調 貫入	外面文様 内面文様	備考	出土地
第19図 図版14 1	沖縄産施釉陶器	小碗	7.8 3.8 3.5	淡黄褐色 精	総釉後畳付釉ぎ 黄白色 なし	呉須と飴釉の花文 -	内底面蛇の目釉はぎ	２号墓の前（ピットB）
第19図 図版14 2	沖縄産施釉陶器	小碗	8.4 4.2 4.1	黄白色 精	総釉後畳付釉ぎ 白灰色 荒い	- -	内底面蛇の目釉はぎ	２号墓墓庭
第19図 図版14 3	沖縄産施釉陶器	碗	- - 7.3	白灰色 精	内体面から外体面まで 灰白色 なし	- -	灰釉碗	３号墓の屋根
第19図 図版14 4	沖縄産施釉陶器	灯明皿	10.3 2.9 4.6	白灰色 精	内底から口縁部外面まで 灰白色 なし	- -	内底面蛇の目釉はぎ 口縁内側に煤付着	３号墓カビアンジ内
第19図 図版14 5	沖縄産施釉陶器	碗	- - 6.5	黄褐色 精	総釉後畳付釉剥ぎ 白灰色 細かい	- -	内底面蛇の目釉はぎ	３号墓の前
第19図 図版14 6	沖縄産施釉陶器	碗	- - 7.0	黄褐色 精	総釉後畳付釉剥ぎ 黄白色 荒い	呉須と飴釉による花文 -	内底面蛇の目釉はぎ	２号墓墓庭の脇
第19図 図版14 7	沖縄産施釉陶器	碗	14.0 7.1 5.8	黄褐色 精	総釉後畳付釉剥ぎ 黄白色 なし	呉須と飴釉による花文 -	内底面蛇の目釉はぎ	３号墓の前
第19図 図版14 8	沖縄産施釉陶器	碗	13.2 6.4 5.4	黄褐色 精	総釉後畳付釉剥ぎ 黄白色 荒い	呉須と飴釉による花文 -	内底面蛇の目釉はぎ	３号墓の前
第19図 図版15 9	沖縄産施釉陶器	酒器	4.8 9.6 7.6	淡黄褐色 精	外面総釉後畳付釉剥ぎ 白灰色 細かい	呉須と飴釉による花文、 斜格子文 -		３号墓の前
第19図 図版15 10	沖縄産施釉陶器	酒器	- - 7.4	灰白色 精	外面総釉後畳付釉剥ぎ 白灰色 細かい	呉須による花文 -		１号墓の前
第20図 図版15 11	沖縄産施釉陶器	酒器	4.9 10.4 7.7	淡黄褐色 精	外面総釉後畳付釉剥ぎ 黒褐色 細かい	- -		３号墓墓庭（ピットA）
第20図 図版15 12	沖縄産施釉陶器	酒器	- - 6.2	灰色 精	外体面まで施釉 暗褐色 なし	篦彫りによる縦線 -		３号墓墓庭
第20図 図版15 13	沖縄産施釉陶器	瓶	- - 5.9	白灰色 精	外面総釉後畳付釉剥ぎ 上半部灰白色、下半部白灰色 細かい	呉須による横線を頸部２条、肩部２条 -		１号墓の前
第20図 図版16 14	沖縄産陶質土器	香炉	15.4 - -	赤褐色 粗	- - -	- -	アカムヌー。肩部にツマミを貼り付ける。内外面の一部に青色顔料が付着する。	３号墓墓庭
第20図 図版16 15	沖縄産施釉陶器	瓶	- - 7.4	黄橙色 精	外面総釉後畳付釉剥ぎ 暗褐色 なし	- -	外底釉を荒く掻取る	３号墓墓庭
第20図 図版16 16	円盤状製品	小碗	- - 3.9	黄褐色 精	外面総釉後畳付釉剥ぎ 外面黒褐色、内面灰白色 外面無し、内面細かい	- -	沖縄産施釉陶器を利用。外面より打ち欠きされる。	３号墓の前
第20図 図版16 17	円盤状製品	小碗	- - 3.5	黄褐色 精	外面総釉後畳付釉剥ぎ 灰白色 細かい	- -	沖縄産施釉陶器を利用。	１号墓通路
第20図 図版16 18	円盤状製品	碗	- - -	白色 精	- 透明 なし	斜格子文 -	印判染付胴部を利用。	１号墓通路
第20図 図版16 19	クロム青磁	小杯	6.5 2.7 2.5	白色 精	畳付無釉 緑色 なし	- -		２号墓の前（ピットB）
第20図 図版16 20	クロム青磁	小杯	8.2 4.1 3.0	白色 精	外底無釉 緑色 なし	飛び鉋風 -		２号墓の前（ピットB）
第21図 図版16 21	陶製キセル	雁首	- - -	白色 粗	- 白灰色 -	- -	遺物番号21の雁首か。	３号墓墓庭
第21図 図版16 22	陶製キセル	雁首	- - -	白色 粗	- 濃緑色 -	- -	器面全体に釉が施されるが、羅宇接続部は無釉。	３号墓墓庭
第21図 図版16 23	陶製キセル	吸口	- - -	白色 粗	- 濃緑色 -	- -	器面全体に釉が施されるが、剥落多い。	３号墓庭（ピットA）
第21図 図版16 24	陶製キセル	吸口	- - -	白色 粗	- 白灰色 -	- -	器面全体に釉が施される。	３号墓墓庭
第21図 図版16 25	真鍮製キセル	雁首	- - -	- - -	- - -	- -	羅宇が一部残存。	２号墓の前
第21図 図版16 26	真鍮製キセル	吸口	- - -	- - -	- - -	胴を巡る線が認められる。 -	羅宇が一部残存。遺物番号25の吸口か。	２号墓の前
第21図 図版17 27	米軍個人認識票	-	縦 2.9 横 5.1 厚 0.1	- -	- - -	- -	「HENDRIX BILLIE M」 「345801153(?)T43 0」 「P」	１号墓の前
第21図 図版17 28	蝋状物質	-	縦 4.1 横 2.6 厚 0.8	- -	- - -	- -	大城逸朗氏による鑑定あり（p 32）	１号墓シルヒラシ
第21図 図版17 29	銅製指輪	-	縦 2.1 横 0.5 厚 0.1	- -	- - -	- -	断面形状は扁平な蒲鉾状	２号墓の前（ピットB）

挿図No. 図版No. 遺物No.	種別	器種	口径 器高 高台径 (cm)	素地色調 精粗	施釉範囲 釉色調 貫入	外面文様 内面文様	備考	出土地
第21図 図版17 30	青銅製品	不明	縦 1.5 横 3.2 厚 0.1	- -	- - -	- -	模様は認められない。	2号墓の前
第21図 図版17 31	刀子	-	長 7.7 幅 1.6 厚 0.6	- -	- - -	- -	重量 8.5 g	3号墓墓庭（ピットA）
第21図 図版17 32	真鍮製簪	耳かき型	- - -	- - -	- - -	- - -	首の断面は円形、竿の断面は六角形。	表採
第21図 図版17 33	銀製簪	耳かき型	- - -	- - -	- - -	- - -	首の断面は円形、竿の断面は六角形。	2号墓の前
第22図 図版17 34	高麗系瓦	有段式平瓦	縦 - 横 - 厚 2.4	橙灰色 粗	- - -	- -	摩滅激しい	1号墓の屋根脇
第22図 図版17 35	銅銭	-	- - -	- -	- - -	表：寛永通寶 裏：元	銭厚 0.9mm	1号墓の屋根

表2　遺物観察表（厨子甕蓋）

挿図No. 図版No. 遺物No.	種別	外径 内径	器高 体部高	器面調整・装飾	銘書	出土地
第22図 図版18 36	マンガン釉鍔形蓋	16.0 11.5	- -	体部外面上部回転ヘラ削り。外面マンガン釉。	-	1号墓墓庭
第22図 図版18 37	マンガン釉鍔形蓋	17.6 13.2	- -	体部外面上部回転ヘラ削り。外面マンガン釉。	-	1号墓の前
第22図 図版18 38	マンガン釉鍔形蓋	29.1 22.6	- -	体部外面上部回転ヘラ削り。外面マンガン釉。	-	3号墓の前
第22図 図版18 39	マンガン釉鍔形蓋	23.8 18.1	9.9 7.0	つまみ扁平。つまみ台2段。台上凹線なし。体部外面上部回転ヘラ削り。内外面とも全面マンガン釉。	-	3号墓の前
第22図 図版18 40	マンガン釉鍔形蓋	- -	- -	つまみ扁平。つまみ台2段。台上凹線なし。体部外面回転ヘラ削り。内外面とも全面マンガン釉。	-	3号墓表採
第22図 図版18 41	マンガン釉鍔形蓋	31.9 24.0	14.4 10.1	つまみ宝珠形。つまみ台1段。台上凹線なし。体部外面上部回転ヘラ削り。外面マンガン釉。	道光二拾六年（丙）午八月□日洗骨…築登之同人妻亀両人	表採
第22図 図版18 42	マンガン釉鍔形蓋	- 20.0	12.8 8.8	つまみ宝珠形。つまみ台1段。台上凹線1。体部外面上部回転ヘラ削り。外全面マンガン釉。体部外面に㊀の墨書有り。	（明）治三十四年…／平良…／童名…	表採
第22図 図版18 -43	マンガン釉鍔形蓋	- 26.0	- 9.9	つまみ欠損。つまみ台2段。台上凹線なし。体部外面上部回転ヘラ削り。内外面ともマンガン釉だが、内面上部は露胎。	…／明治四…／八月死…	表採

表 3　遺物観察表（厨子甕身）

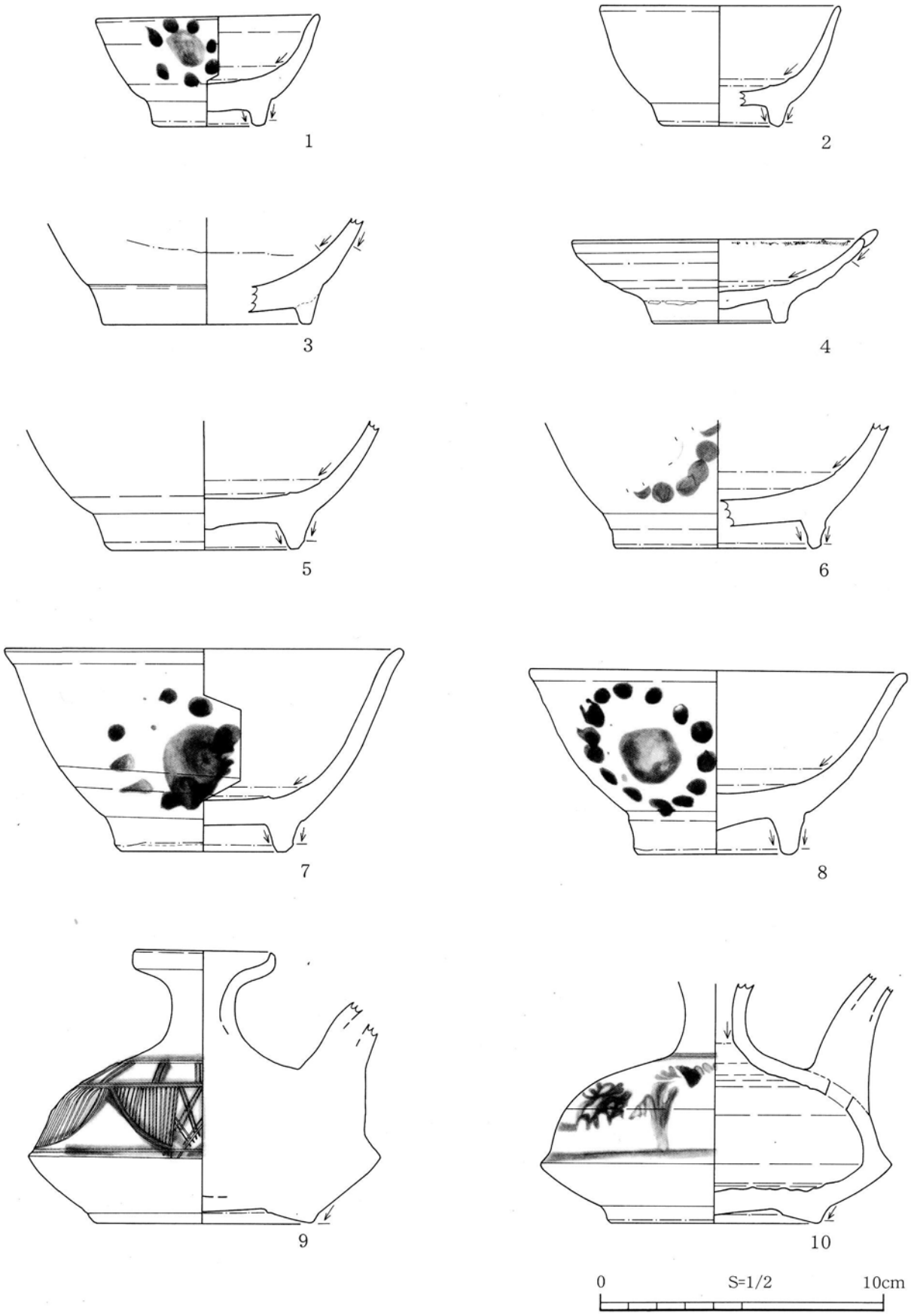
挿図No. 図版No. 遺物No.	種別	時期	口縁外径 口縁内径	胴部径 器高 底径	屋門飾		蓮華文		横帯 4		横帯 3		屋門						出土地
					柱貫	玉飾り	張付	線彫り	突帯	沈線	突帯	沈線	瓦屋形	唐破風形	位牌形	アーチ型	線彫り	なし	
第 23 図 図版 19 44	マンガン釉 甕形	?	- -	- - 20.0															2 号墓庭
第 23 図 図版 19 45	マンガン釉 甕形	?	- -	- - 17.0															3 号墓墓庭
第 23 図 図版 19 46	マンガン釉 甕形	V or Ⅵ	31.2 25.8	- - -								○							3 号墓墓庭
第 23 図 図版 19 47	マンガン釉 甕形	V	25.0 21.6	24.9 43.9 15.6		○		○		○		○				○			3 号墓墓庭
第 23 図 図版 19 48	マンガン釉 甕形	Ⅳ	26.5 21.7	32.2 51.4 19.3	○	○		○		○	○					○			3 号墓墓庭
第 23 図 図版 19 49	マンガン釉 甕形	V or Ⅵ	23.2 19.2	23.1 36.3 13.0				○		○		○							3 号墓の前
第 23 図 図版 19 50	マンガン釉 甕形	V or Ⅵ	- -	22.1 - 10.5				○		○		○					○		3 号墓の前

※「時期」は浦添市教育委員会 1997『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』より

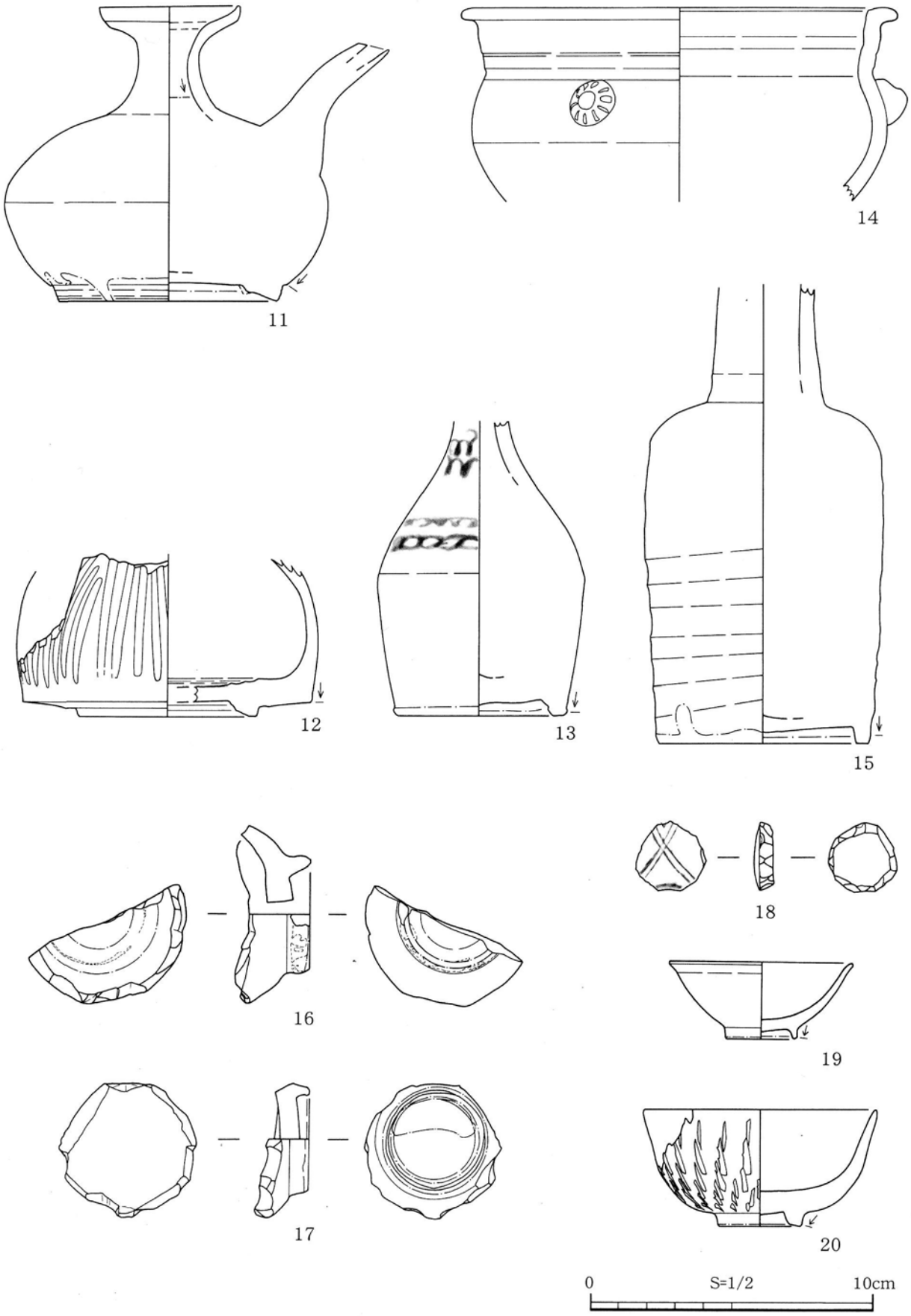
仲間後原近世墓群 1 号墓出土の岩石様遺物（遺物番号 28）の鑑定結果

1．形：平面は長方形（41 × 26mm）で、断面は台形（6mm、8mm）
2．色：灰白色で、黒～黒褐色の模様がある
3．硬度：1~2
4．光沢等：脂感触があり、かつ油脂光沢
5．そのほかの特徴：気泡状の小さな穴が認められるが、ある面に集中している気配がある。

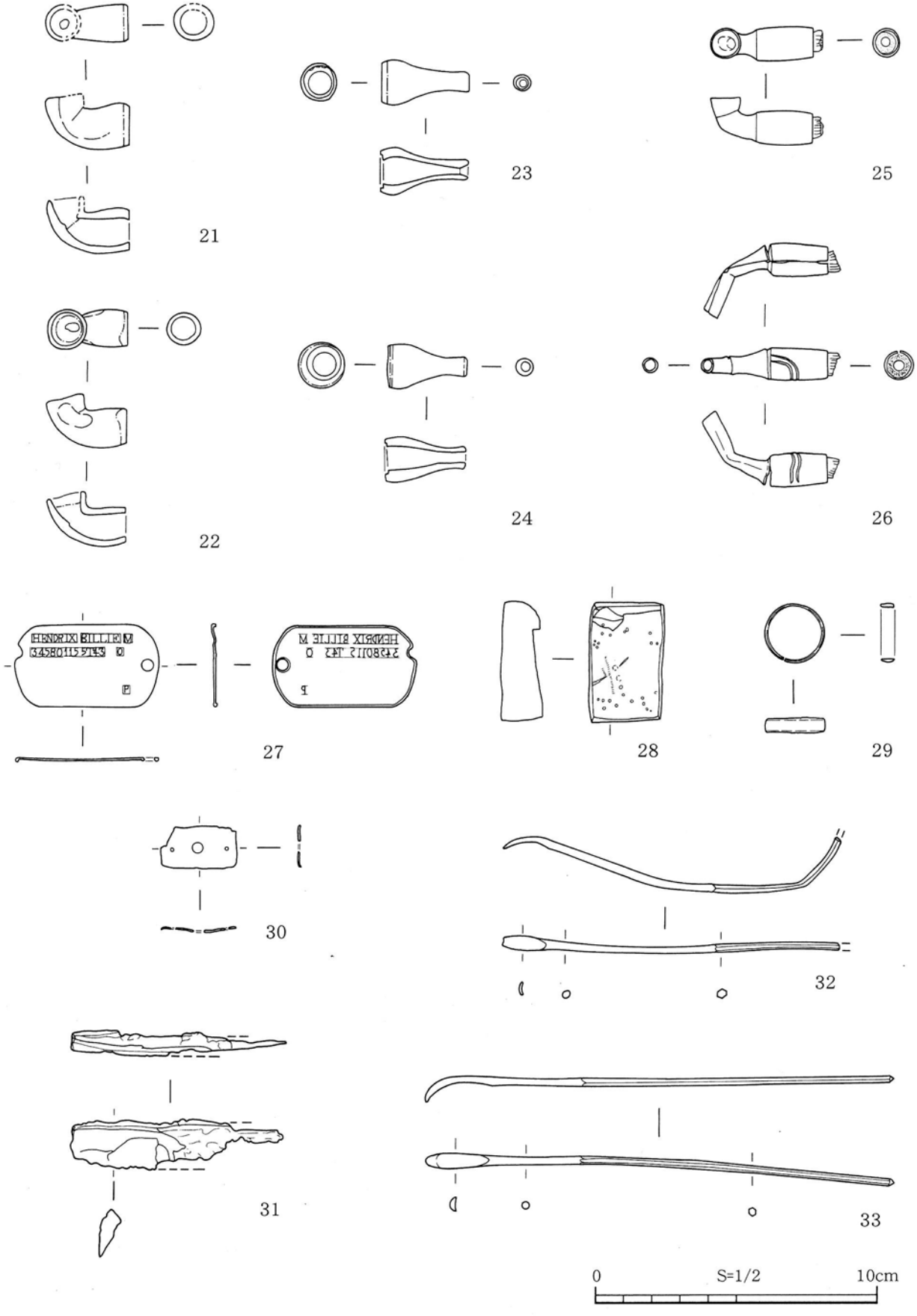
以上のことを踏まえながら、肉眼およびルーペを用いて観察した。ルーペでは、結晶面は見あたらず、石英か他の岩片様の鉱物等が見られはするが、量は少なく、散在的で、丸くなったりしており、二次的なものである可能性が強い。標本を薄く削り、一部を火に近づけると勢いよく燃え、その後に黒灰色の灰が残った。また一部は酸（ギ酸）に浸したが何の反応もなかった。このような結果をもとに、図鑑の滑石や葉ろう石の特徴と照らし合わせてみたが、一致する条件は少なかった。よって、本品は何であるか不明である。しかし本品をもう一度我に返り、全体的に観察すると、人工のろう（ロウソクのろう）の可能性が考えられる。気泡状の穴は、溶けたろうに二次的に取り込まれた異質岩片が抜け落ちてできたとも考えられる。また、非常に軟らかいし、加工もされており、しかも日に照らすと今にも溶けそうなことがそのことをいっそう強調している。



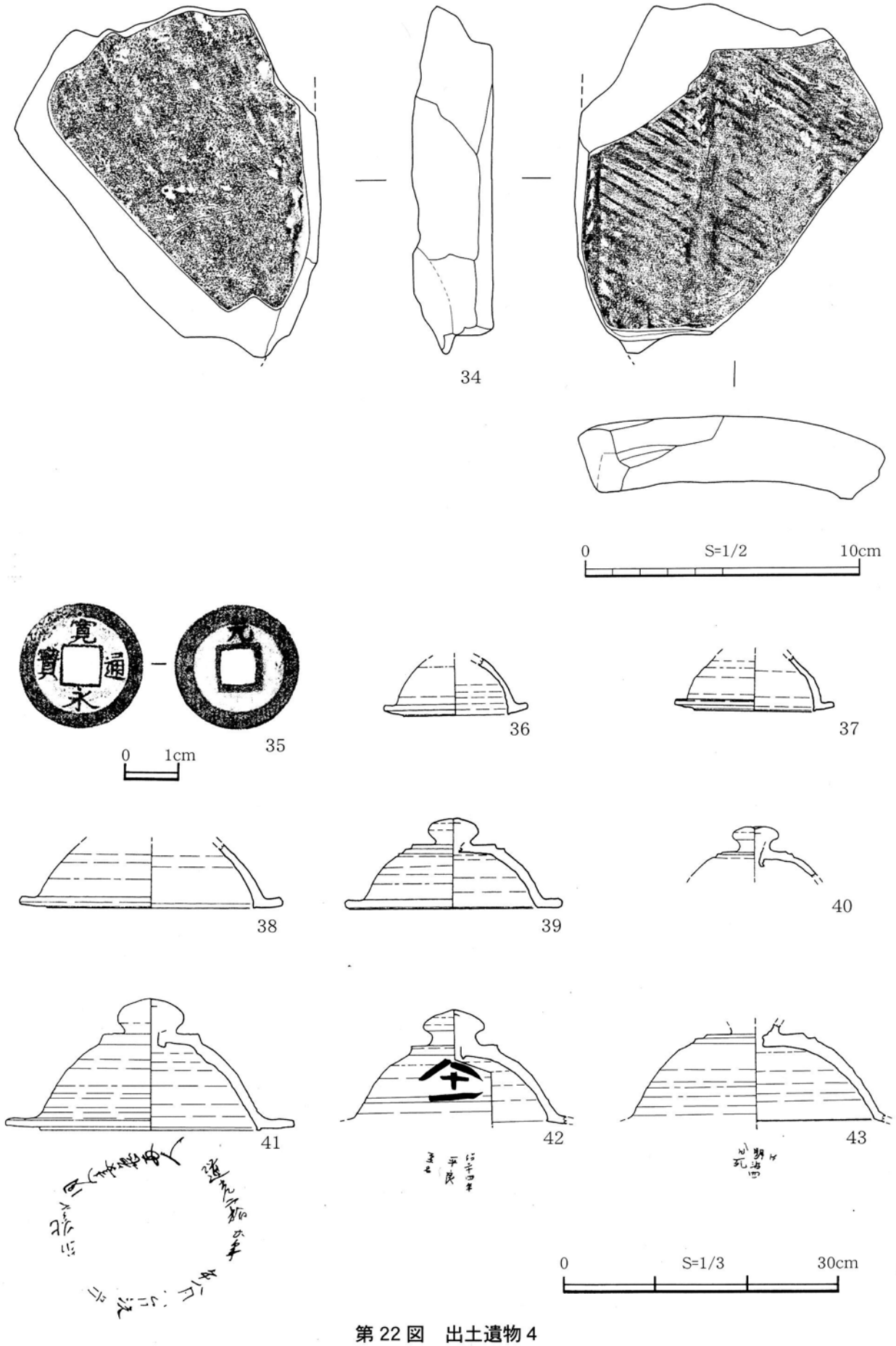
第 19 図　出土遺物 1



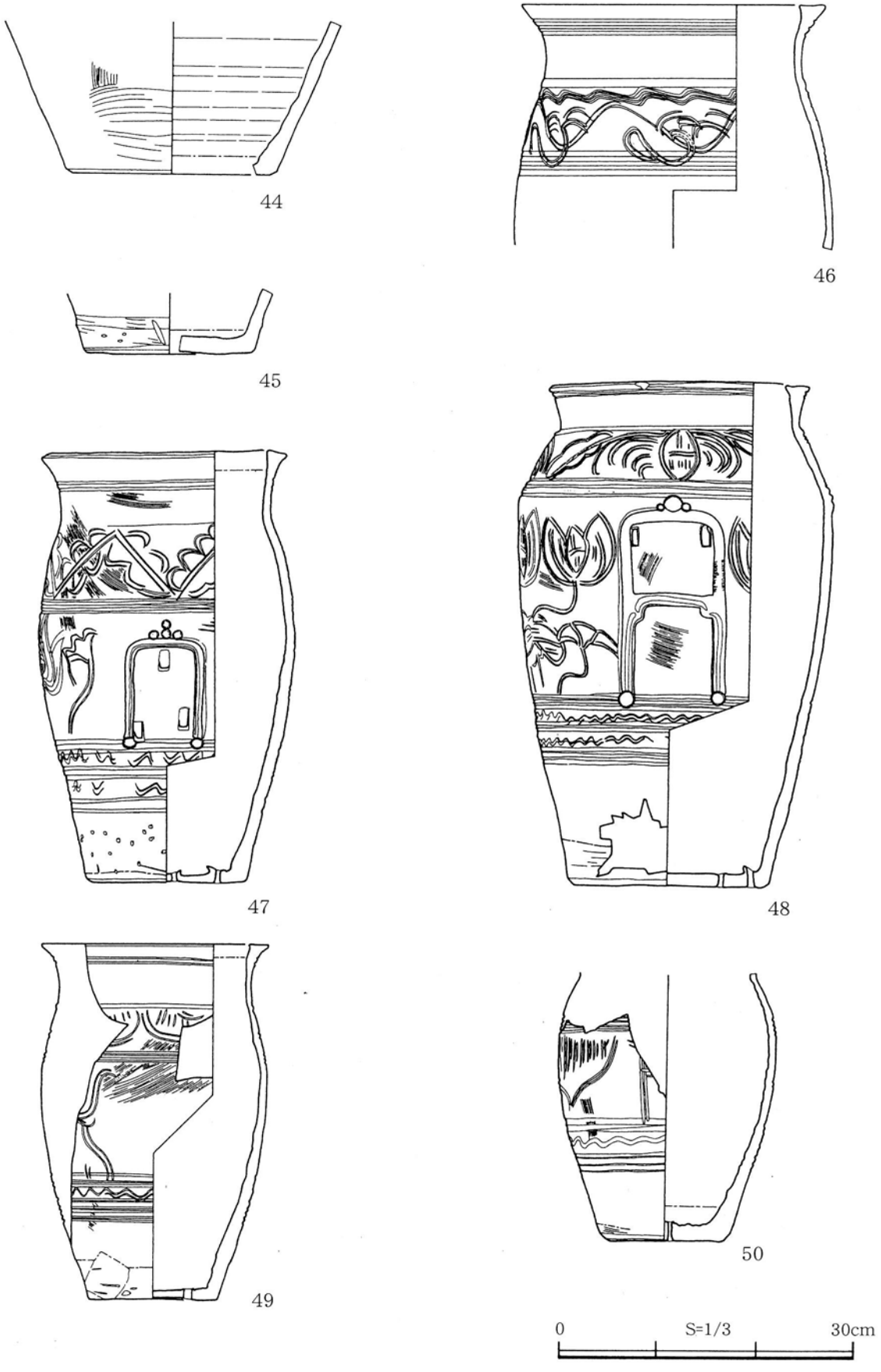
第 20 図　出土遺物 2



第21図　出土遺物3



第 22 図　出土遺物 4



第 23 図　出土遺物 5

まとめ

今回報告した基は４基を数えるが、墓群の北側に並んで存在する１から３号墓と、南側に存在する５号墓とは分けて考える必要がある。

まず１から３号墓であるが、これらはいずれも平葺墓である。これらの墓は調査を行った時点で既に空墓であったが、３号墓は墓造営時の祭祀に伴うとみられる獣骨が墓室内シルヒラシの造成層から出土し、且つ、何らかの祭祀に伴うとみられる酒器やキセルの吸口が埋納されたピットを確認するなど、比較的情報量が多かった。また、この墓のカビアンジ内からは壺屋産の燈明皿が出土しているが、ここに納めた理由は不明である。

屋根の平面形態をみると、隅の成形方法が３基の墓でそれぞれ異なる点が興味深い。すなわち、３号墓は曲線を描くように処理するのに対し、１号墓は直角となるように造られている。また、２号墓の天井平面は、やや曲線を描く石列を一部撤去し、その内側に直線的な石列を新たに配置した様子を確認することができ、隅を曲線から直角へ造り替えたものと判断される。

破風墓の５号墓は顕著な遺物がみられないため、その造営年代等は不明である。今後は周辺の墓との比較が必要となるだろう。

Ⅲ．浦添貝塚崖上地区

第１章 遺跡の位置と環境

第１節 位置と自然的環境

浦添貝塚は、浦添市字伊祖小字真久原 413 番地一帯の琉球石灰岩の丘陵上と同崖下にある沖縄貝塚時代前期の遺跡である。

遺跡のある石灰岩丘陵は、市域東側の字前田から西海岸の字港川まで連なっていたものの、現在では市域西側を走る国道 58 号、市中央部の県道 251 号線等により断ち切られている。

丘陵の北面は断層により崖面を呈しているため、北側からの景観は石灰岩堤をなしている。丘陵の内陸部は、北側を西流する牧港川へ向かって段丘地形を形成している。丘陵上の現況は台地状をなし、南側縁辺部の所々で崖面を形成するも概して緩やかな傾斜で南側の集落にいたる。

遺跡は、那覇市から本市を経由して宜野湾・沖縄市に至る国道 330 号の伊祖トンネル上の琉球石灰岩からなる丘陵上と同崖下に位置する。1971 年、丘陵を開削して道路建設が計画されたが、遺跡の重要性から保存運動が展開され、隣接する「伊祖の高御墓」（県指定建造物）とともに保存され、1972 年県指定史跡となった。

浦添貝塚一帯は県営浦添大公園内にあり、貝塚のある崖下の北側には遊歩道が整備され、崖の中腹にある県指定建造物「伊祖の高御墓」へは、史跡指定外から木製階段が取り付けられる。崖上は石灰岩が露頭する箇所を除き、芝生が植栽されている。崖下には、「浦添貝塚」及び「伊祖の高御墓」の説明板が設置されている。

第２節 歴史的環境

本遺跡は、1959 年に嵩元政秀によって発見され、1969 年 8 月と 1970 年 7 月の 2 ヵ年にまたがって新田重清の指導のもと浦添高校郷土史研究クラブにより崖下の発掘調査が実施された。

発掘調査の成果については、新田により報告され（註 1)、第Ⅱ層（遺物包含層）から土器、貝製品、骨製品、石器等が出土している。土器は、面縄前庭式、嘉徳Ⅰ式 A、面縄東洞式、面縄西洞式、仲泊式、カヤウチバンタ式、宇佐浜式土器とともに、南九州縄文時代後期に比定される市来式土器の出土があった。当時、沖縄の考古学会で不明であった沖縄貝塚時代編年の前期の編年的位置づけが九州縄文時代との対比が可能となった。住居址は、崖中腹の岩陰の利用が想定されていたが、1997 年の範囲確認発掘調査で崖上の丘陵上で竪穴住居址の可能性を有する竪穴状遺構が確認された。

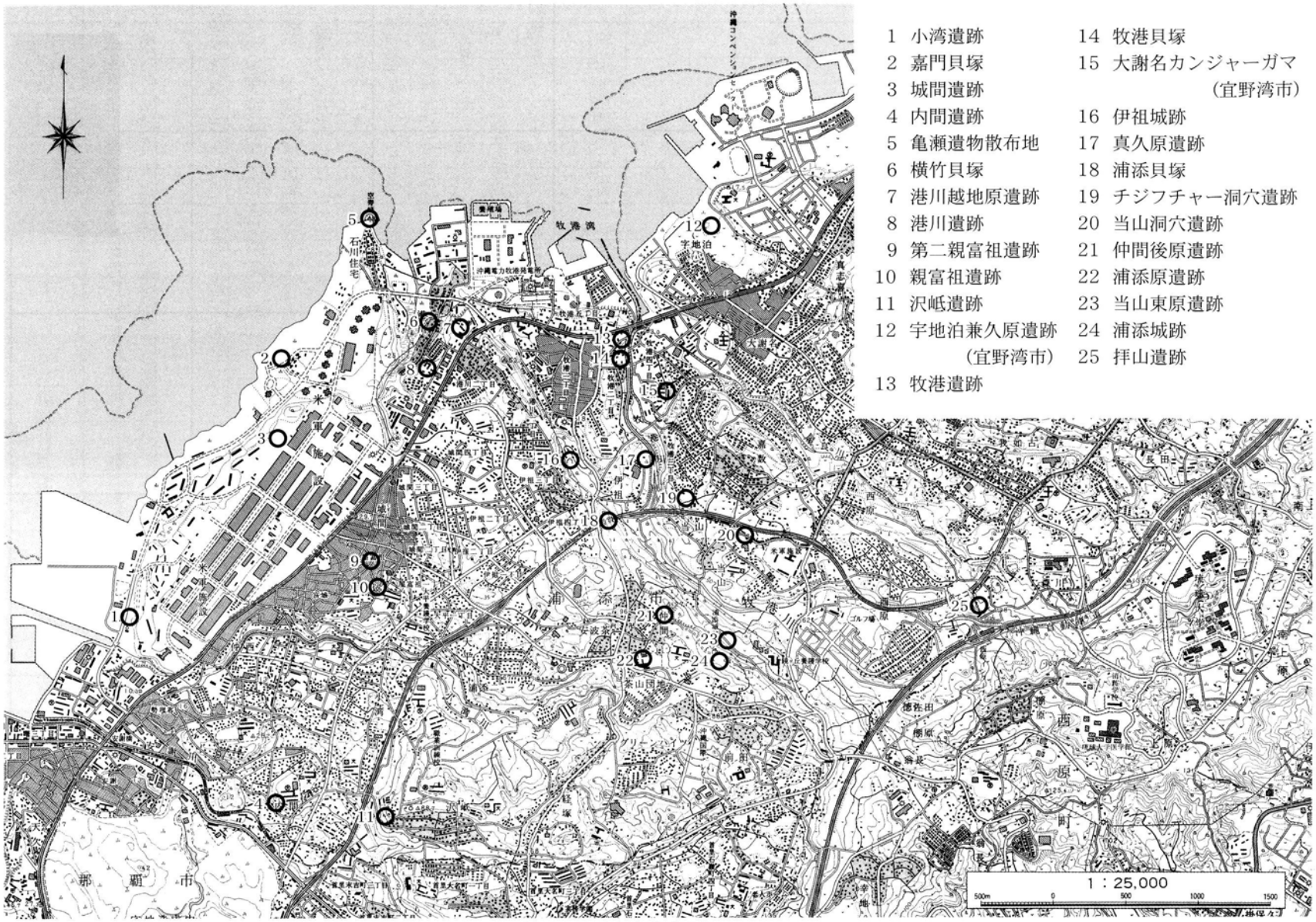
現在のところ、市内で本遺跡と同時期に属する遺跡は、面縄前庭式土器の発見された当山洞穴遺跡、竪穴住居址とその覆土より面縄前庭式土器・面縄東洞式土器等の出土のあった嘉門貝塚（註 2)、面縄前庭式土器が出土した仲間後原遺跡（註 3）の 3 例である。嘉門貝塚は、海浜砂丘部とその後背の島尻マージ土壌に形成された遺跡で、後者で竪穴住居址、覆土から前述した土器やチャート製石製品の出土があった。

本貝塚の立地する丘陵には、東から浦添城跡、仲間後原遺跡、仲間遺跡、真久原遺跡などのグスク時代に属する遺跡があり、西にグスク時代の伊祖城跡、貝塚時代前期の港川越地原遺跡、港川遺跡など遺跡が立地する。牧港川の対岸には、当山洞穴遺跡、チヂフチャー洞穴遺跡、牧港川の河口には牧港貝塚、牧港遺跡が所在するなど遺跡分布の高い地域である。

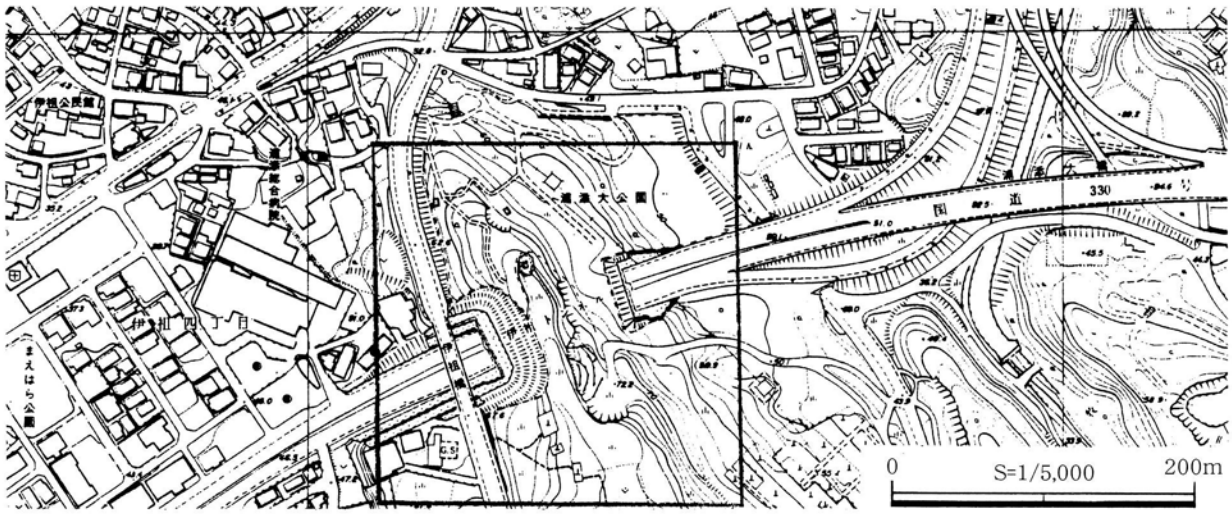
註 1 新田重清 1971「浦添貝塚出土の市来式土器について」『古代文化』第 23 巻第 9・10 号

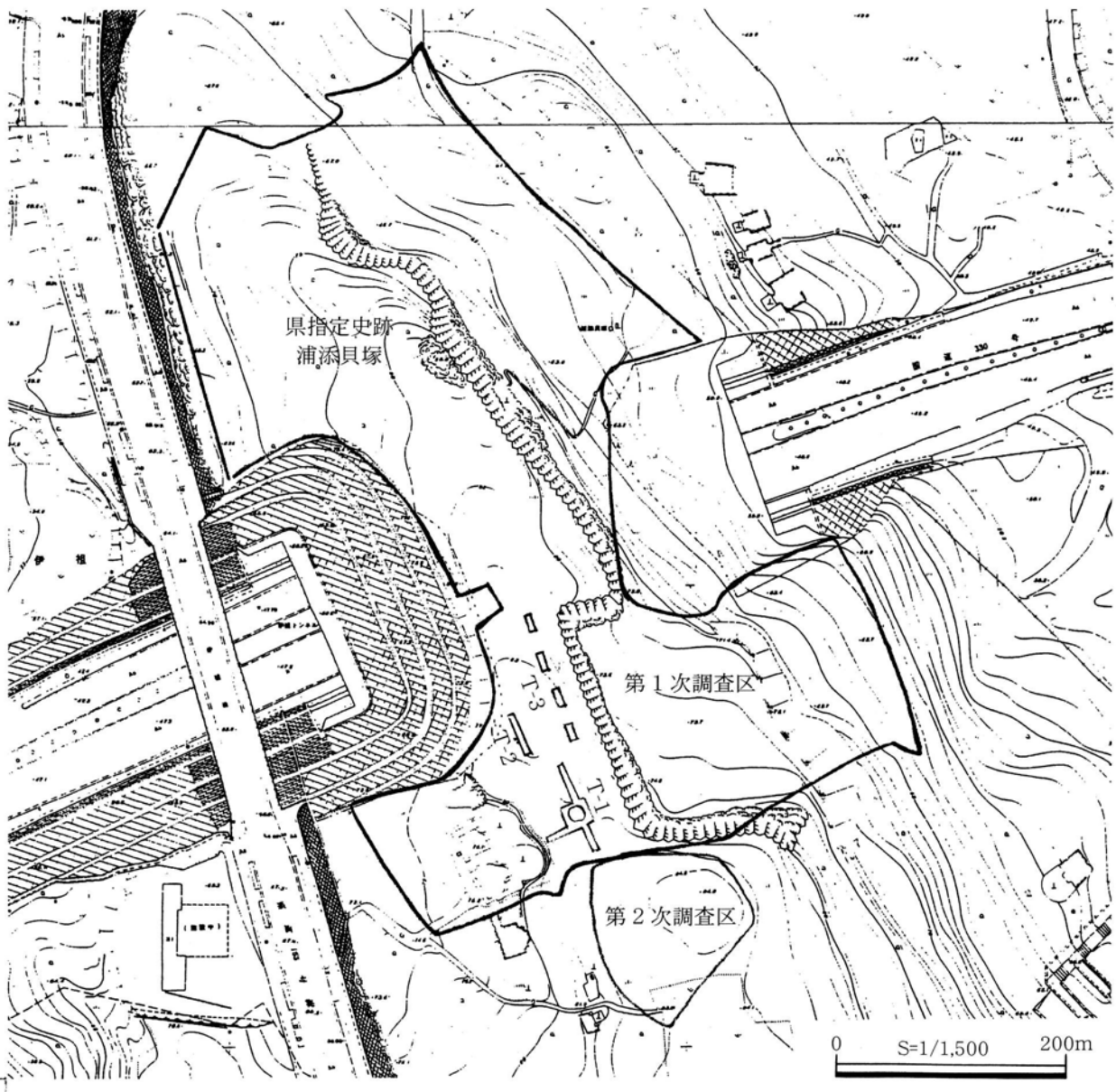
註 2 浦添市教育委員会 1993『嘉門貝塚 B』

註 3 浦添市教育委員会 2007『仲間後原遺跡 仲間あさと原の印部土手』


1 小湾遺跡
2 嘉門貝塚
3 城間遺跡
4 内間遺跡
5 亀瀬遺物散布地
6 横竹貝塚
7 港川越地原遺跡
8 港川遺跡
9 第二親富祖遺跡
10 親富祖遺跡
11 沢岻遺跡
12 宇地泊兼久原遺跡（宜野湾市）
13 牧港遺跡
14 牧港貝塚
15 大謝名カンジャーガマ（宜野湾市）
16 伊祖城跡
17 真久原遺跡
18 浦添貝塚
19 チジフチャー洞穴遺跡
20 当山洞穴遺跡
21 仲間後原遺跡
22 浦添原遺跡
23 当山東原遺跡
24 浦添城跡
25 拝山遺跡
牧港湾
1：25,000

第 24 図 遺跡分布図





第25図 浦添貝塚調査範囲図

第２章 浦添貝塚崖上地区（その１）

第１節 調査の経緯

当調査の実施は浦添大公園展望台新築工事計画に起因する。市教育委員会では工事予定地が県指定史跡「浦添貝塚」の隣接地であることから工事に先立つ試掘調査が必要である旨、事業主である県都市計画課と協議を行った。市教育委員会は平成９年６月26日付けで県都市計画課より同調査の依頼を受け、同年９月16日付けで受諾の回答をした。それらの協議を踏まえて、同年９月19日付けで調査の実施にかかる委託契約を締結した。

なお、今回の調査地区は1969・1970年の崖下での調査と混同する恐れがあることから、浦添貝塚崖上地区と呼ぶことにする。

第２節 調査の経過

平成９年度の浦添貝塚の試掘調査は、現地調査とその間の開発側との協議を挟み、都合、第一次、第二次調査に分けられる。

第一次調査は平成9(1997)年９月22日に着手した。

発掘の対象地は展望台建築予定地及びこれへ接続する上下水道管の埋設予定地である。調査方法は浦添貝塚の範囲確認を目的とするトレンチ調査とし、展望台予定地の長軸、下水道の埋設ライン、上水道の埋設ラインのそれぞれにトレンチを設定し、トレンチ番号1~3を付与した。

現地調査は、現場保安柵の設置、樹木の伐採、掘削範囲の設定を終えた後、トレンチ1(21m × 1.2m)、トレンチ2(11m × 1.2m)、トレンチ3(3m × 1.2m × 4箇所）のバックホウによる表土層の掘削除去より開始した。トレンチ２・３では地山まで第Ⅰ層現代客土が堆積する状況であったが、トレンチ１では慎重掘削により第Ⅱ層、第Ⅲ層と掘り進められ、地山面において掘り込み遺構の一部及び土器、石片が出土し、形状把握のため周辺を掘り広げた結果、竪穴状の遺構となる可能性が高いことが判明した。第一次調査では以上の成果により開発区域内に文化財が所在することが確認されたため、当該遺構の取り扱いについて調査期間中から事業主側との協議が実施された。その結果、早々に当該遺構の地下保存が決定されたため、遺構内の掘削を中止し保存措置が取られることとなった。以後は遺構検出面での記録作業等を行い慎重に埋め戻し作業を行って同年10月22日に調査を完了した。一方、展望台建設位置は変更となったものの、新たな建設位置の選定について隣接地域の埋蔵文化財の情報が求められたため、引き続き第二次調査を実施することとなった。

第二次調査は、同年10月20日に着手した。

調査地の地表面は以前の畑作地を反映した中央付近に段差のあるほぼ平坦な地形であり、それぞれの平地に概ね東西にトレンチ４と５を設け、中央付近に交差するトレンチ６を設けた。地山マージ面でピット群が検出されたため、再び事業種側と協議を行い翌年度に全面調査を実施することとし、11月14日に調査を完了した。

調査は以下の体制の下、実施した。

調査主体	浦添市教育委員会	教育長	福山朝秀
事業所管	教育部	部　長	宮里良一
事業総括	文化課	課　長	岸本 明
	〃	主　幹	安里 進
事業調整	〃	文化財係長	下地安広
調査員	〃	〃　主事	渡久地政嗣
調査補助員	〃	臨時職員	大城竜也（現：豊見城市教育委員会）
調査協力	〃	文化財係	松川 章　宮里信勇　安和吉則
発掘作業員		浦添市シルバー人材センター	

第3節 層 序

昭和10年代の土地利用図をみると調査地の位置する細長い丘陵上（浦添岩堤）は畑地として利用されていることがわかる。丘陵斜面は山林、原野、雑種地及び墓地となっており、周辺に宅地はみられない。

前述のとおり97年度調査ではトレンチ1から6を設けた。その内トレンチ1~3は丘陵尾根軸に沿って東西方向に配置した。東側のトレンチ1では地山マージの平地面が姿を表し、地山を掘り込んだ竪穴状遺構を検出した。出土遺物は土器、石片が出土し、そのうち型式の判明するものは嘉徳I式A土器である。他方、西側のトレンチ2及びトレンチ3では基盤の琉球石灰岩直上まで礫混じりの茶褐色土が堆積する。これは調査区一帯の表層部に堆積する現代客土層である。その層厚は地表面より約0.8~1.5mを測り、西側へ堆積を厚くする。よって本来の地形は広く岩堤の地形に準じてゆるやかに下っていくものであろう。また層序全般を見る限り、トレンチ1付近は東側から分布するマージの末端部にあたるものとみられる。

基本的な層序は以下のとおりである。

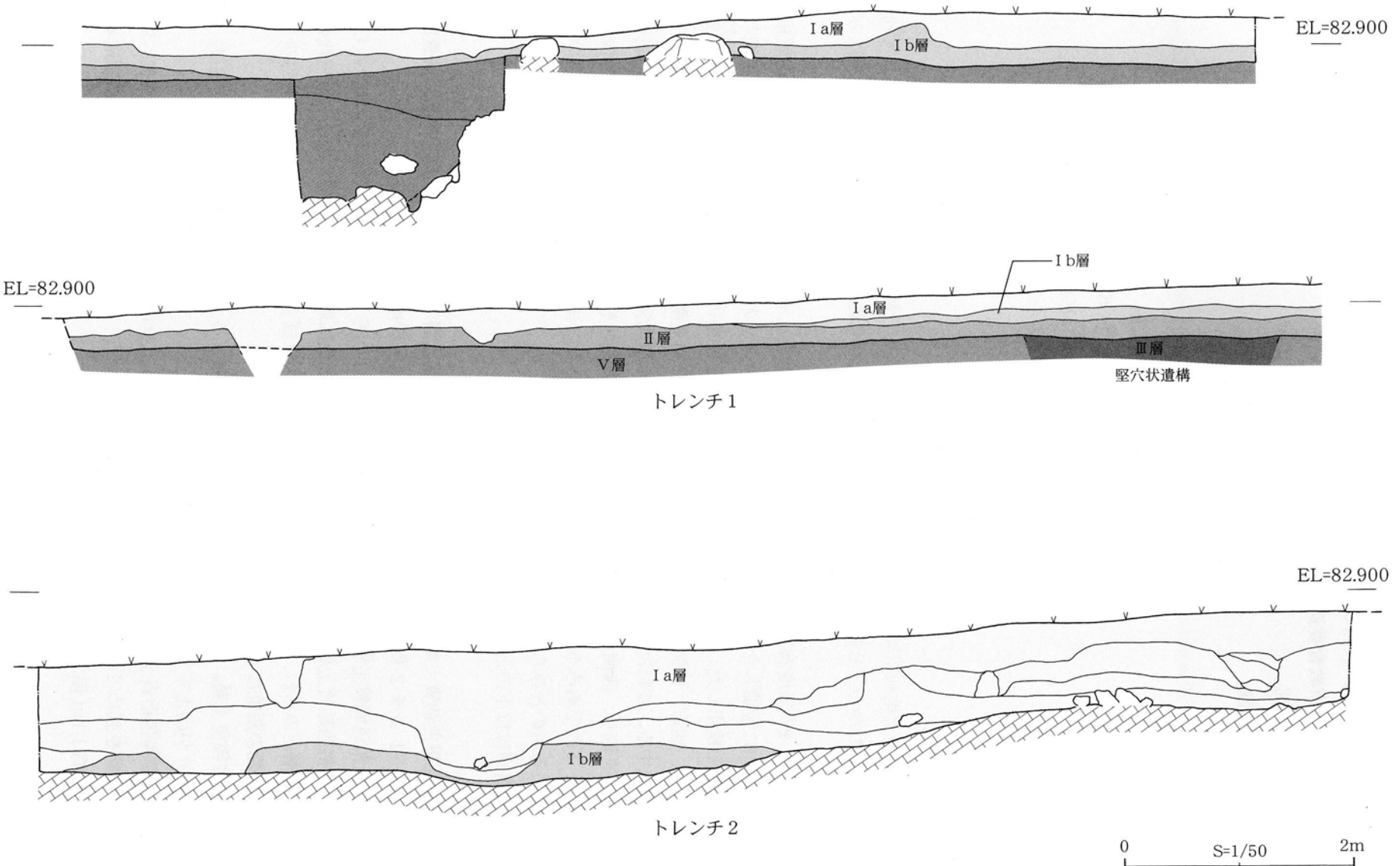
第Ia層　茶褐色粘質土層。石灰岩細礫が混入する現代客土層でビニールなどが混ざる。調査区西端のトレンチ2及び3では基盤の琉球石灰岩盤に至る堆積がみられる。

第Ib層　灰黄色砂質土層。耕作土層とみられ、トレンチ1からトレンチ4~6のほぼ全域でみられる。

第II層　茶褐色粘質土層。マージが混入する粘質土で土色は層上部でやや暗くなる。近現代の耕作土層とみられ、トレンチ1からトレンチ4~6のほぼ全域で地山に接する。遺物は少なく壷屋焼の荒焼などが出土する。

第III層　暗褐色土層。トレンチ1の竪穴状遺構内に堆積する。焼土粒、炭化物粒を多く含む。土器、石片が出土する。

第IV層　橙褐色粘質土層。地山（マージ）。基盤をなし、全体にほぼ平坦であるが、南側へはやや傾斜を強めていく。一部に石灰岩の露頭が見られ、トレンチ1中央部の試掘抗では本層より約1.1m程で岩盤に至る。


EL=82.900
Ⅰa層
Ⅰb層
EL=82.900
Ⅰb層
Ⅰa層
Ⅱ層
Ⅲ層
Ⅴ層
堅穴状遺構
トレンチ1
EL=82.900
Ⅰa層
Ⅰb層
トレンチ2
0
S=1/50
2m

第26図（図版20）層序

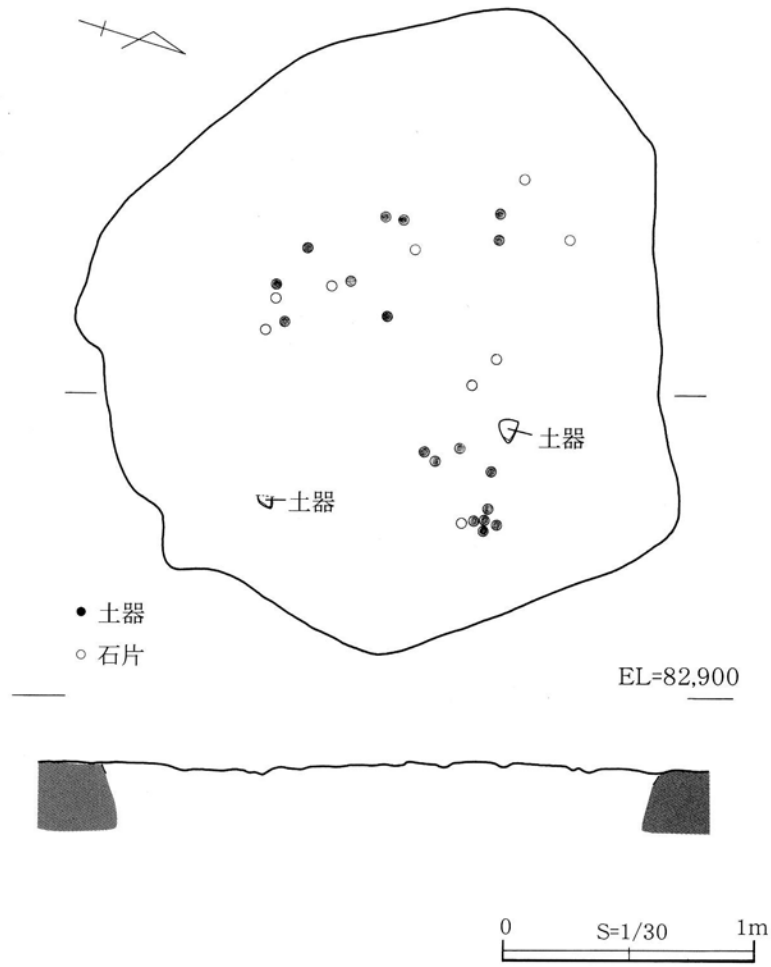
第４節 遺 構

竪穴状遺構（第 27 図 巻頭図版）

丘陵上の狭い平地部にあたるトレンチ１の中央付近で竪穴状遺構１基を検出した。遺構は基盤層である橙褐色粘質土層（方言名：マージ）を掘り込んでいる。平面形で円形或いは隅円の方形をなし、その規模は約 2.3 × 2.4m を測る。遺構埋土には焼土粒、炭化物粒などの混入が中央付近で密にみられ、周辺部に向けて粗となる。火が使用されたものとみられるが、炉などは不明である。検出面からは嘉徳Ⅰ式Ａ土器、チャートや砂岩、黒色千枚岩などの石片が出土した。なお、前述のとおり検出面で保存措置が取られたため、遺構内部の状況は未調査である。

ピット（図版 21）

第二次調査において北側崖縁に近いトレンチ７の北端でピット３基が検出され、それぞれ A~C の仮番号を付与した。詳細については次章を参照されたい。



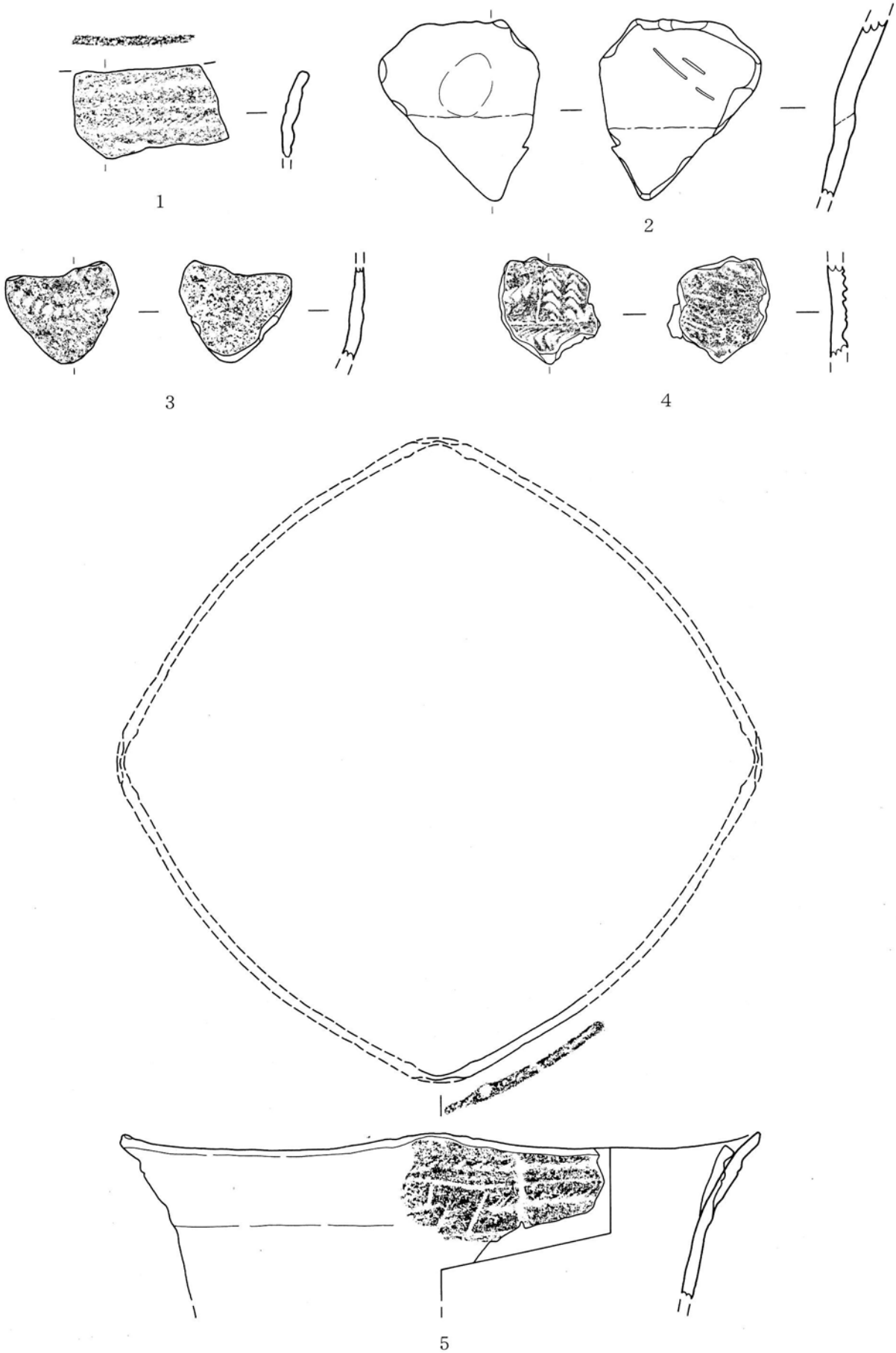
第 27 図（巻頭図版）竪穴状遺構平断面図

第５節 遺 物

出土遺物は土器と石片からなる。土器は 58 点が得られており、その内 53 点がトレンチ１の竪穴状遺構から出土している。残る５点は第二次調査区のピットＡ・Ｂから得られた。全般的に小破片が多く全形の窺える資料は得られていない。有文資料は６点得られており、うち土器型式の判明する３点は嘉徳Ⅰ式Ａ土器であった。石片（図版 22）は竪穴状遺構の検出面から８点得られている。内訳はチャート６点、砂岩１点、黒色千枚岩１点である。本島北部や周辺離島などの外部地域から持ち込まれたものであろう。全てこまかいチップや小破片で製品として扱えるものはみられない。

土器（第 28 図　図版 22）

１は５と同一個体とみられる嘉徳Ⅰ式Ａ土器の口縁部資料である。器形は上面観で方形をなし、コーナー部は低くなだらかな山形口縁を有する。口唇部は方形を呈し、先端の尖った工具による押し引き文を施す。口縁部外面には平行する沈線２条をもって横位方向及び斜位方向にステップ状に区画し、その中に先端の尖ったヘラ状工具による押し引き文を１条施す。内外面は風化による剥落が著しく器面調整の痕跡は明瞭でない。２は口縁部資料で中位に微弱な段差を有する。内外面は剥落が著しく文様は判然としない。３も内外面で剥落が著しいが、外面に押し引き文が曲線で施されているのが確認



第 28 図（図版 22）出土遺物 土器実測図

できる。4は嘉徳Ⅰ式A土器の口縁部資料である。横位及び縦位方向に先端の尖ったヘラ状工具による押し引き文を二条施し、それぞれが両側に沿った沈線で区画され文様帯をなす。裏面には器面調整時の擦痕が明瞭である。五点とも胎土には石英、チャートの粗砂粒を多く含む。

第6節 まとめ

今回の調査は前述のとおり遺構発見から早々に現地保存が決定し、展望台建設予定地の変更を前提とする協議が進められたことから、結果として遺構の完掘まで調査を進めるものではなかった。そのため発掘調査の成果としてはきわめて限定されたものである。以下に概要をまとめておきたい。

今回の発掘調査の成果としては丘陵上での竪穴状遺構1基と奄美系土器の出土であろう。竪穴状遺構は平面形で隅円方形にかなり近い形状をとるものとみられる。ややいびつであり、或いは段などの床面構造によるものかも知れない。平面形で2.3m × 2.4mの規模は竪穴住居址としてみた場合、中型からやや小型の部類に入るようである。当該期の竪穴住居址にみられる例えば遺構内の柱穴等や石囲いを示唆する礫、屋内炉などの存在は保存措置を取ったため未調査である。遺構内からは嘉徳Ⅰ式A土器とチャートや砂岩、黒色千枚岩などの石片が出土し、縄文後期(暫定編年前Ⅳ期)前半に比定される。

浦添貝塚における最初の調査である1969、70年調査では、奄美系の面縄前庭式、面縄東洞式、嘉徳Ⅰ式、面縄西洞式などを主体とし、仲泊式、カヤウチバンタ式、宇佐浜式が出土しており時代幅は広い。一方、今回の調査で判明した土器型式は嘉徳Ⅰ式A土器のみであり、主たる遺構も竪穴状遺構1基であることから現在のところは比較的短期の活動の場であったことが考えられる。とはいえ今調査において浦添貝塚の崖上に活動の場があったことが示されるとともに従来、居住地に推定されていた崖中腹にあるいくつかの半洞穴に加えて、崖上にも居住域がある可能性が得られた意義は大きい。今後は、これらの時代幅に対応する遺構の発見が課題であり、崖上や崖中腹一帯の調査の進展により総合的に検討されるものであろう。

最後に周辺遺跡に目を移すと浦添貝塚の東方約1キロ以内にある当山洞穴遺跡において1975年に面縄前庭式土器が採集されたといわれており、近接する両遺跡が何らかの関係があったのではないかとみられるとの指摘(市史6)がなされた。近年でも浦添貝塚と同じ浦添岩堤上にある仲間後原遺跡の発掘調査(2003年)で面縄前庭式土器の小破片数点が出土しており、周辺遺跡での奄美系土器の出土例は少しずつではあるが増加をみせている。今後の周辺地域での調査に期待したい。

参考・引用文献

浦添市史編集委員会 1986『浦添市史』第六巻資料編5 自然・考古・産業・歌謡
浦添市教育委員会 2007「仲間後原遺跡」『浦添市文化財調査研究報告書』

第3章 浦添貝塚崖上地区（その2）

第1節 調査の経過

発掘調査範囲は、試掘調査で竪穴状遺構の確認された北側を除く一帯で、展望台と駐車場として整備する区域である。調査箇所は東側で一段高く、西側は低い段丘状地形である。

調査は、平成10年9月16日に着手し、前年度に実施した試掘調査のトレンチ設定杭の確認から行った。

前年度の試掘調査との重複を避けるため、トレンチラインを基準に調査区のほぼ中央を中心として南北と東西に土層観察用の畦を設け、4つの区画に分けた。試掘調査の結果から、当該地区における遺物包含層が確認されていないこと、地山面における遺構確認調査が主となること、公園用地となる前は畑地であったことなどから土層観察用畦に沿って前年度のトレンチの埋め土をバックホーでもって掘りあげた。

掘削作業と並行して調査区一帯の地形測量も実施した。

調査区北側をバックホーで掘削する間、南側の畑地であった箇所のトレンチによる調査を実施した。結果、畑地耕作土下は、赤褐色の地山が露出し、遺構及び遺物包含層は認められなかった。

調査区北側は、試掘トレンチの壁面で層序を確認した後、遺物包含層、遺構の有無を確認しながらバックホーによる削平を北側からはじめ、南側へ拡張していった。

地表面から地山までの深さは、地形を反映して崖縁のある東側で浅く、西側では比較的深く、そして緩やかに傾斜する。土壌は細かい砂粒の混在する砂質土壌である。

調査区の東側で、ピット状の落ち込み遺構が地山直上で検出され、その一つの覆土から土器片の出土があった。また、竪穴住居址の検出も想定されたが、検出するにはいたらなかった。

検出遺構の平板測量、層序の実測を行った後、公園の作業ヤードに仮置きしていた発掘調査の排土をトラックで運搬して発掘調査範囲に埋め戻し、11月26日に発掘調査を終了した。

尚、1997年の試掘調査で確認された竪穴状遺構と今調査で検出されたピット状遺構については、検出面を掘削することなく盛土し、駐車場として整備することとなった。

第2節 層序

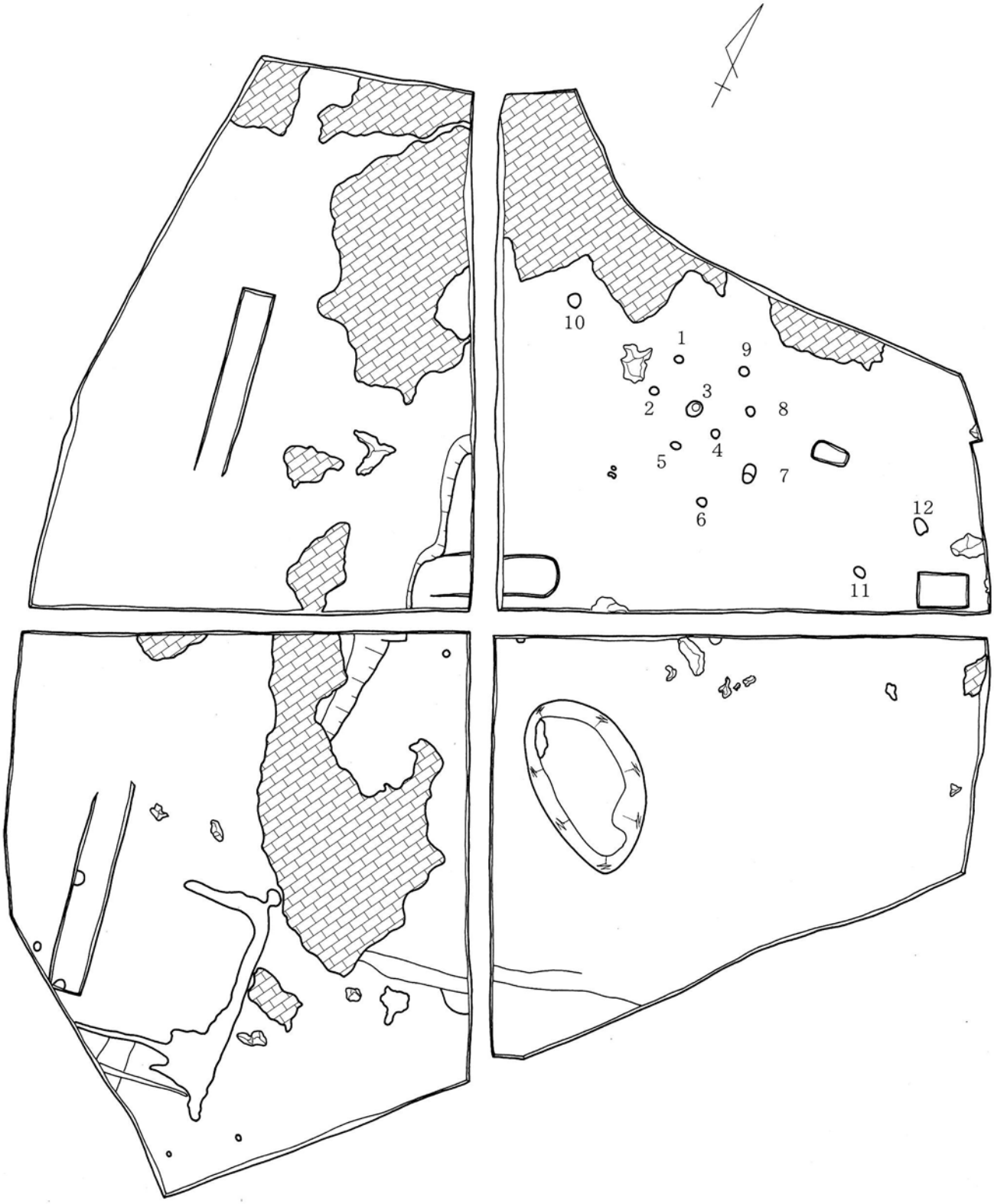
今回の調査で確認された層序は、東西の段丘部で複数がみられるが、基本的には畑地耕作土と地山の2枚である。いずれにも、微砂粒が混在する砂質の土壌で、保水性は弱い。調査区東側はほぼ平坦で、段丘の下位にあたる西側は緩やかな傾斜で石灰岩露頭にいたる。石灰岩の露頭する西側、南側では近世の掘り込み墓が造営される。層序を第30図に示す。

第Ⅰ層a　調査区を東西に分ける段丘の斜面部にある攪乱土で、一帯を平坦に整地するために周辺より寄せられたものである。

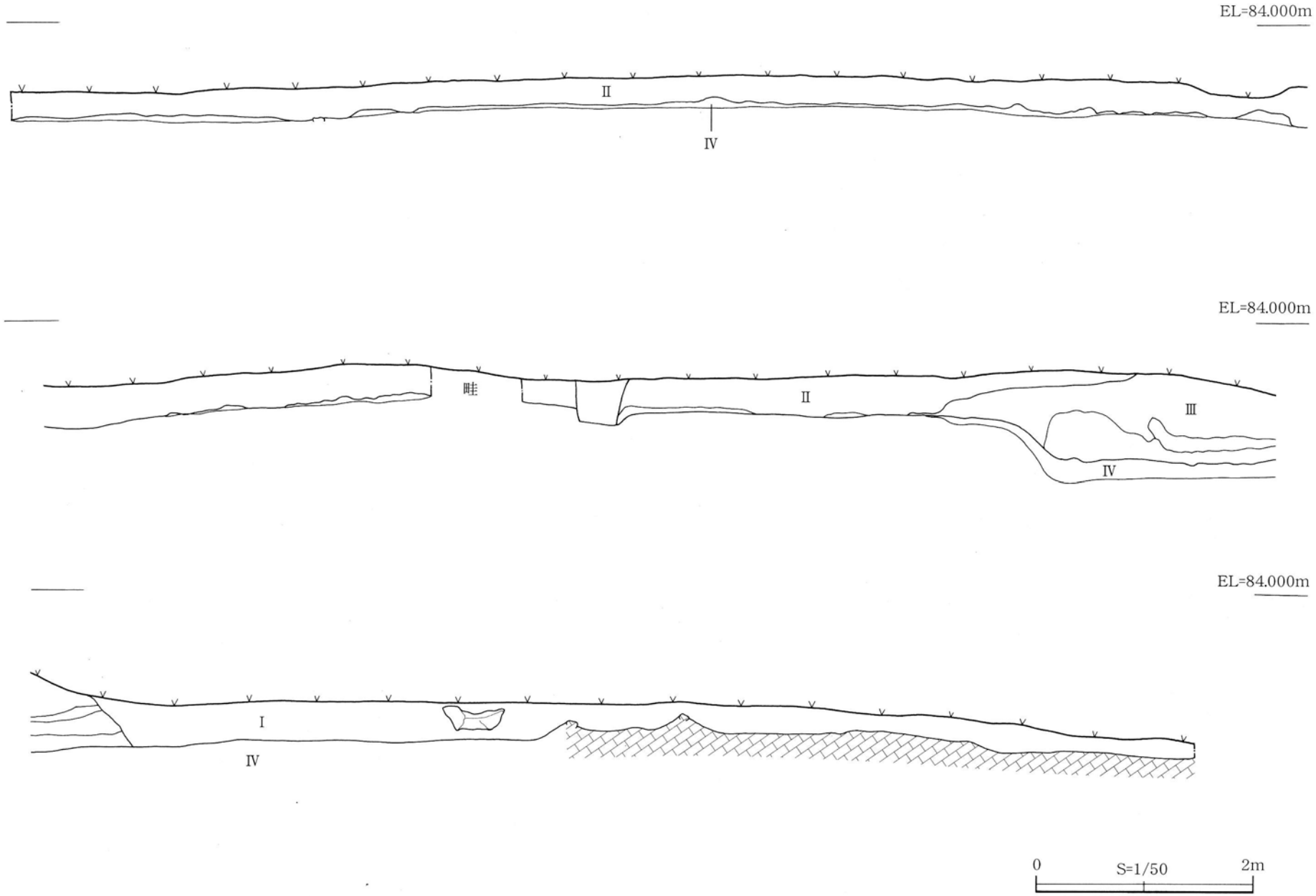
第Ⅰ層b　畑耕作土である。黄色の微砂粒を混在する淡い灰黄色の混土砂層で、所々で橙褐色を呈する箇所もある。

第Ⅱ層　橙褐色の混土砂層で、段丘部の斜面でみられる。

第Ⅲ層　地山である。琉球石灰岩地帯でみられる粘質のある赤褐色の「島尻マージ」に微砂粒を混在し、手触りは砂質である。



第 29 図 調査区遺構分布図



第30図 南北畦西壁の層序

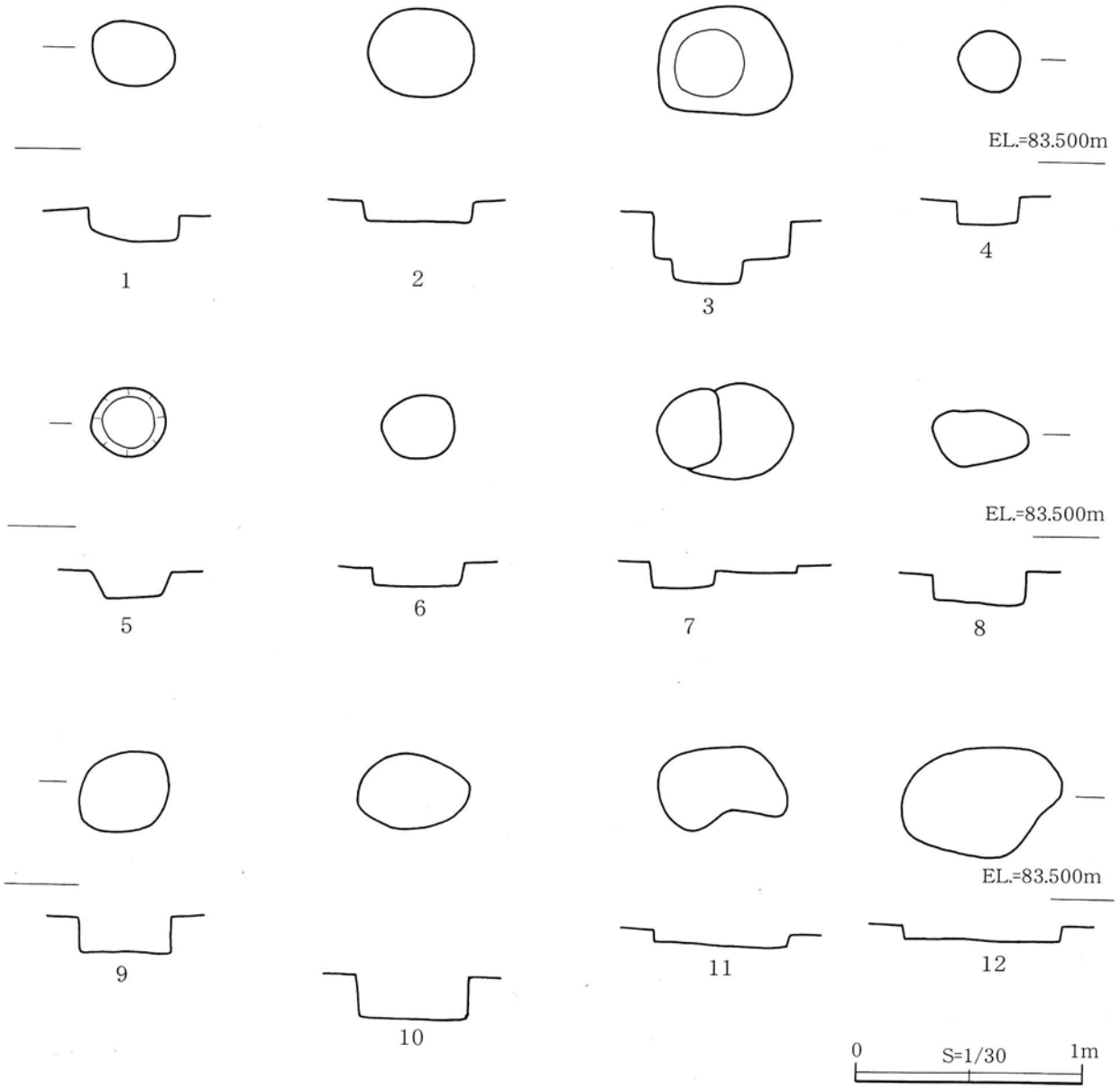
第３節 遺構

調査で確認できた遺構は、柱穴様のピット状遺構の12例であった。調査区の北東区画でまとまって検出されたもので、覆土に炭化物を混じ、１例からは土器片14点の出土があった。プランについては、地表面から深度が浅く、畑の耕作などにより落ち込みも浅く、判然としなかった

表４ ピット状遺構計測表

単位：cm

No.	長径	短径	深さ	備　　考
1	38.0	28.0	22.0	
2	46.0	40.0	8.0	
3	57.0	50.0	30.0	土器片14点出土
4	28.0	27.0	10.0	
5	33.0	31.0	8.0	
6	32.0	27.0	10.0	
7	30.0	27.0	10.0	
8	42.0	24.0	14.0	
9	43.0	35.0	16.0	
10	50.0	33.0	17.0	
11	57.0	30.0	7.0	
12	72.0	48.0	7.0	



第31図 ピット状遺構

第４節 遺物

先史時代に属する遺物は、柱穴様のピット状遺構３の１例で出土した土器片 14 点、片刃の小型の石斧１点、磨石の破片の１点で、他はすべて近世に属する陶磁器 136 点である。また、陶器片を円形に加工する円盤状製品３点も得られている。

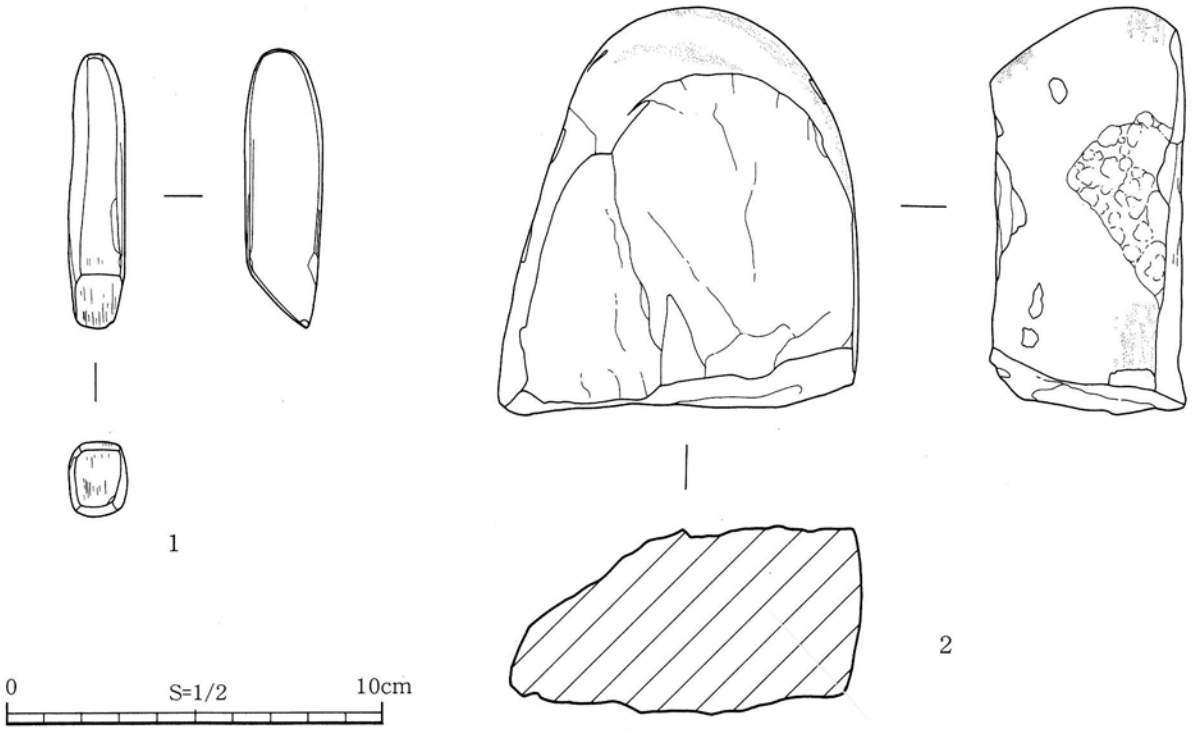
(1) 土器

土器片はいずれも胴部の小片で、文様は認められない。器色は茶褐色を呈し脆弱で、胎土に石英の微砂粒を含み、前述した崖上地区（その１）出土の土器に類似する。いずれもピット状遺構３よりの出土。

(2) 石器

第 32 図１の小型の石斧が得られている。長方形の自然石を利用したもので、器面に研磨による縦位方向の複数の稜が認められる。刃面は片面より研ぎだされて片刃である。長さ 7.2cm、最大幅 1.5cm、最大厚さは基部中央で 2.0cm、重量は 45g。石質は未同定であるが、細粒砂岩であろう。ピット状遺構が検出された北東区画の地山直上からの出土。

磨石は、第 32 図２に示すものである。表裏面及び下部を大きく折損する。敲石と兼用するもので、右側面と裏面の側縁に敲打痕を残す。現存長 10.6cm、最大幅 9.7cm、最大厚 4.7cm、重量 760g である。石質は未同定のため不明である。南西区画の第 II 層より出土。



第 32 図 石器

(3) 陶磁器

①施釉陶器

陶磁器は、総数 136 点が出土した。陶磁器は沖縄産と本土産があり、沖縄産は施釉陶器 57 点、無釉焼締陶器 41 点、アカムヌーと称される陶質土器 25 点である。本土産磁器は杯等の 13 点であった。

施釉陶器は、碗（16 点）、小碗（2 点）、壷（1 点）、皿（2 点）、鍋（2 点）、火炉（1 点）の 6 種と

蓋(1点)が認められ、器種不明は32点であった。

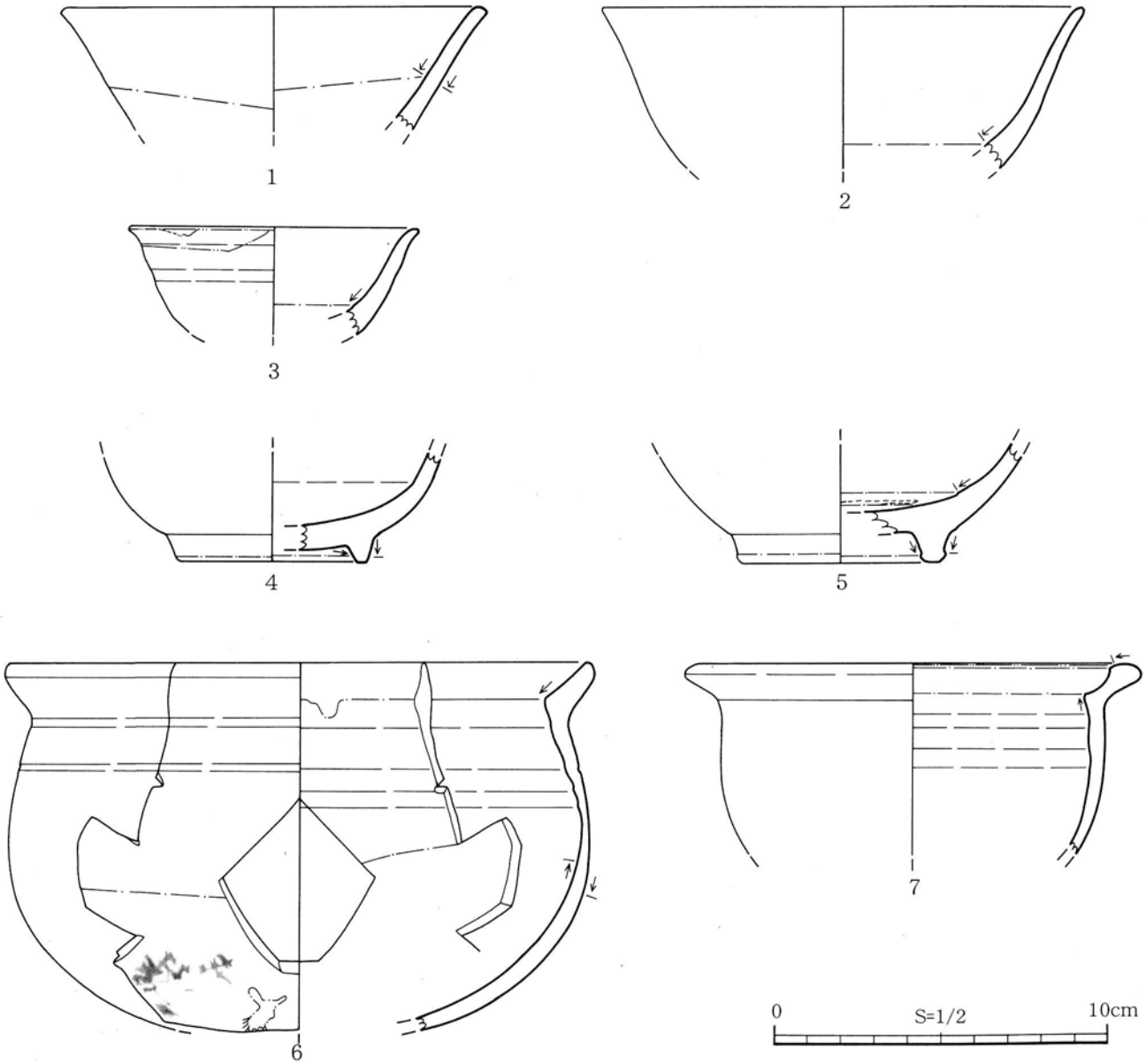
第33図に器形の窺える資料を示した。1は口縁部の直口する碗で、推算口径12.7cmである。内外面ともに灰釉が施されるが、いずれも腰部以下は露胎である。釉は被熱により変色し、失透する。素地土に黒色の微粒子を混入し、色調は施釉範囲で灰白色、露胎部は淡い橙褐色である。

2は口縁部が僅かに外反する碗である。素地に白化粧土を施した後、透明釉を施釉する。内外面とも貫入を認める。素地土の色調は、淡い黄橙色である。口径は推算14.4cm。

3は推算口径8.6cmを計る小碗で、口縁部は外反し端部で反る。内外面とも白化粧後に透明釉を施すが、外面の口縁上部に灰釉を認める。内外面とも貫入が入る。素地土は、灰白色である。

4は推算底径5.6cmの碗の底部資料である。畳付を除く内外面とも白化粧後に飴釉を施す。素地土の色調は淡い橙褐色で、内外面に細かい貫入を認める。

5は底径推算6.2cmの碗の底部資料である。内外面とも白化粧を施した後に、透明釉を施釉する。畳付は露胎、内底面は蛇の目釉剥ぎされ、重ね焼きの際の砂目の痕跡を残す。素地土の色



第33図 施釉陶器

調は、灰白色である。

6は堆算口径26.6cmを測るもので、口縁部は逆「L」字状に成形し端部は肥厚する。口唇部から胴部中央まで飴釉が施され、胴下部及び内面は露胎である。素地土の色調は灰褐色である。

7は口縁部が「く」字状に屈曲し、口唇部は幅広く平坦である。口唇部から外面は飴釉が施され、内面の屈曲部は釉がかきとられて露胎で、以下は灰釉が施釉される。素地土の色調は灰褐色。

② 無釉焼締陶器

無釉焼締陶器は、擂鉢(4点)、鉢(1点)、壷形(4)、灯明皿(1点)の4種が確認できた。胴部等の器種不明は31点である。

第34図1は灯明皿とみられる口縁資料である。端部は舌状に成形し、推算口径は10.8cmである。器色は赤褐色を呈する。

2は壷の口縁資料で、推算口径9.6cmを測る。器形は頸部で窄まり、舌状に成形された口縁部は外反する。器色は内外面黒褐色を呈する。

3・4は口縁部が玉縁状をなす壷である。3は推算口径17.6cmを測るもので、内外面と自然釉で黒褐色を呈する。

4は外耳の痕跡を残す口縁部資料で、推算口径15.8cmを測る。器色は、外面は淡い黄褐色に変色し、内面は赤褐色を呈する。

5・6は擂鉢の口縁資料である。5は推算口径27.2cmを測るもので、口縁部は逆「L」字状に成形する。口唇部の外縁に1条の圏線を施す。内面に施された櫛目は、口唇下1.5cmまで細かく密に施している。器色は内外面とも赤褐色である。

6は推算口径26.6cmを測るもので、口縁部は逆「L」字状に成形し端部は肥厚させている。幅広い口唇部は僅かに弧を描き、外縁側に2条の圏線を施している。器色は外面が褐色、内面は赤褐色である。

7は推算口径29.4cmの鉢で、胴部は僅かに弧を描いて逆「L」字状の口縁部にいたる。口唇部には1条の圏線を施す。器色は、口唇部中央から外面は暗赤褐色、内面は赤褐色である。

③陶質土器

陶質土器は25点が得られ、火炉(1点)、鉢(2点)、鍋(2点)、壷(1点)と鍋の蓋(1点)、器種不明は18点であった。第35図1は鍋の蓋とみられる資料で、端部は丸く肥厚する。器色は橙褐色である。

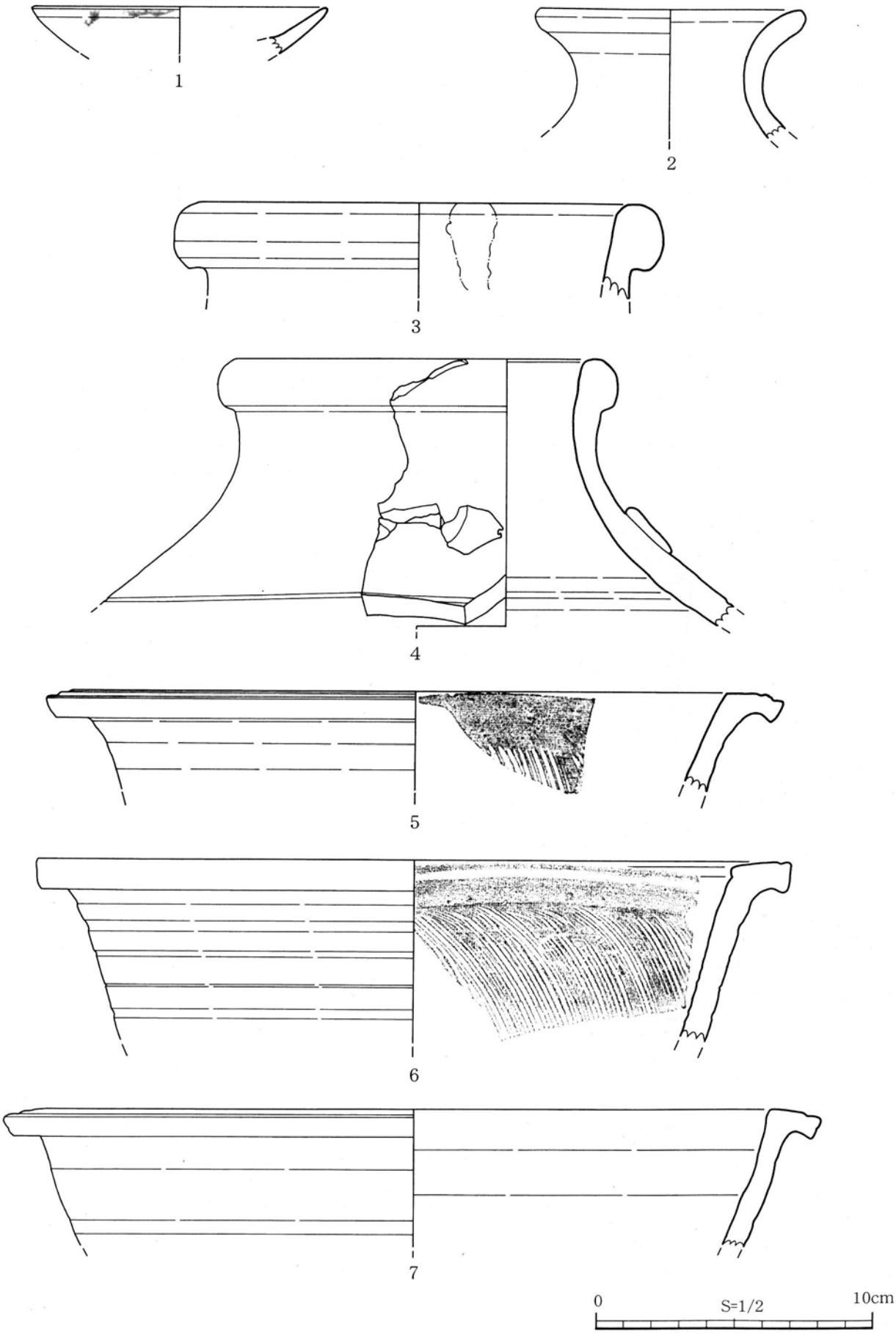
2は鉢の口縁部資料で、口縁部は内湾し、口唇部は舌状を呈する。口縁部には3条の圏線が施される。器色は内外面とも橙褐色を呈する。

3は火炉で、口縁部が「く」の字状に屈曲するものである。外面の屈曲部に2条の圏線を施す。内面の屈曲部から上方は使用により煤けて黒色を呈する。器色は内外面とも橙褐色。

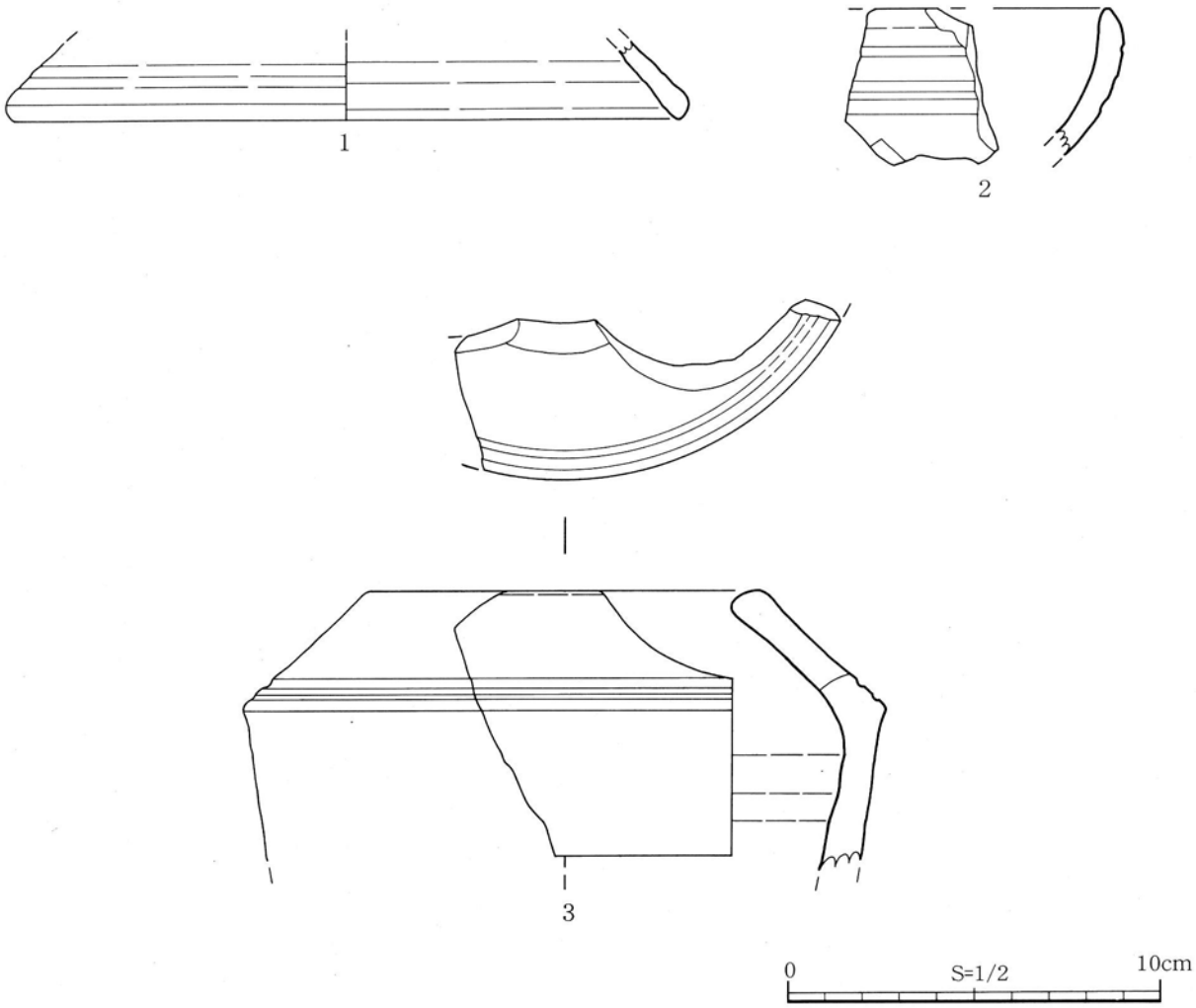
(4) 円盤状製品

陶器片を円形に加工したいわゆる円盤状製品が3点出土している。第36図1は沖縄産施釉陶器の白化粧後に透明釉の施した小碗の底部を加工したものである。内底面は蛇の目に釉剥ぎされ、畳付は露胎である。加工は高台の径に合わせてなされ、直径は3.8cmを測る。

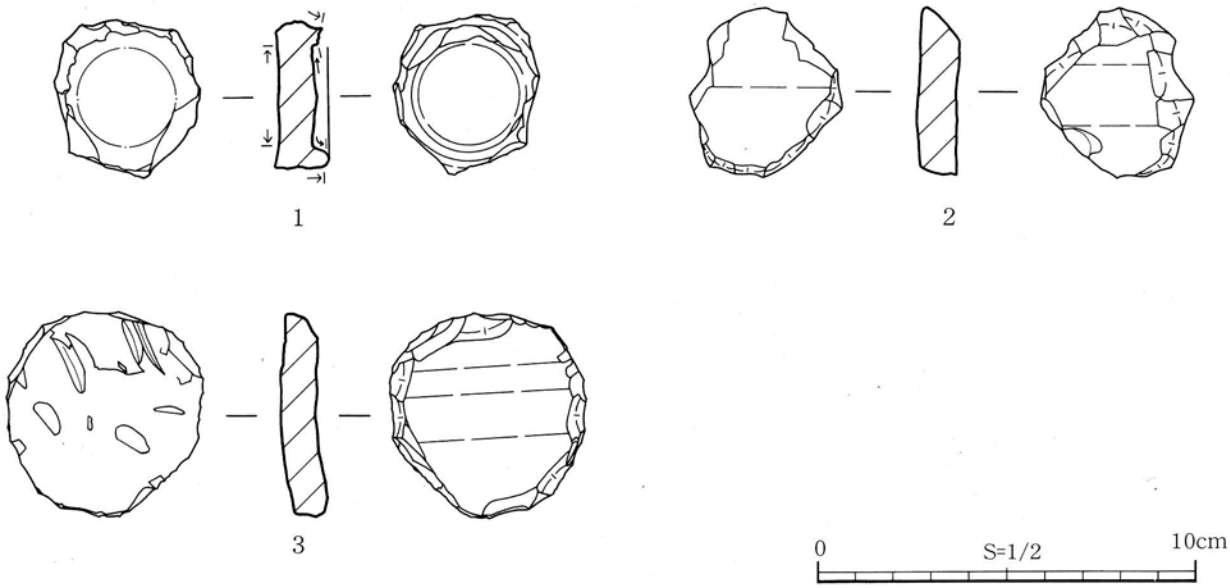
2・3は沖縄産の無釉焼締陶器の胴部片を加工するものである。2は打割時の粗縁を細かいチッピングで仕上るもので、表面の外縁は細かく刻まれている。長径5.4cm、短径5.1cmである。
3はいびつな円盤状を呈するもで、長径4.3cm、短径4.0cmを測る。



第 34 図 無釉焼締陶器



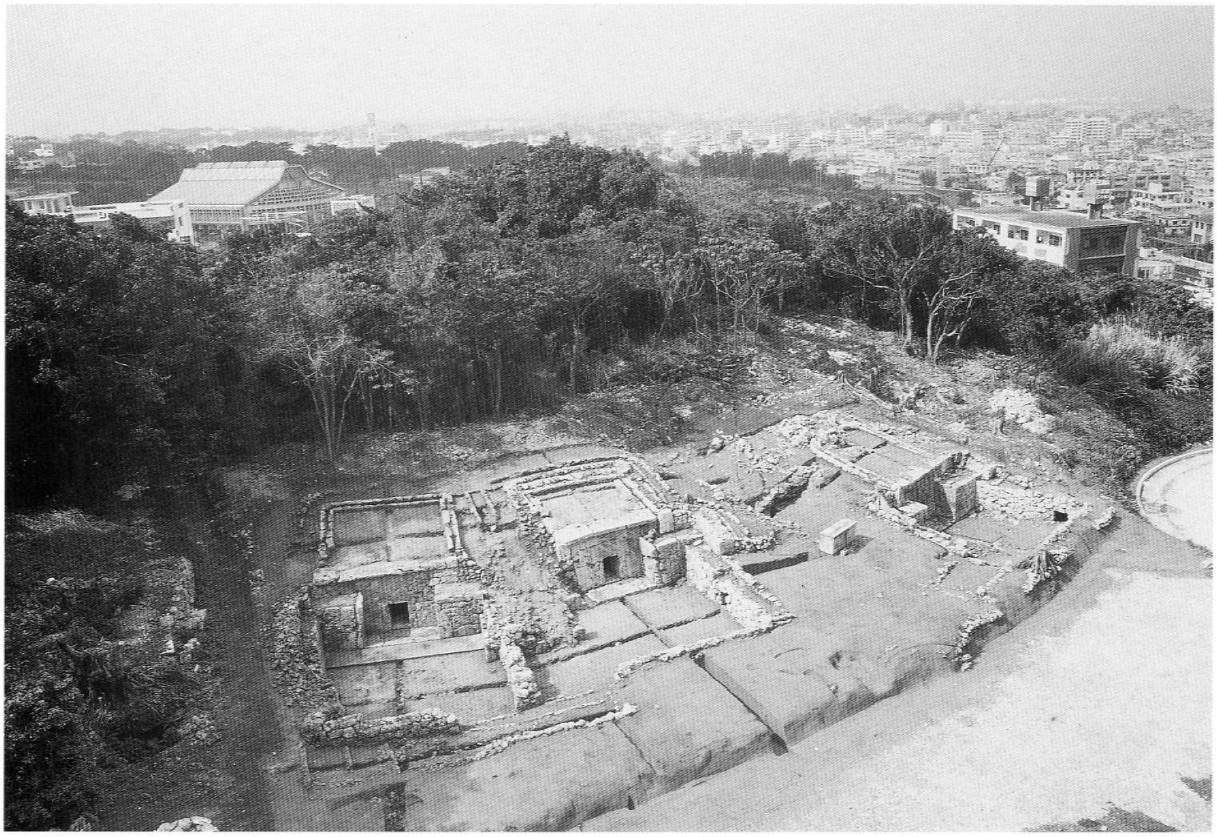
第 35 図 陶質土器



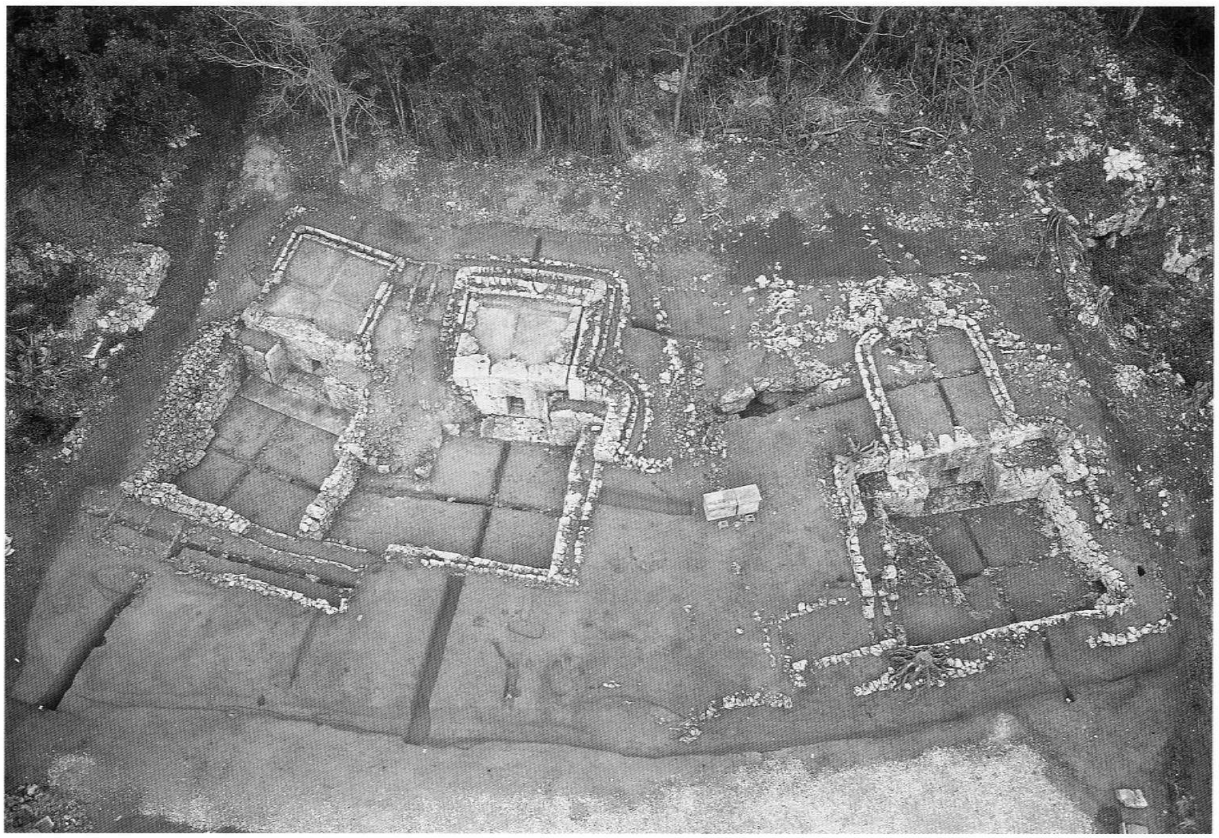
第 36 図 円盤状製品

図　版

図版1　全景

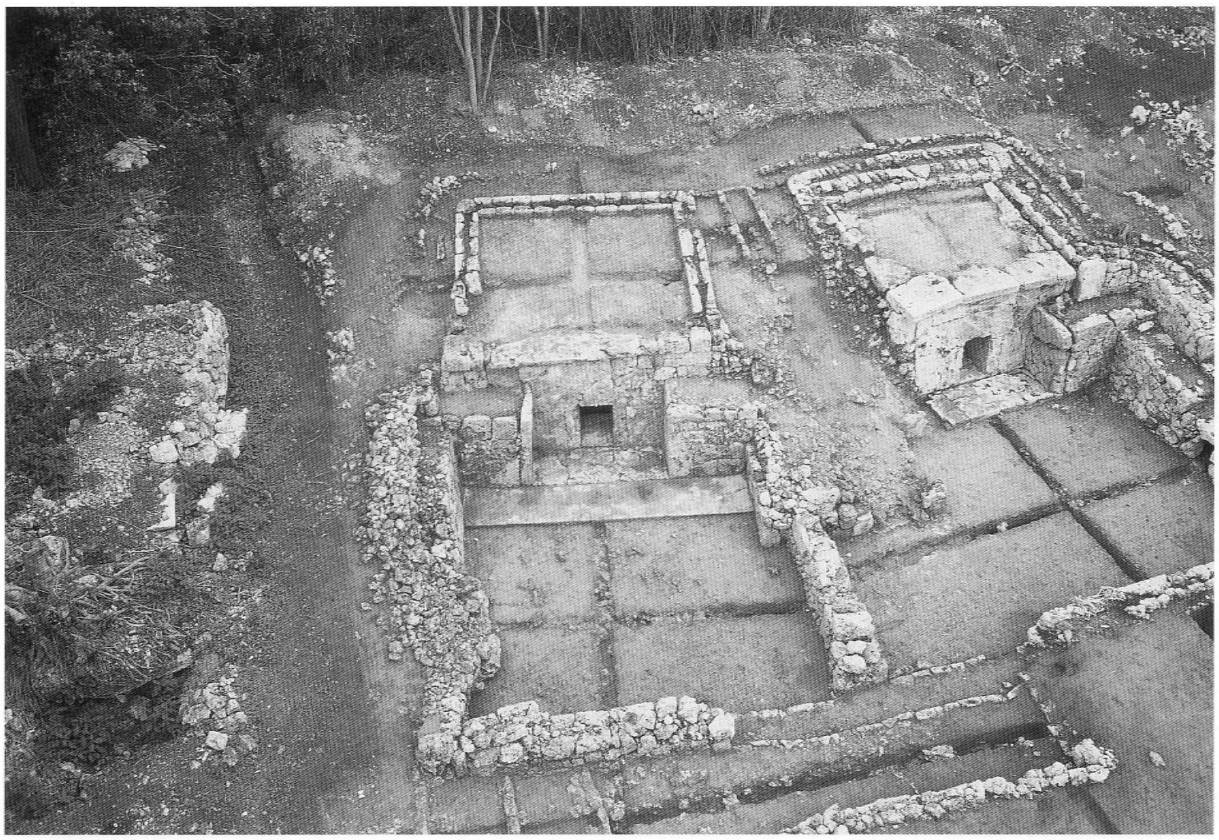


調査区全景

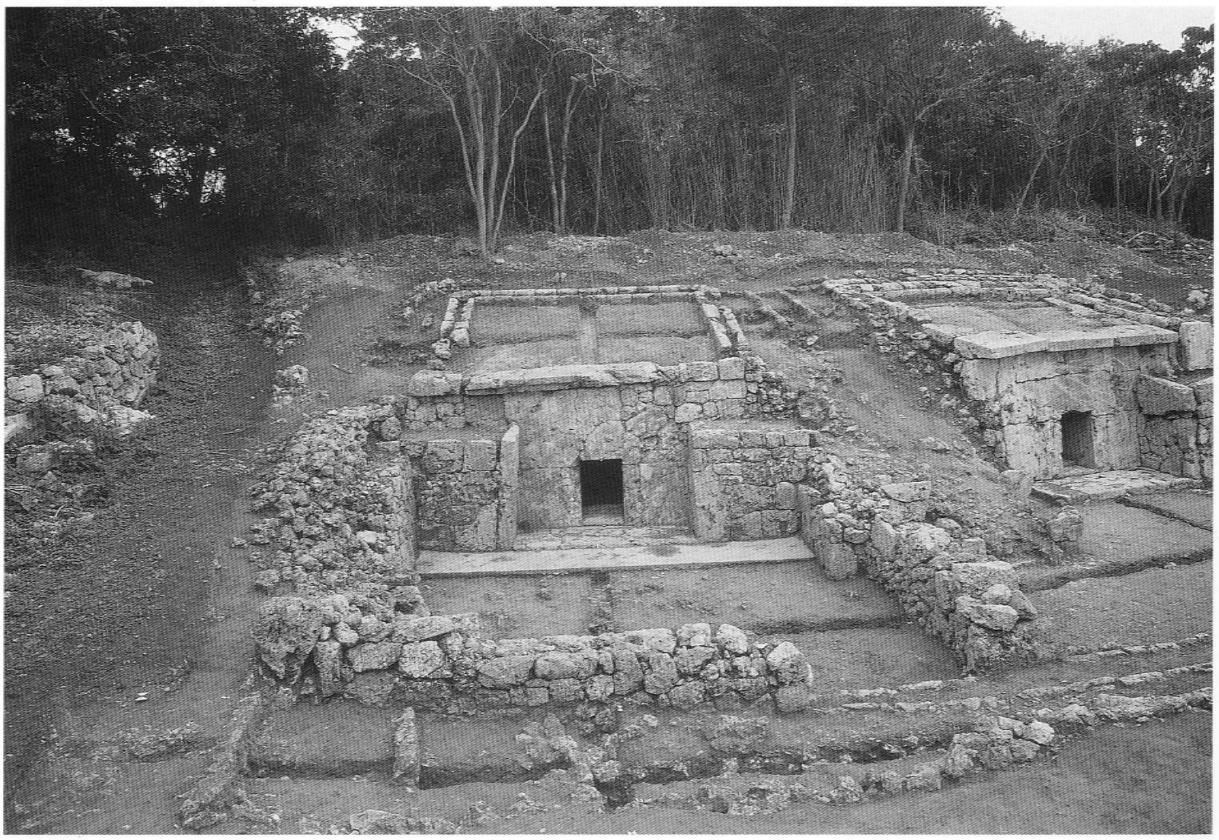


調査区全景

図版2　1号墓



1号墓（上方より）



1号墓（正面より）

1号墓墓庭東側壁

1号墓墓庭西側壁

図版4　1号墓

1号墓墓室内棚

1号墓墓室内シルヒラシ

図版5　2号墓

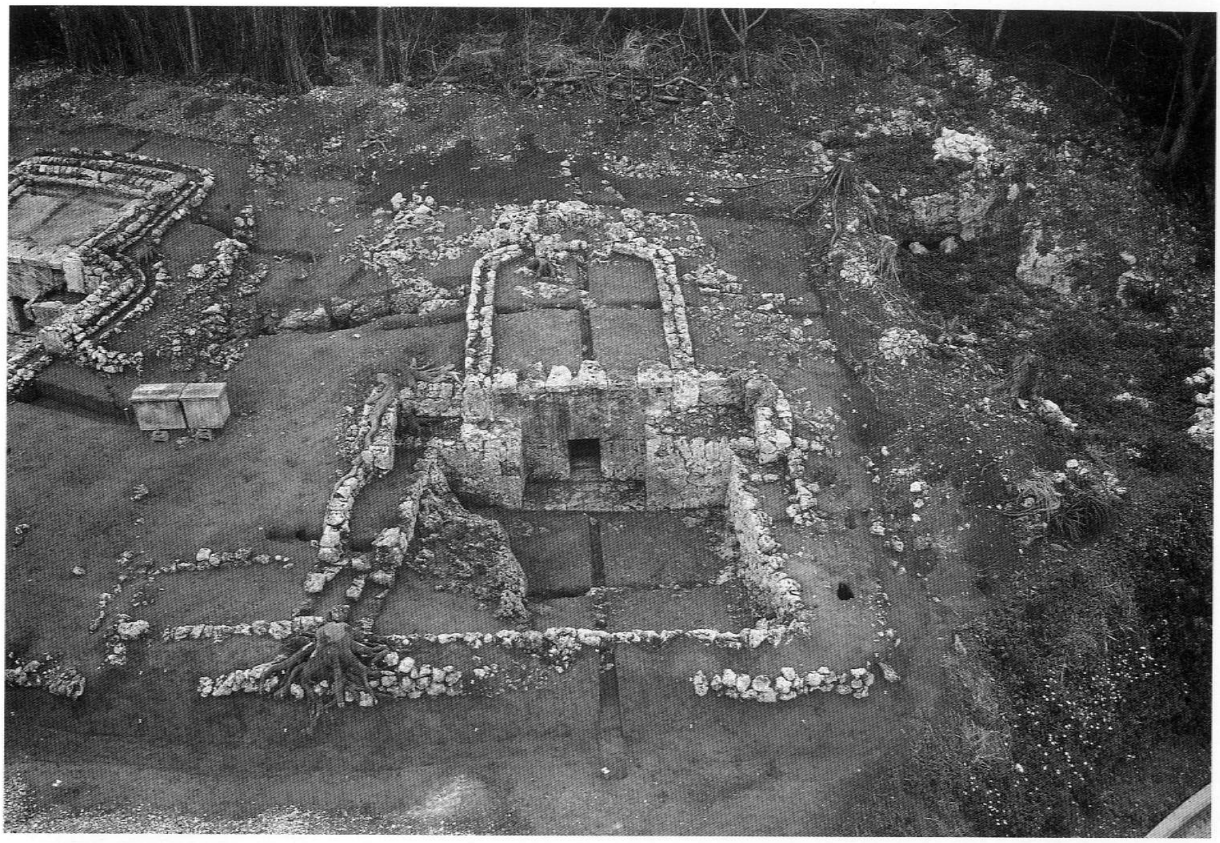
2号墓（上方より）

2号墓（正面より）

図版6　2号墓

2号墓墓庭西側壁

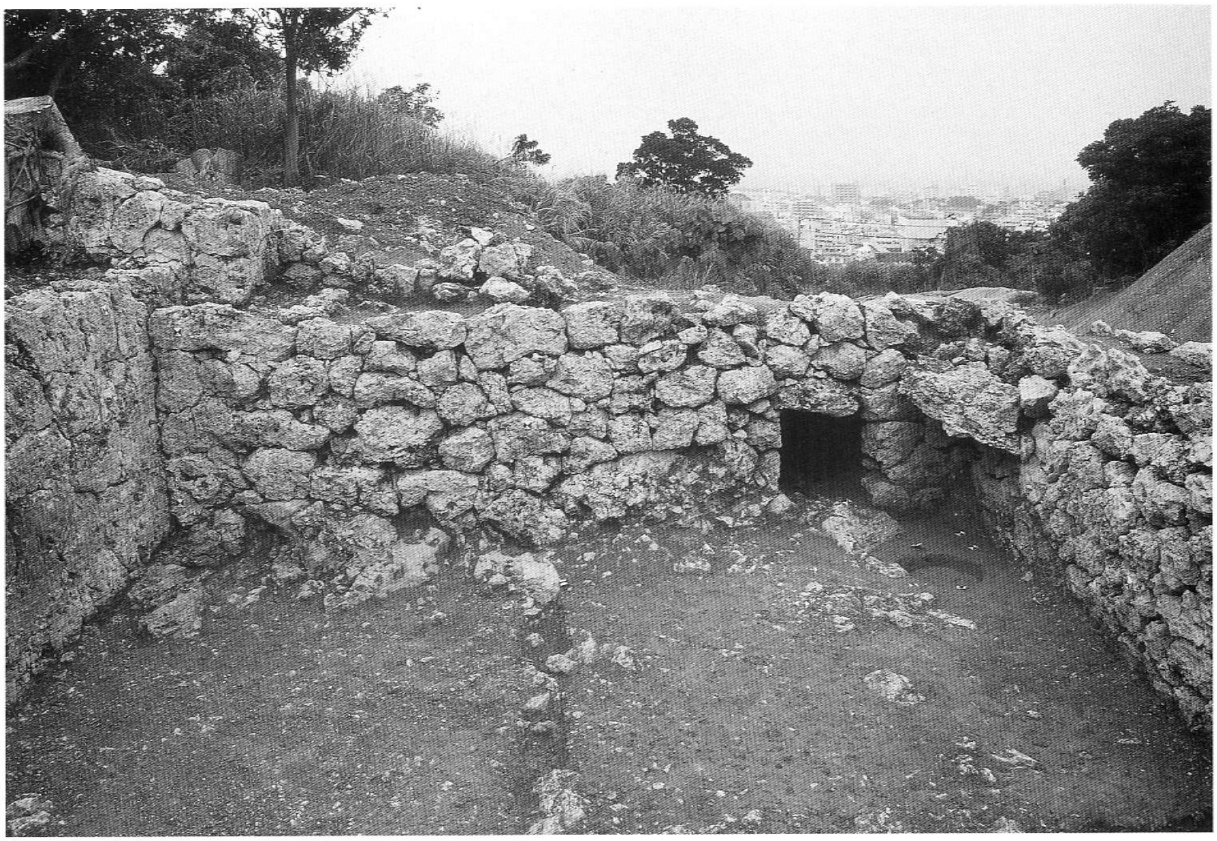
2号墓墓室内



3号墓（上方より）

3号墓（正面より）

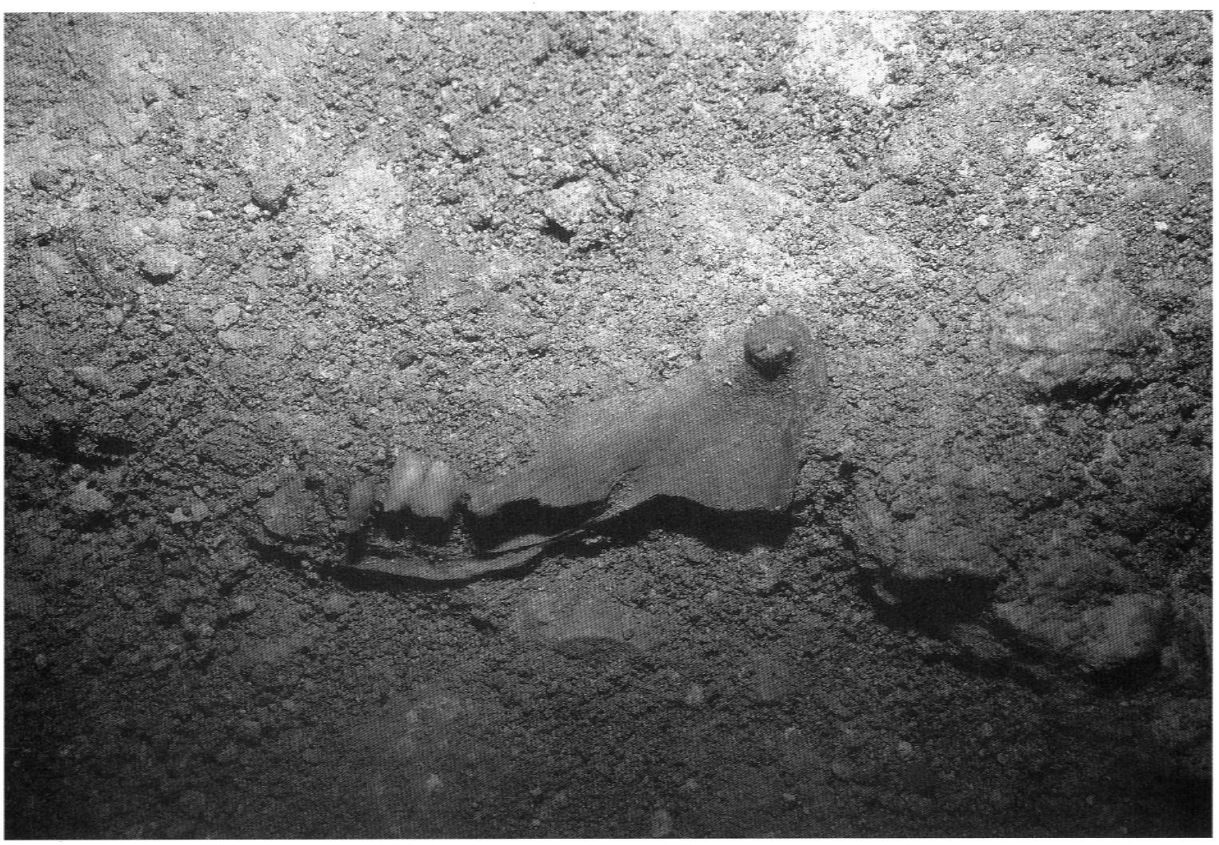
図版8　3号墓



3号墓墓庭西側壁

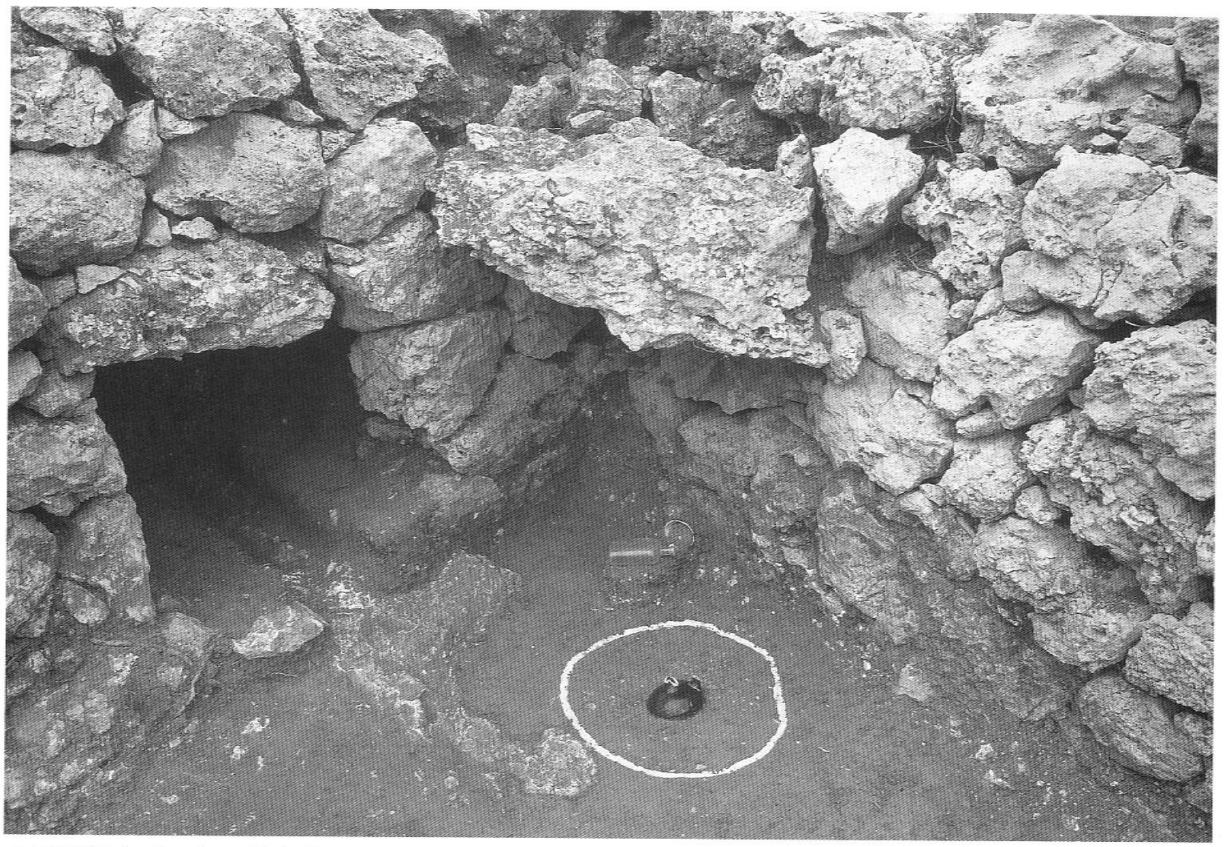
3号墓カビアンジ内遺物出土状況

3号墓墓室内シルヒラシ獣骨出土状況



同上

図版10　3号墓



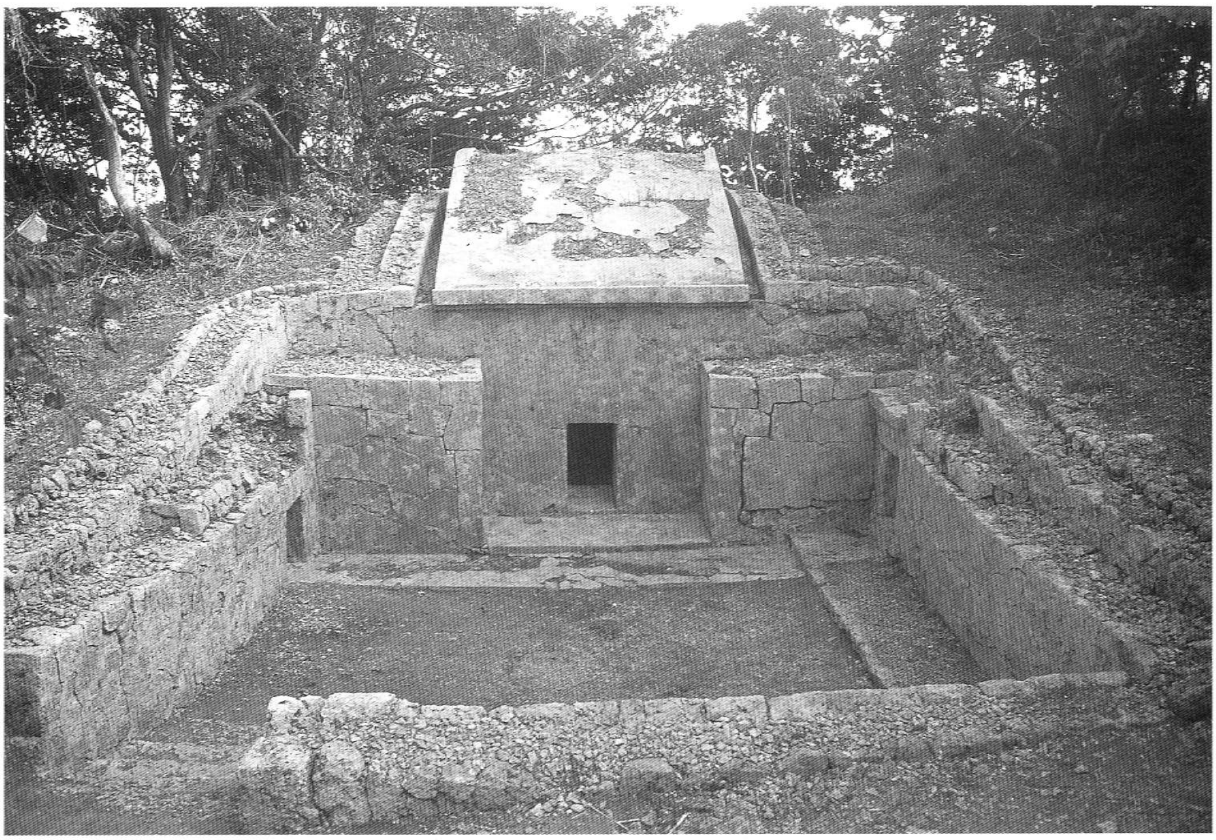
3号墓墓室ピットA検出状況

同上

3号墓墓室内

2号墓の前ピットB検出状況

図版12　5号墓



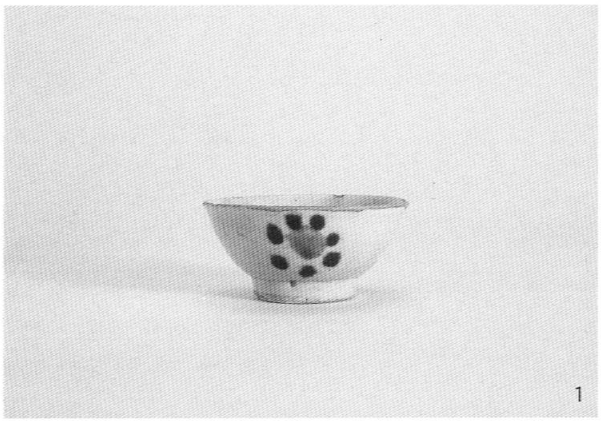
5号墓全景

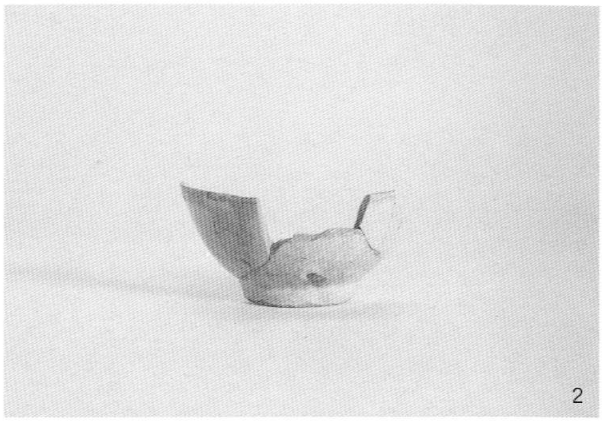
5号墓カビアンジ

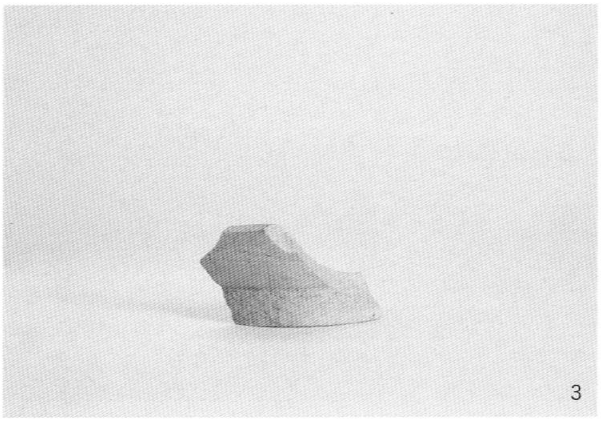
5号墓墓庭西側壁

5号墓墓庭東側壁

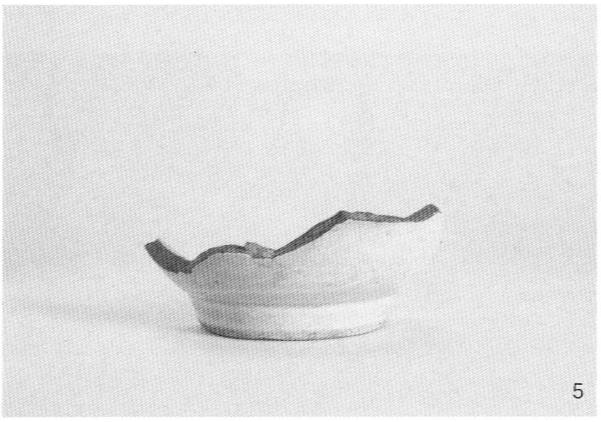
図版14　出土遺物

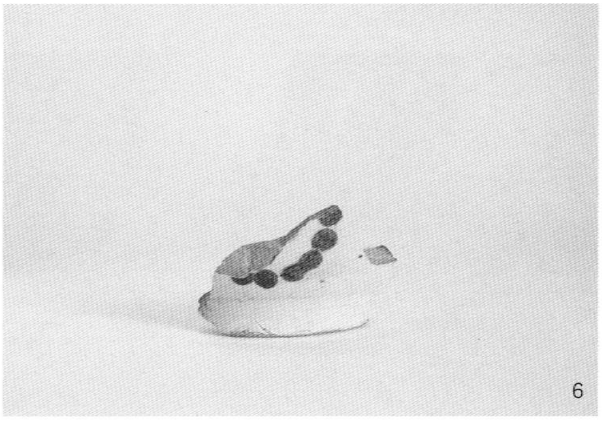

1


2


3

4


5

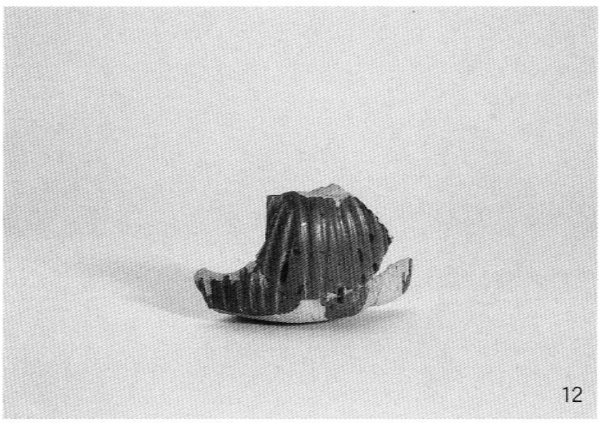

6

7

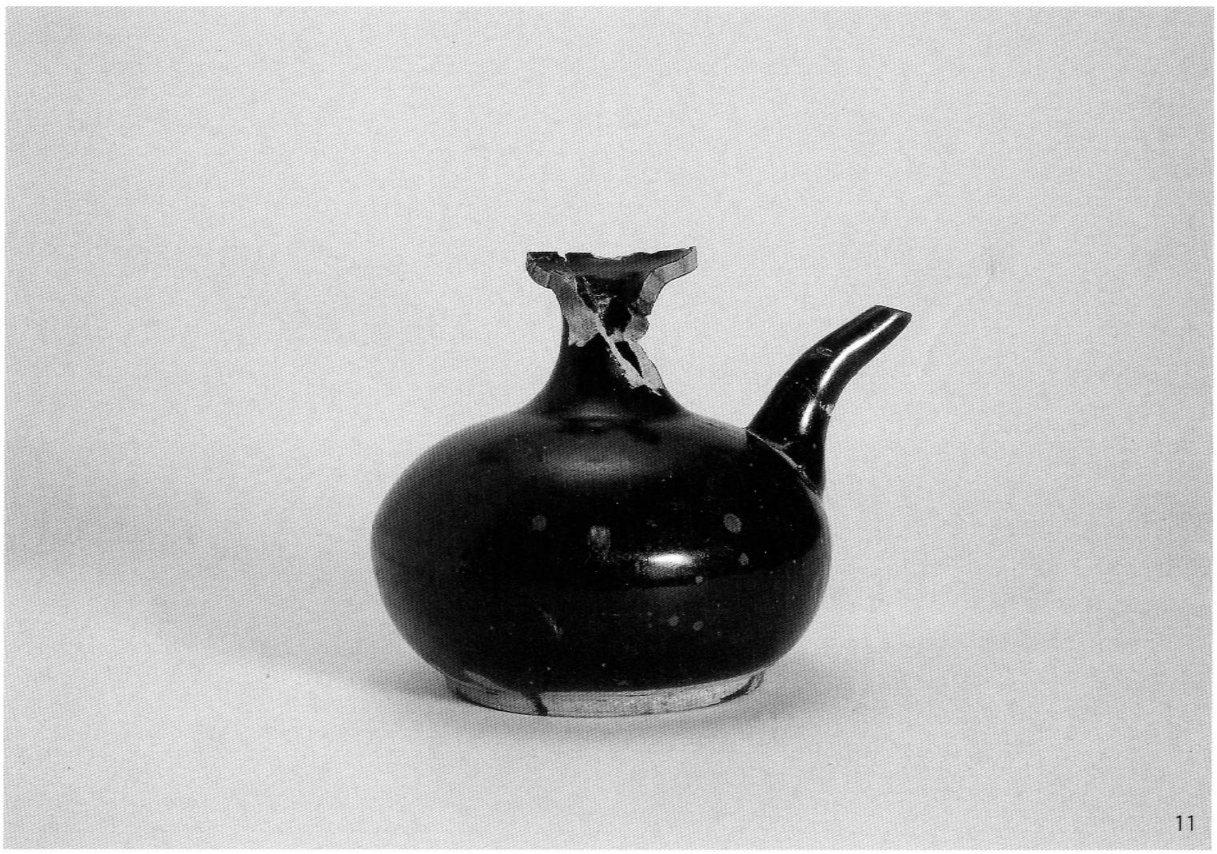
8

9

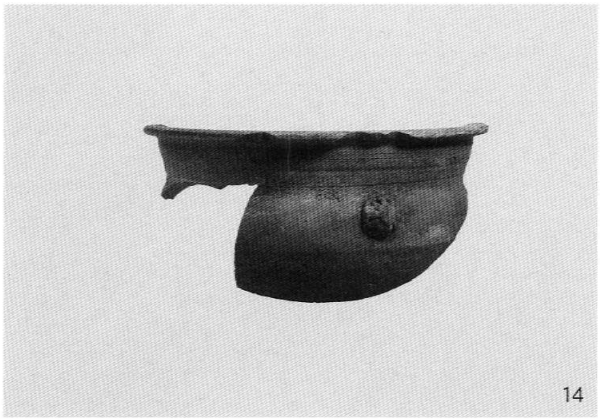
10

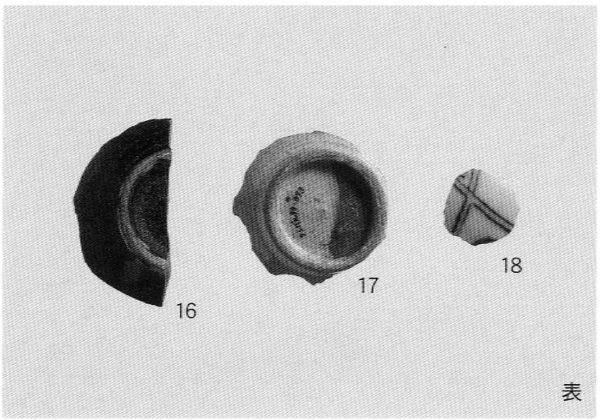

12

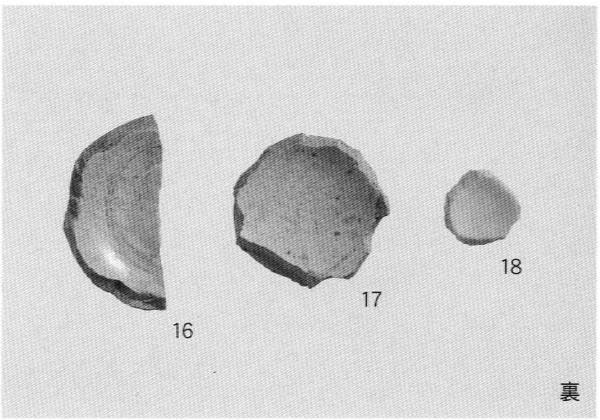
13

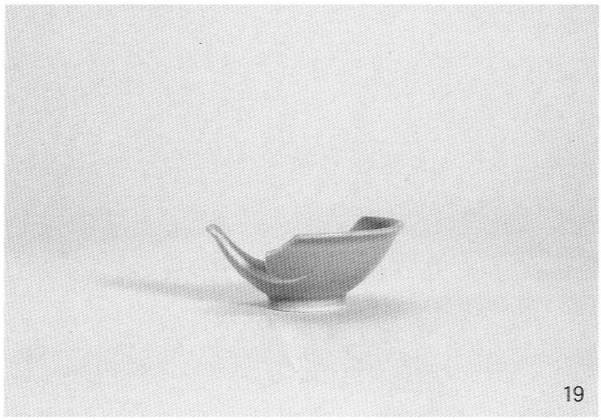

11

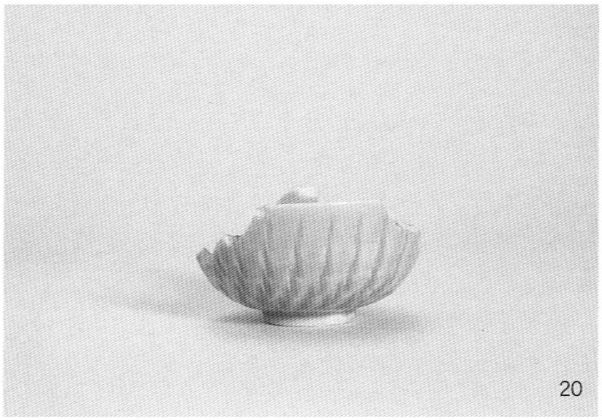
図版16　出土遺物

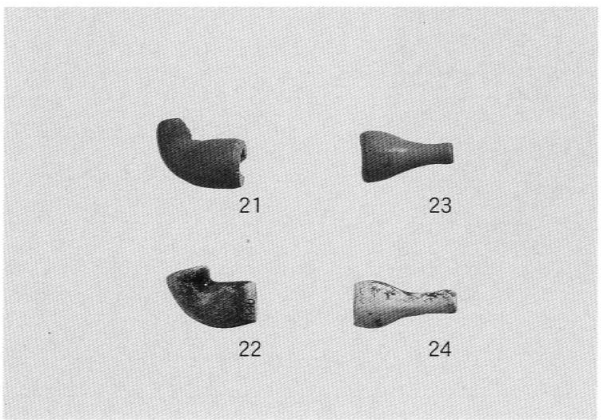


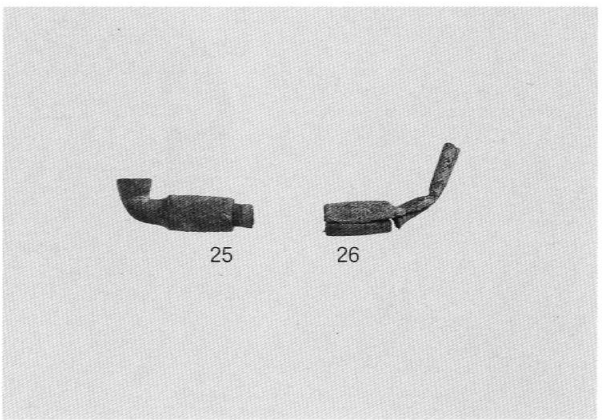


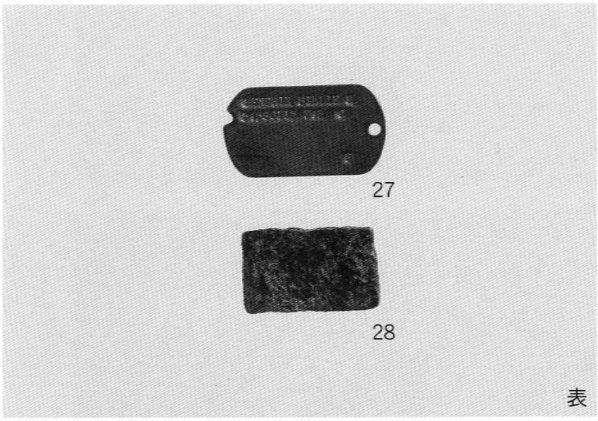


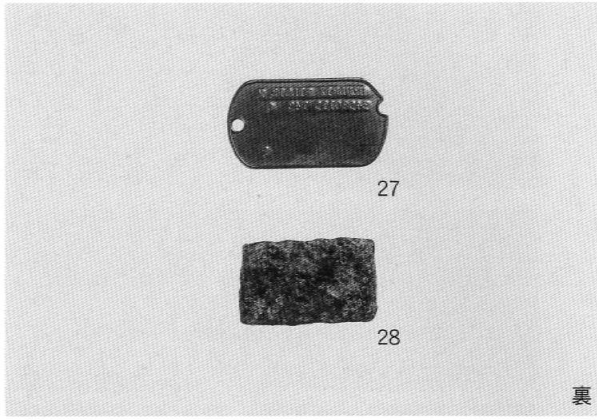


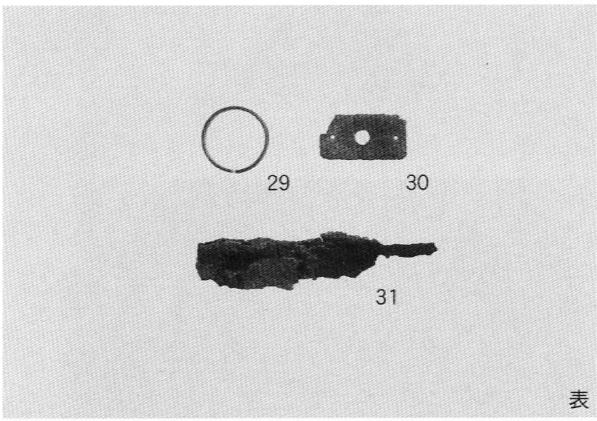


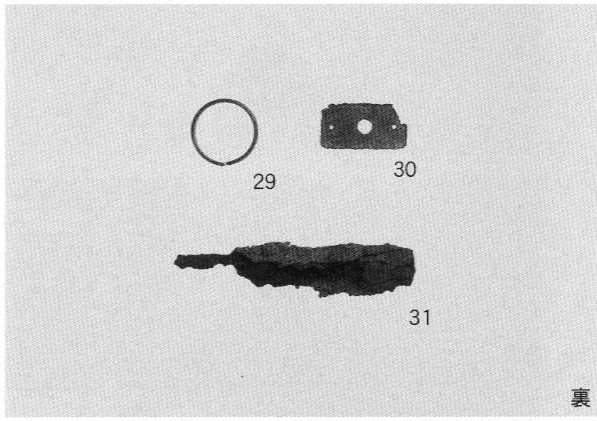


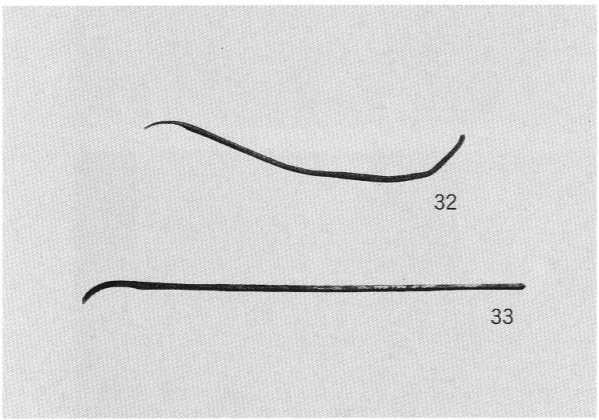


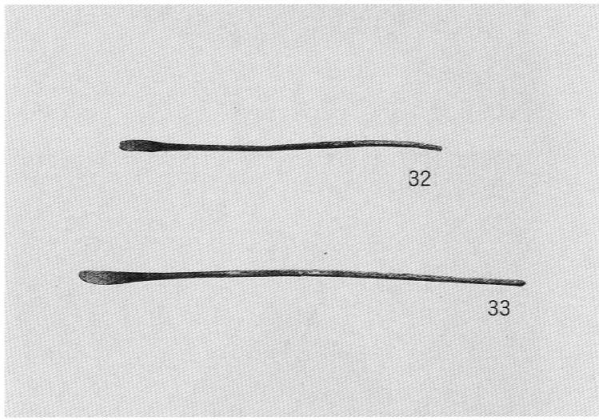

27
28
表

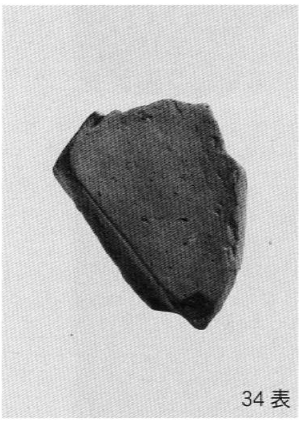

27
28
裏

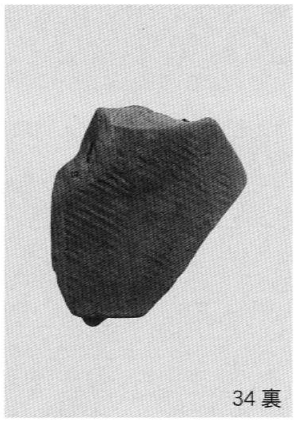

29
30
31
表

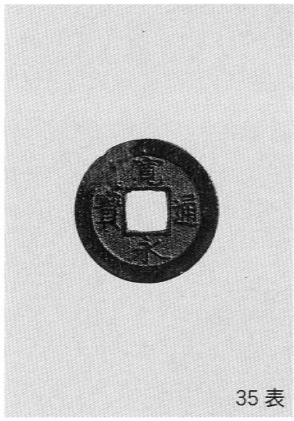

29
30
31
裏

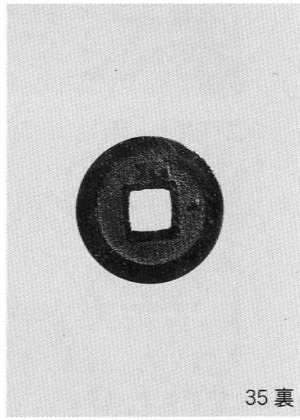

32
33


32
33

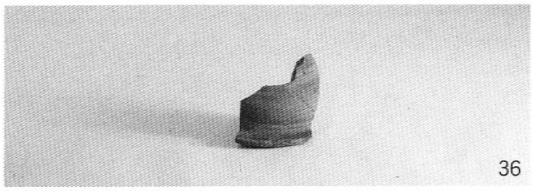

34 表

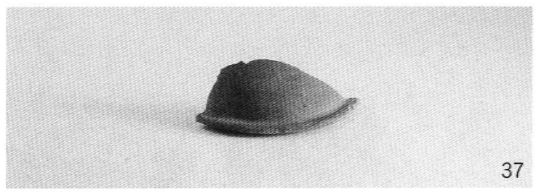

34 裏

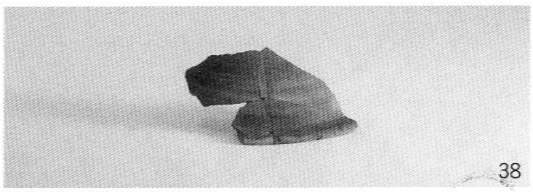

35 表

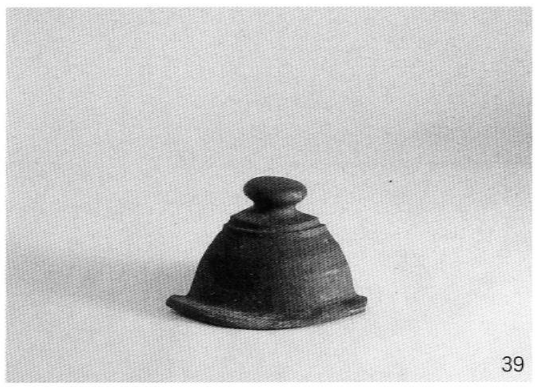

35 裏

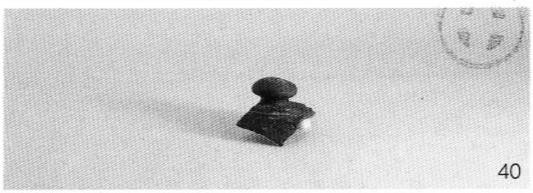
図版18　出土遺物


36

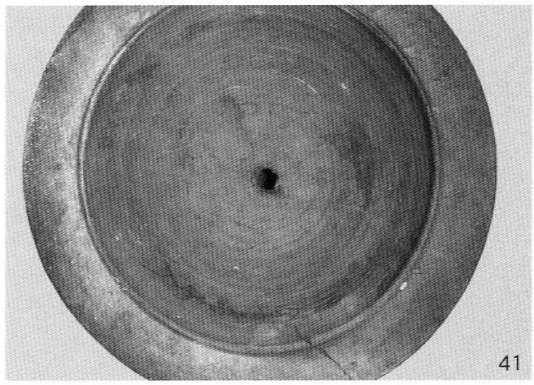

37

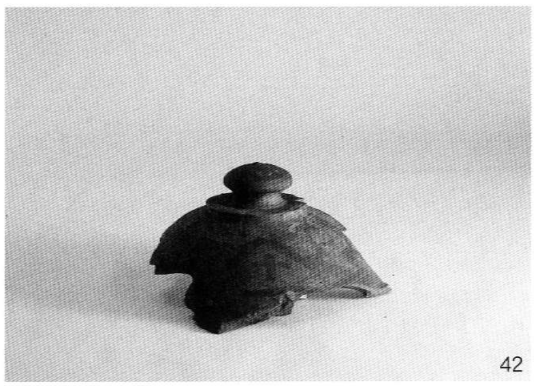

38

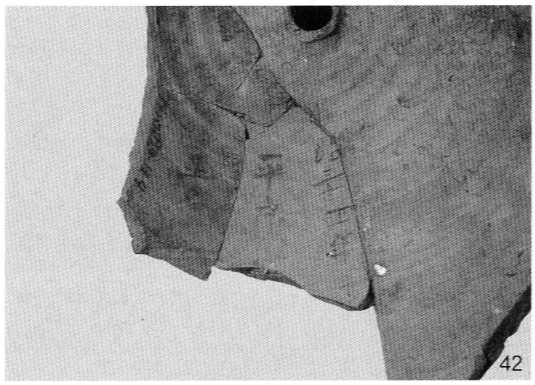

39

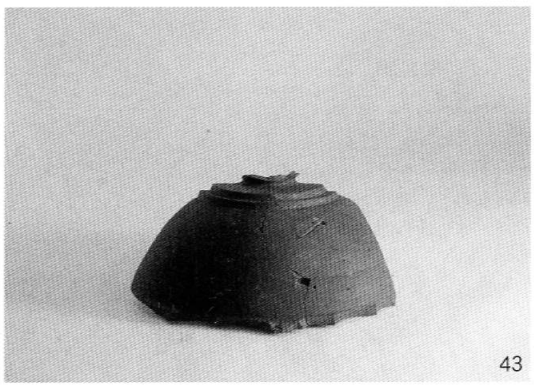

40

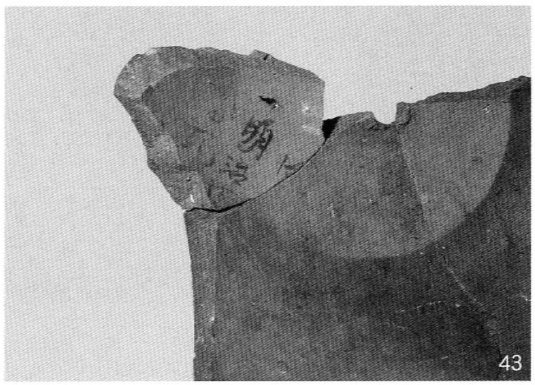
41

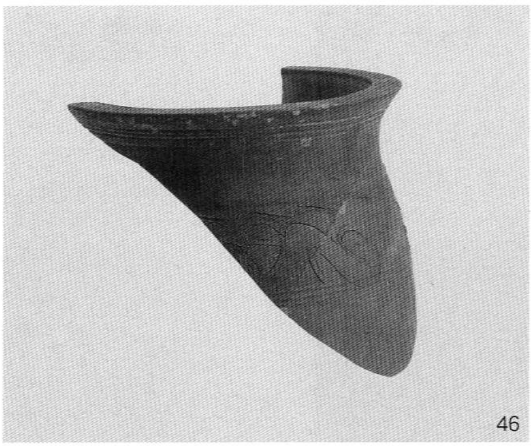

41

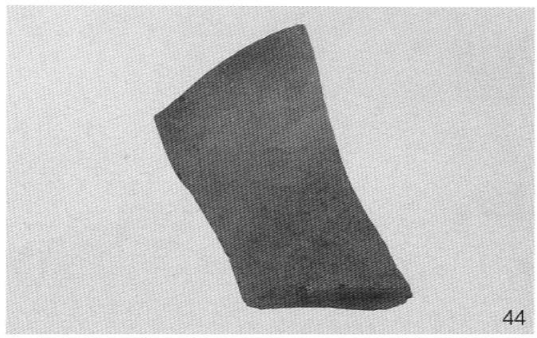

42

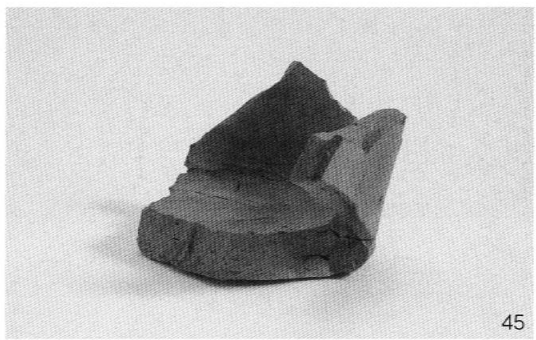

42


43

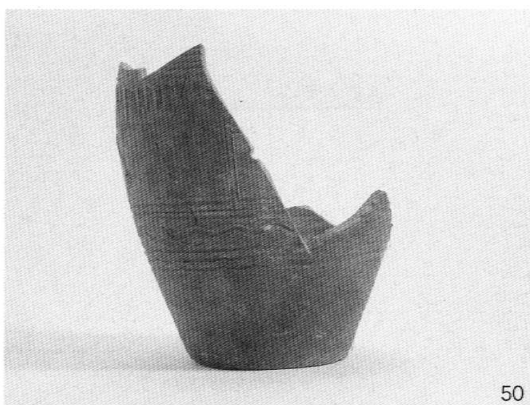

43


46


44


45

49


50

48

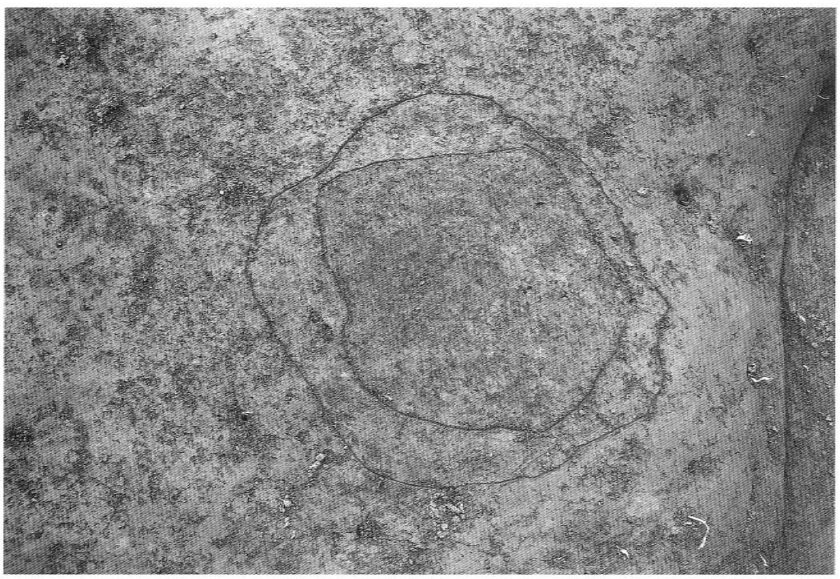
47

図版20

遠景（北東より）

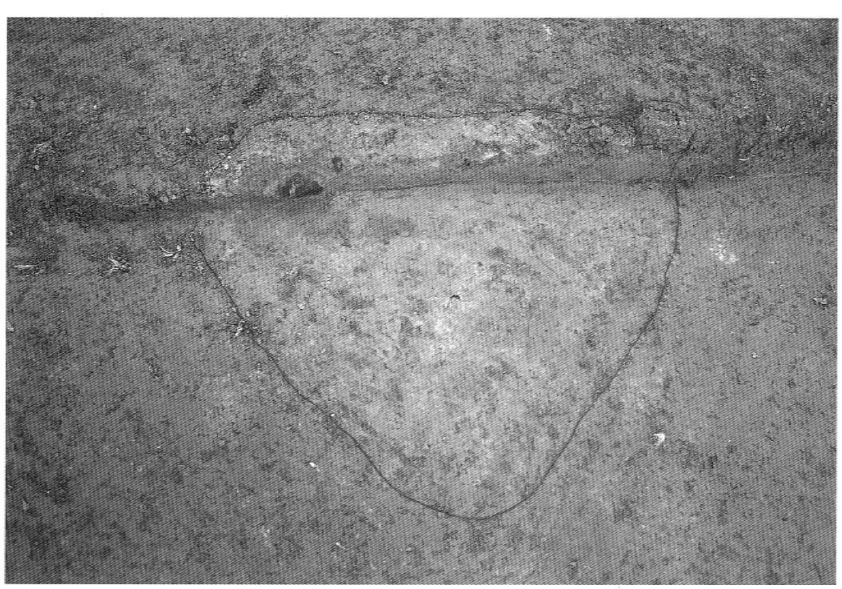
近景（南東より）
奥：第一次調査区
手前：第二次調査区

層序（トレンチ１西壁）
竪穴状遺構付近



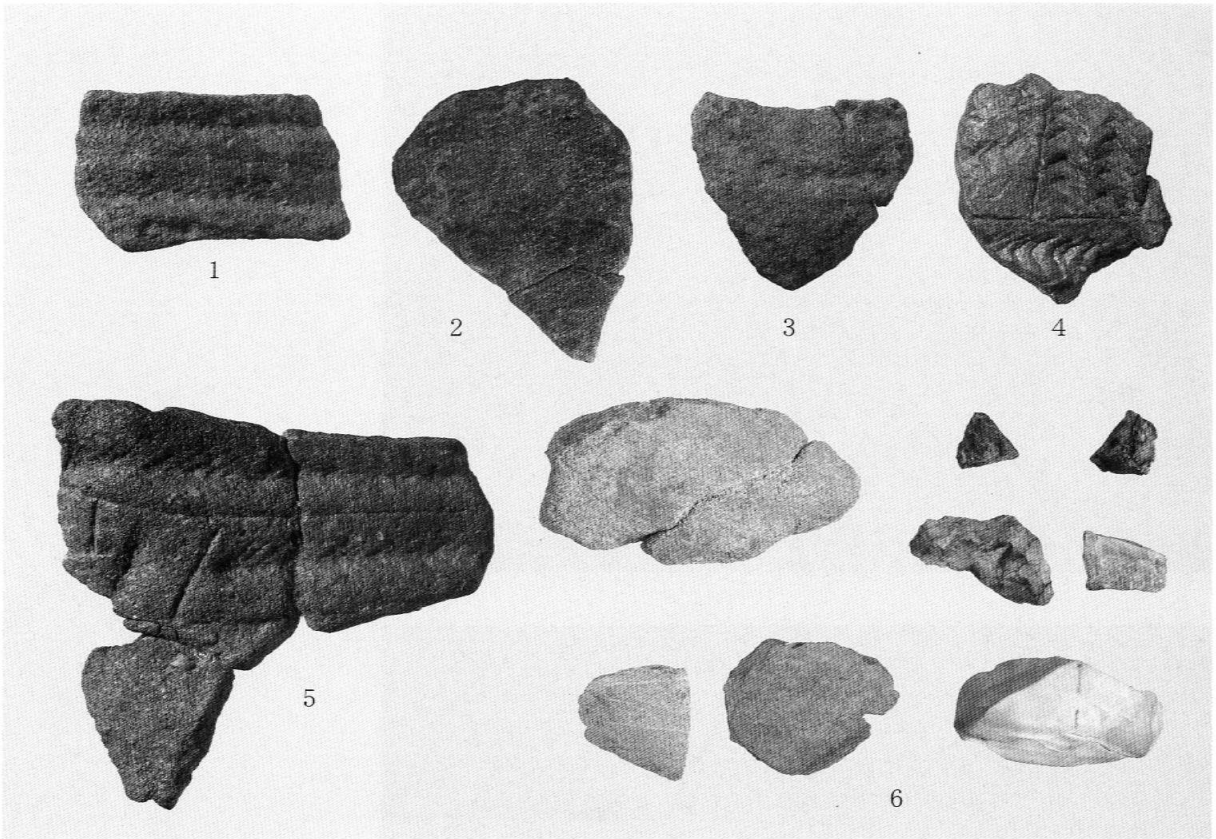
ピット検出状況

ピット検出状況

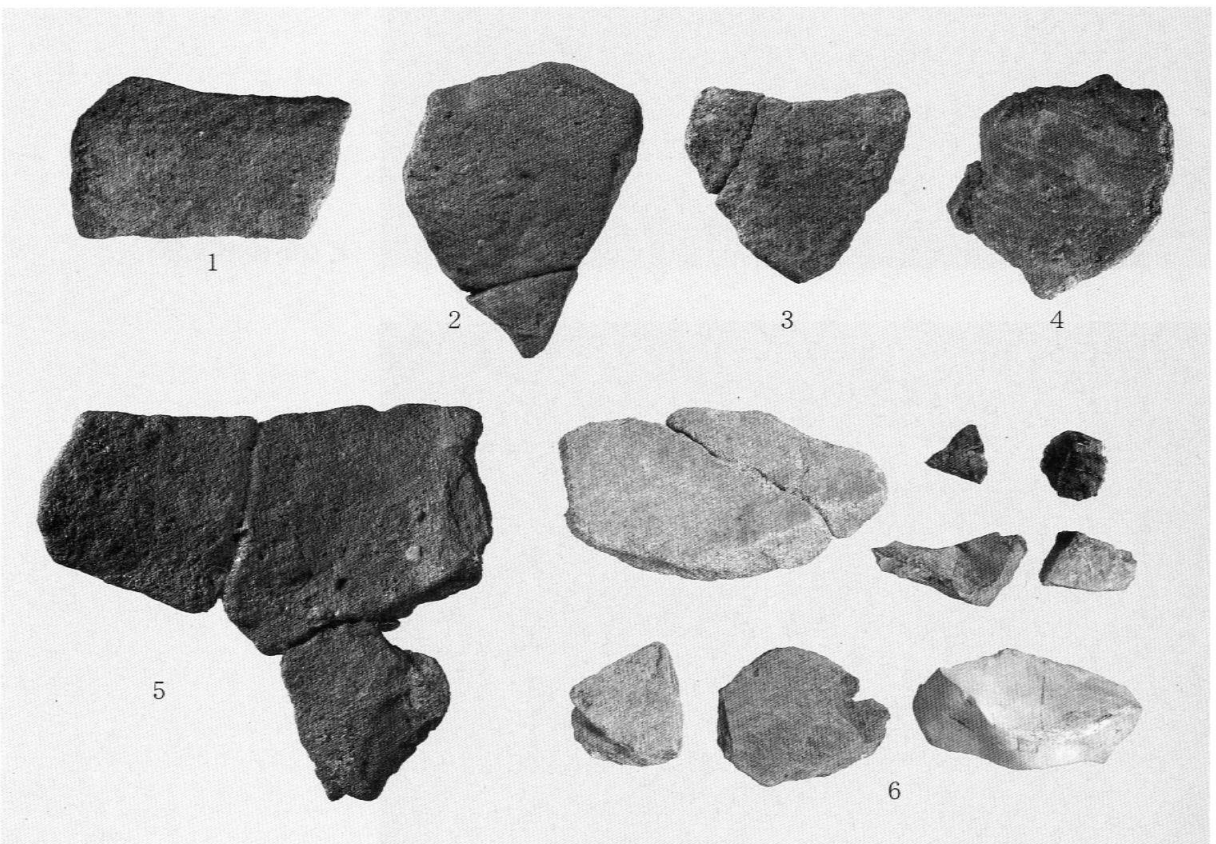


ピット検出状況

図版22

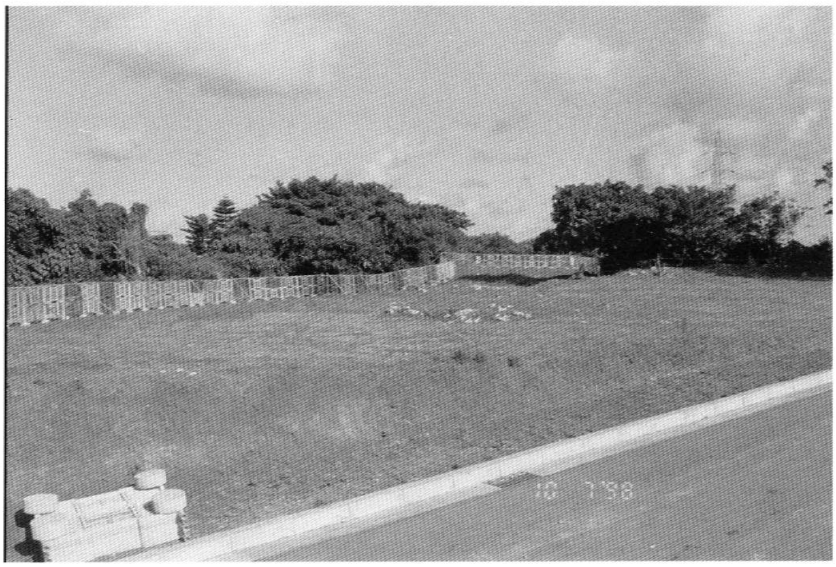


出土遺物



出土遺物

除草前の状況（北から）



除草後の状況（南から）

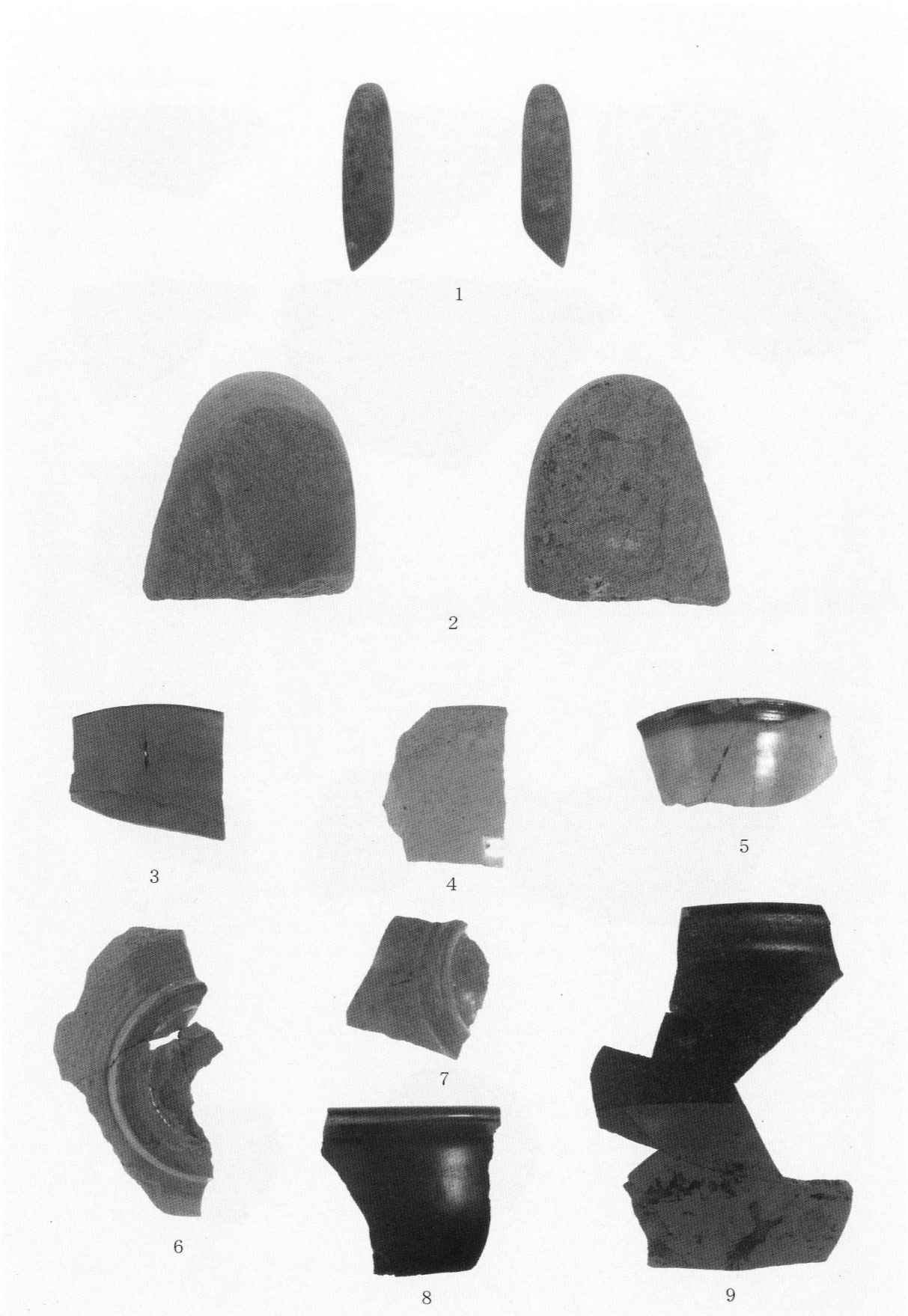
調査地区全景（南から）

図版24

層序（南北畦の東壁）

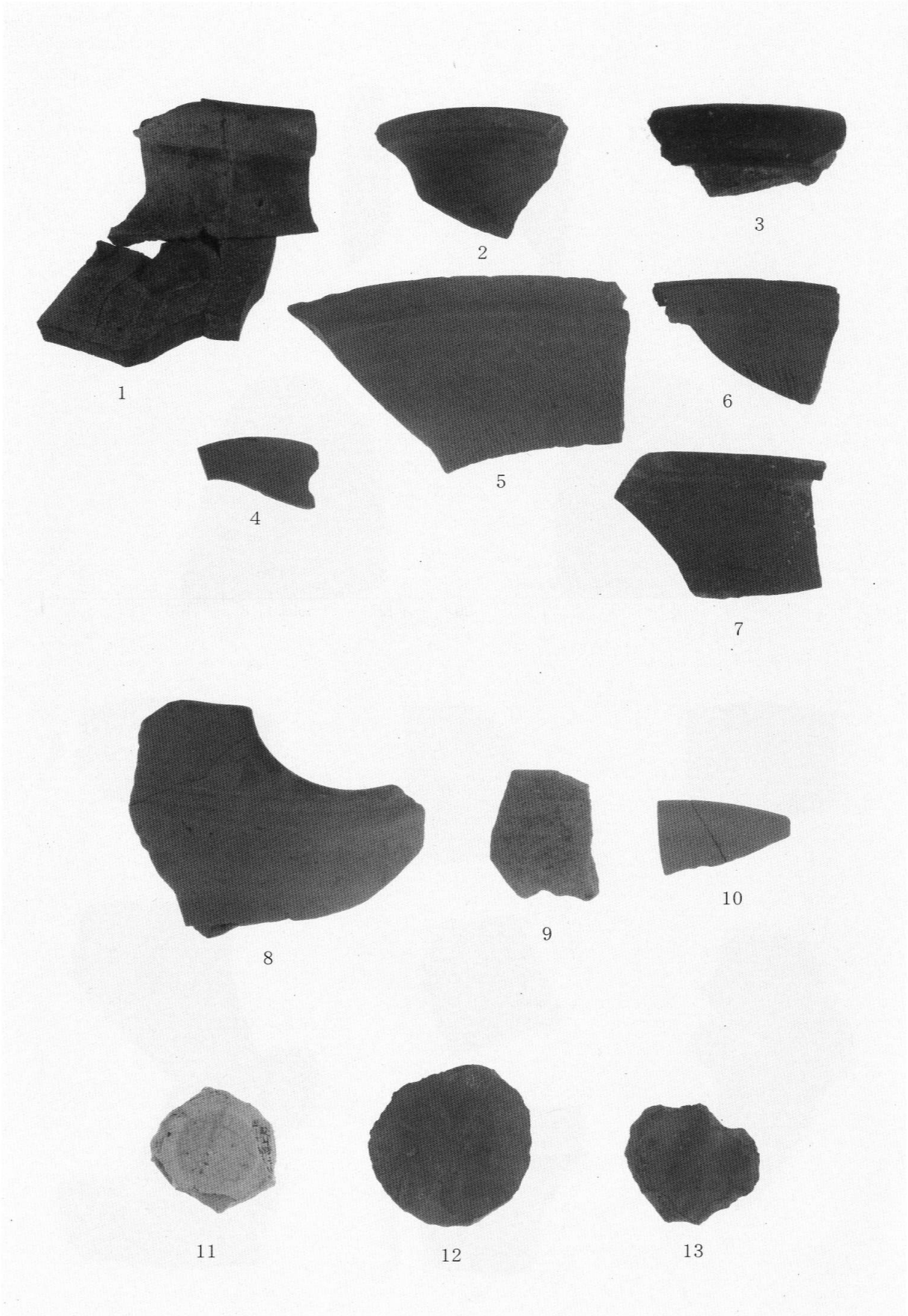
層序（東西畦の北壁）

ピット状遺構発掘状況



小型石斧(1)、磨石(2)、施釉陶器(3~9)

図版26



無釉焼締陶器（1~7）、陶質土器（8~10）、円盤状製品（11~13）

報告書抄録

ふりがな	なかまくしばるきんせいぼぐん・うらそえかいづか
書名	仲間後原近世墓群・浦添貝塚
副書名	浦添大公園整備事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	浦添市文化財調査研究報告書
編著者名	松川章、渡久地政嗣、仁王浩司
編集機関	浦添市教育委員会
所在地	浦添市安波茶一丁目１番１号
発行年月	2009年３月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
仲間後原近世墓群（なかまくしばるきんせいぼぐん）	沖縄県（おきなわけん）浦添（うらそえ）市仲間（しなかま）・伊祖（いそ）	47208		26° 15′ 14″	127° 43′ 30″	1999. 11. 8 ～ 2000. 2. 15	570	公園整備
浦添貝塚（うらそえかいづか）	沖縄県（おきなわけん）浦添（うらそえ）市伊祖（いそ）	47208		26° 15′ 17″	127° 43′ 30″	1997. 9. 22 ～ 1997. 11. 14 1998. 10. 16 ～ 1998. 11. 26	78 930	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仲間後原近世墓群	墓	近世	平葺墓３基 破風墓１基	厨子甕、沖縄産陶器、キセル、簪、等	シルヒラシへの獣骨の埋納、墓庭への酒器埋納
浦添貝塚	貝塚	貝塚時代	竪穴状遺構 ピット状遺構	嘉徳Ⅰ式Ａ土器、石片 小型片刃石斧、磨石	竪穴状遺構の検出・保存

浦添市文化財調査研究報告書
仲間後原近世墓群
浦添貝塚
浦添大公園整備事業に伴う発掘調査報告書
2009年3月

編集・発行　浦添市教育委員会
〒901－2501　沖縄県浦添市安波茶一丁目1番1号
Tel. 098－876-1234　Fax. 098－878-1487
印刷・製本　株式会社　尚生堂